奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成12年度

2002

奈良市教育委員会

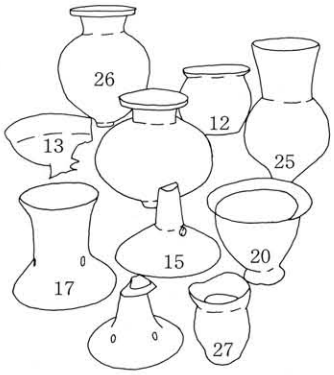
奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成12年度

2002

奈良市教育委員会

口絵1　弥生土器（47頁）



口絵2　絵画土器（47頁25）

口絵3　絵画土器（47頁23）

三条遺跡・平城京左京四条四坊五坪
の調査（HJ第446次）
（本文44～47頁）

口絵4　磚仏

平城京右京二条三坊十一坪の調査（HJ第443-2次）

（本文16～29頁）

奈良時代の遺物包含層から出土した十二尊連坐磚仏である。二尊分の破片で、残存する大きさは、高さ6.4cm、幅7.1cm、厚さ1.7cmである。裏面が剥離しているので、本来はもう少し厚みがあると思われる。尊像は、上下２段の蓮華座上に左足を上に結跏趺座して、印を結んでいる。衲衣は偏袒右肩にまとう。光背には、頭光と身光があり、ともに火炎が施される。頭光の上には、垂飾がついた天蓋がある。尊像の間は、凸線で区画される。

十二尊連坐磚仏とは、十二尊を上下３段、左右４列に並べたものである。出土したものは、２段目か３段目で、左から1列目か２列目であると思われる。十二尊すべて揃っていれば、高さ約18.0cm、幅約14.0cmに復原できる。

同笵と思われる磚仏が、平城京内では興福寺（県1995年度調査）、西大寺[1]、西隆寺[2]から出土している。（山前）

1）奈良国立文化財研究所編『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』西大寺、1990。

2）奈良国立文化財研究所編『西隆寺発掘調査報告書』西隆寺跡調査委員会、1976。

口絵5　磚仏

平城京左京三条二坊九坪の調査（HJ第445次）

（本文52～54頁）

奈良時代の整地層から出土した小型方形三尊磚仏である。中尊と向かって左脇侍部分の破片で、残存する大きさは、高さ5.0cm、幅3.9cm、厚さ1.1cmである。高さ7.0cm、幅4.7cmと推定できる。

中尊は、宣字座に倚座して印を結んでいるものと思われる。両足で蓮華座を踏み、衲衣は偏袒右肩にまとう。首から上は欠損している。向かって左の脇侍は、摩滅や欠損が激しく、詳細は不明であるが、蓮華座上に立ち、左手で何かを持っていること、頭部に頭光があることが確認できる。中尊の左側には、向かって右の脇侍の右手と思われるものが確認できる。裏面には縄タタキメが残る。

同笵と思われる磚仏が、奈良町遺跡の中世の井戸から出土している[3]。完存しており、高さ7.0cm、幅4.7cm、厚さ0.9cmである。（山前）

3）奈良女子大学埋蔵文化財調査会編『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅱ』奈良女子大学、1984。
倉吉博物館『塼仏―土と火から生まれた仏たち―』1992。

口絵6　南大門北階段（北発掘区全景、北西から）
史跡大安寺旧境内の調査（DA第92次）
（本文86～91頁）

口絵7　出土塑像（右：等身大立像の腕部／左：邪鬼の頭髪部）
史跡大安寺旧境内の調査（DA第92次）
（本文86～91頁）

口絵8　最勝院の礎石建物（北東から）
奈良町遺跡の調査（NR第1次）
（本文126頁）

口絵9　石垣・埋甕（南から）
奈良町遺跡の調査（NR第1次）
（本文123頁）

はじめに

奈良市教育委員会は、市民の皆様の文化財保護に対する御理解と御協力のもとに、毎年、平城京跡を中心に発掘調査を実施しています。また、史跡大安寺旧境内保存整備事業として、平成10年度から南大門の発掘調査を実施してきましたが、本報告書に掲載している調査で、南大門地区の発掘調査は終了し、保存整備に着手しています。平成13年度からの発掘調査は、南大門から塔院にうつり、こちらも保存整備のための準備に入ります。今後、発掘調査成果を活かした、保存整備を行っていきたいと思います。

本書は、平成12年度に行った埋蔵文化財の発掘調査の成果の概要をまとめたものです。多くの皆様に御活用いただき、奈良市の埋蔵文化財に対する理解を深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の作成にあたって御指導、御協力くださった関係機関の皆様にたいしまして、厚く御礼申し上げます。

平成14年　7月

奈良市教育委員会
教育長　冷水　毅

例　言

1　本書は、平成12年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要をまとめたものである。

2　調査と本書作成の体制については下記の通りである。なお、各調査の現地担当者は発掘調査一覧表に示した。

社会教育部　文化財課　課　長　西村廣彦（～平成13年度）
前原武嗣（平成14年度～）
主　幹　前原武嗣（～平成13年度）
森川倫秀（平成13年度～）
埋蔵文化財調査センター　所長　髙谷明男
庶務係　係長　杉村武史　事務吏員　山形和広
調査第一係　係長　西崎卓哉　主任　立石堅志（平成14年度～）
技術吏員　立石堅志（～平成13年度）　鐘方正樹　松浦五輪美　安井宣也
池田裕英　中島和彦　久保邦江　宮﨑正裕　久保清子　原田香織
大窪淳司　細川富貴子
調査第二係　係長　篠原豊一　主任　三好美穂（平成14年度～）
技術吏員　三好美穂（～平成13年度）　森下浩行　秋山成人　原田憲二郎
武田和哉　山前智敬

3　発掘調査と本書の作成にあたっては、奈良文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会等関係諸機関から御指導と御教示を賜わった。また、土地所有者等からの多大な協力をいただいた。記して感謝いたします。

4　各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数である。
遺跡の略号は次の通りである。なお、平城京跡については遺跡の略号を省略した場合がある。
平城京跡-HJ　平城京東市跡推定地-TI　大安寺旧境内-DA　元興寺旧境内-GG　水間遺跡-MM
奈良町遺跡-NR　上ノ口遺跡-UK　南市跡推定地-MI　古市城跡-FJ　コナベ古墳-KN

5　本書の作成は、埋蔵文化財調査センター職員が分担して行ない、文末に文責を示した。

6　本書で使用した遺構等の番号は、一部を除いて、調査ごとに付した仮番号である。遺構の番号の前には、SA（築地・塀）、SB（建物）、SD（溝・濠）、SE（井戸）、SF（道路）、SK（土坑）、SX（その他）の記号を付した。また、遺構の大きさの表記は、すべて遺構検出面での計測値である。

7　本書で使用した奈良時代の遺物の名称・形式・型式は、一部を除いて、以下の刊行物等に準拠した。

軒瓦：『平城京藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会、1996。

鬼瓦：毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦－8世紀を中心として－」『研究論集Ⅳ』奈良国立文化財研究所、1980。

土器：『平城宮発掘調査報告書Ⅺ』奈良国立文化財研究所、1982。

8　引用文献のうち、奈良市教育委員会、奈良県教育委員会、奈良（国立）文化財研究所発行の概報・年報については、調査機関名（それぞれ市、県、国と表示）、調査記号と報告年度のみを本文中に記した。なお、市の調査については、機関名を省略したものがある。

9　発掘区位置図については、奈良市発行の1/2,500大和都市計画図を、調査地位置図については、国土地理院発行の1/25,000地形図を使用した。

10　本書の本文中、図中に示した位置の表示は、法改正（2002年4月1日）前の平面直角座標系Ⅵによる。

11　古墳時代以前の遺跡については、仮に大字名を付して遺跡名としたものもある。

12　本書の編集は、森下浩行が担当した。

本　文　目　次

Ⅰ　平城京跡の調査

1　近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に係る調査 …… 1

(1)　平城京跡（右京二条三坊六坪）の調査　第443-4・-5・-6次

(2)　平城京跡（右京二条三坊十一坪）の調査　第443-1・-2・-3次

(3)　菅原東遺跡・平城京跡（右京三条二坊十五坪）の調査　第443-7次

2　ＪＲ奈良駅周辺土地区画整理事業に係る調査 …… 43

(1)　三条遺跡・平城京跡（左京四条五坊五坪）の調査　第446次

(2)　平城京跡（左京四条五坊七坪）の調査　第452-1次

(3)　平城京跡（左京四条五坊六坪）の調査　第452-2次

(4)　平城京跡（左京三条五坊五坪）の調査　第452-3次

3　平城京跡（左京三条二坊九坪）の調査　第445次 …… 52

4　平城京跡（左京二条四坊一坪）の調査　第447次 …… 55

5　平城京跡（左京二条五坊五・十二坪）の調査　第444・448・456次 …… 58

6　平城京跡（右京七条一坊十五坪）の調査　第455次 …… 62

7　平城京跡（左京四条一坊九坪）の調査　第450・453次 …… 65

8　南新遺跡・平城京跡（左京四条一坊十四坪）の調査　第457次 …… 68

9　平城京跡（左京四条二坊八坪）の調査　第454次 …… 70

10　平城京跡（左京四条三坊十六坪）の調査　第442次 …… 72

11　平城京跡（左京二条三坊四坪）の調査　第451次 …… 74

12　平城京跡（左京五条一坊十四坪）の調査　第458次 …… 76

13　平城京跡（左京三条六坊六坪）・奈良町遺跡の調査　第449次 …… 78

14　平城京東市跡推定地の調査　第26次 …… 80

Ⅱ　寺院跡の調査

1　史跡大安寺旧境内の調査　第88次～第92次 …… 85

2　元興寺旧境内の調査　第52次～第54次 …… 101

Ⅲ　その他の調査

1　水間遺跡の調査　第1・2・3次 …… 107

2　奈良町遺跡の調査　第1・2次 …… 121

3　コナベ古墳の調査　第4次 …… 132

4　南市跡推定地の調査　第2次 …… 134

5　古市城跡の調査　第3次 …… 135

6　上ノ口遺跡の調査　第1次 …… 136

7　試掘調査及び確認調査 …… 137

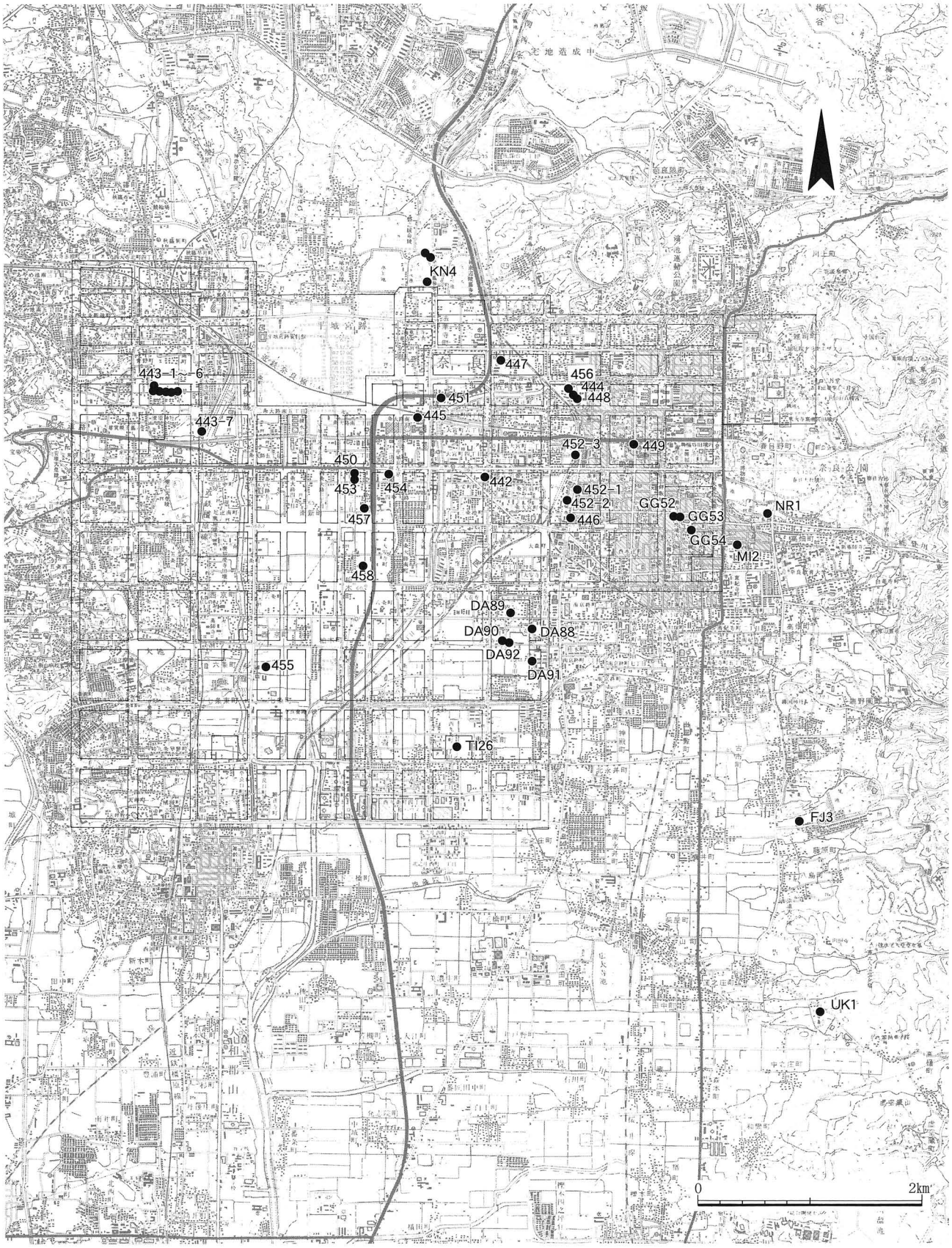
8　工事立会 …… 138

Ⅳ　自然科学分析

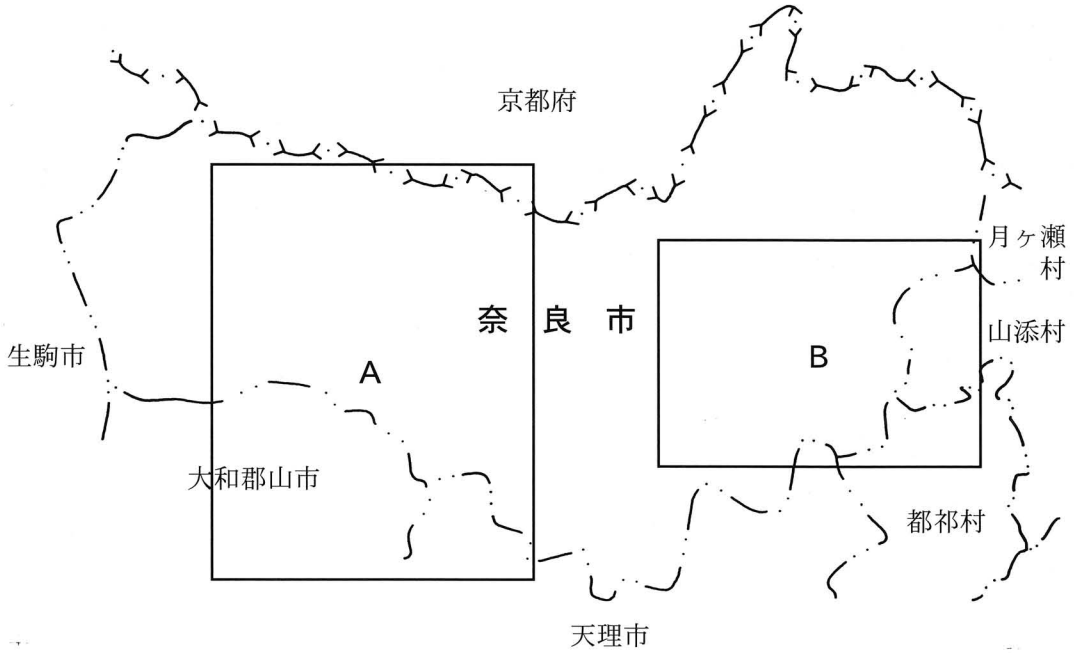
1　水間遺跡採取試料の自然科学分析 …… 145

2　三条遺跡採取試料の自然科学分析 …… 154

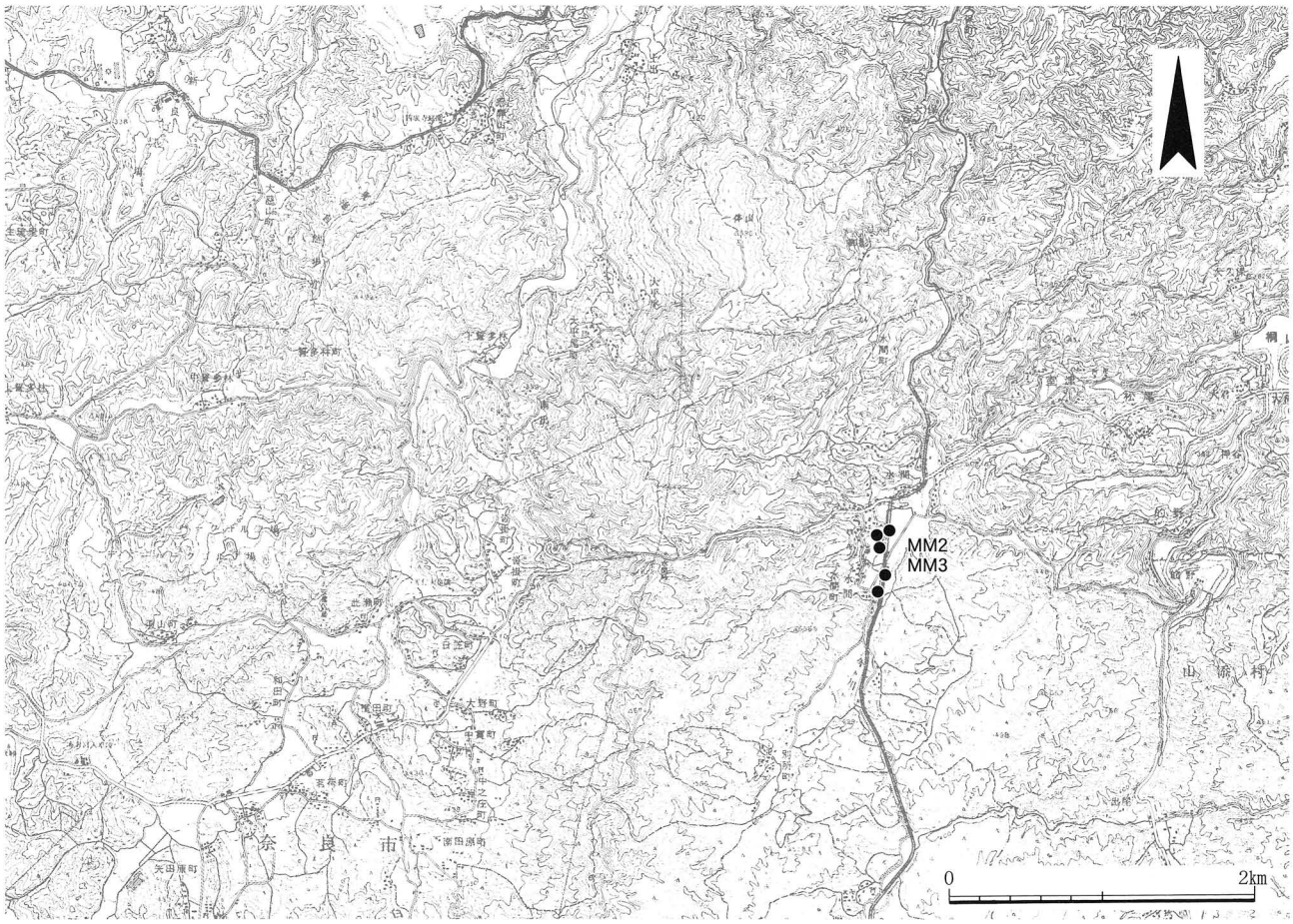
3　平城京跡採取試料の自然科学分析 …… 159



平成12年度　発掘調査地位置図A　1/50,000



奈良市域と位置図A・Bとの関係　1/200,000



平成12年度　発掘調査地位置図B　1/50,000

平成12年度　発掘調査一覧表

番号	調査次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積	担当者	届出者／事業内容	届出番号
1	442	平城京左京四条三坊十六坪	三条添川町125-4	H12. 4.10 ～ 4.25	120㎡	秋山	クボタハウス㈱／共同住宅建設	H11：3286
2	443-1	平城京右京二条三坊十一坪	菅原町287-1	H12. 4.27 ～ 7.14	990㎡	松浦・細川	奈良市長／近鉄西大寺駅南土地区画整理事業	S63：3056
3	443-2	平城京右京二条三坊十一坪	菅原町269、270	H12. 4.28 ～ 7.21	1.081㎡	中島・久保清		
4	443-3	平城京右京二条三坊十一坪	菅原町271、272	H12. 7.25 ～ 10. 3	786㎡	中島・久保清		
5	443-4	平城京右京二条三坊六坪	菅原町211-1	H12. 5.22 ～ 6. 3	355㎡	立石		
6	443-5	平城京右京二条三坊六坪	菅原町213-1	H12.10.16 ～ 12. 8	630㎡	松浦・細川		
7	443-6	平城京右京二条三坊六坪	菅原町212	H12. 7.24 ～ 9.29	700㎡	松浦・細川		
8	443-7	菅原東遺跡・平城京右京三条二坊十五坪	横領町413	H12.10.16 ～ 12.28	725㎡	中島・久保清		
9	444	平城京左京二条五坊五坪	畑中町15、16、18、19-1、船橋町22～24	H12. 4.26 ～ 5.24	101㎡	安井	奈良市長／仮称地区施設建設事業	H10：3176
10	445	平城京左京三条二坊九坪	二条大路南1丁目1-1	H12. 5. 1 ～ 6. 9	180㎡	大窪	奈良市長／庁舎等施設整備事業	H12：3013
11	446	三条遺跡・平城京左京四条五坊五坪	三条本町376-6、377-1	H12. 5.16 ～ 7. 6	323㎡	久保邦	奈良市長／JR奈良駅周辺土地区画整理事業	S63：3055
12	447	平城京左京二条四坊一坪	法蓮町393、395-2	H12. 5.23 ～ 7.27	650㎡	宮崎	奈良市長／仮称佐保川保育園建設事業	H12：3049
13	448	平城京左京二条五坊五坪・十二坪	畑中町4-1、ほか	H12. 6.20 ～ 8.12	500㎡	安井	奈良市長／畑中小規模住宅地区改良事業	H10：3176
14	449	平城京左京三条六坊六坪・奈良町遺跡	林小路町48-1、ほか	H12. 7.10 ～ 7.28	80㎡	山前	アーバンライフ㈱／共同住宅建設	H12：3077
15	450	平城京左京四条一坊九坪	四条大路2丁目832-1、834-1	H12. 7.10 ～ 7.29	200㎡	秋山	宗教法人観音庵／講堂建設	H11：3348
16	451	平城京左京二条三坊四坪	法華寺町214-1、ほか	H12. 7.17 ～ 8. 2	303㎡	武田	㈱大和産業／共同住宅建設	H12：3073
17	452-1	平城京左京四条五坊七坪	三条本町528、ほか	H12. 7.24 ～ 10.13	1,170㎡	久保邦	奈良市長／JR奈良駅周辺土地区画整理事業	S63：3055
18	452-2	平城京左京四条五坊六坪	三条本町334-1	H12.11. 6 ～ 12. 5	250㎡			
19	452-3	平城京左京三条五坊五坪	大宮町1丁目26-3	H12.12. 4 ～ 12.26	102㎡			
20	453	平城京左京四条一坊九坪	四条大路2丁目834-1	H12. 8.10 ～ 8.31	180㎡	秋山	宗教法人観音庵／庫裏建設	H11：3348
21	454	平城京左京四条二坊八坪	四条大路1丁目788、789-1、-2	H12. 8.22 ～ 9.22	264㎡	三好	奈良スバル自動車㈱／店舗建設	H 9：3173
22	455	平城京右京七条一坊十五坪	六条町102-1の一部、ほか	H12. 8.23 ～ 9.14	198㎡	武田	医療法人康仁会／病院増築	H11：3249
23	456	平城京左京二条五坊五坪・十二坪	法蓮町56-5	H12. 9.18 ～ 9.25	113㎡	安井	奈良市長／第3号（桜町）市営住宅建替事業	H12：3137
24	457	平城京左京四条一坊十四坪	四条大路2丁目30-1	H12. 9.21 ～ 10.12	100㎡	秋山	宗教法人観音庵／客殿建設	H12：3141
25	458	平城京左京五条一坊十四坪	柏木町528-4、ほか	H12.10.13 ～ 10.23	50㎡	池田	奈良市長／仮称柏木東西線道路改良工事	H12：3074
26	TI26	平城京東市跡推定地	杏町592	H13. 1. 9 ～ 3. 6	420㎡	秋山	範囲確認調査	
27	DA88	史跡大安寺旧境内	大安寺1丁目1250、ほか	H12. 8. 3 ～ 9.27	470㎡	宮崎	奈良市長／大安寺幼稚園園舎建設事業	H11：1052
28	DA89		大安寺4丁目1056-1の一部、ほか	H12. 8.21 ～ 8.30	23㎡	山前	個人／個人住宅建設	H12：1003
29	DA90		大安寺町2丁目18-1	H12. 9.28 ～ 10.18	107㎡	三好	宗教法人大安寺／擁壁築造	H12：1006
30	DA91		東九条町1405	H12.11.27 ～ 12. 5	72㎡	山前	個人／農業用倉庫建設	H12：1011
31	DA92		大安寺2丁目1299-1	H12.12. 4 ～ H13. 2.20	54㎡	宮崎・池田	奈良市教育委員会教育長／史跡大安寺旧境内保存整備事業	H11：1057
32	GG52	脇戸古墳・元興寺旧境内・奈良町遺跡	脇戸町12-4	H12. 6.20 ～ 6.26	10㎡	武田	個人／個人住宅建設	H12：3009
33	GG53		脇戸町6-2、-3、-4、-5	H12. 8.24 ～ 9. 1	30㎡	安井	個人／個人住宅建設	H12：3152
34	GG54	元興寺旧境内・奈良町遺跡	芝新屋町10	H12.11. 6 ～ 11.22	43㎡	武田	個人／個人住宅建設	H12：3192
35	MM2	水間遺跡	水間町489、ほか	H12. 7.24 ～ 9. 5	790㎡	鐘方・大窪	奈良県北部農林振興事務所長／県営ほ場整備事業（田原東地区）	H11：3271
36	MM3		水間町119、ほか	H12.10.30 ～ H13. 2.15	2,700㎡			
37	NR1	奈良町遺跡	高畑町1200-1	H12. 6.29 ～ 9.25	140㎡	池田	奈良市長／仮称最勝院跡美術館建設事業	H12：3102
38	UK1	上ノ口遺跡	田中町602-1、603、604-2の一部	H12. 9.19 ～ 10. 6	500㎡	山前	社会福祉法人大和清寿会／社会福祉施設建設	H12：3065
39	KN4	コナベ古墳	法華寺町1805-1、-2	H12.11. 7 ～ 11.14	74㎡	池田	奈良市長／市道中部第184号線道路改良工事	H11：3179
40	MI2	南市跡推定地	紀寺町785	H12. 8. 3 ～ 8.23	125㎡	中島	奈良市長／飛鳥バンビーホーム建設事業	H12：3082
41	FJ3	古市城跡	古市町99-1	H12.10.24 ～ 11.15	130㎡	宮崎	奈良市長／仮称東市地域ふれあい会館建設事業	H12：3217

Ⅰ　平城京跡の調査

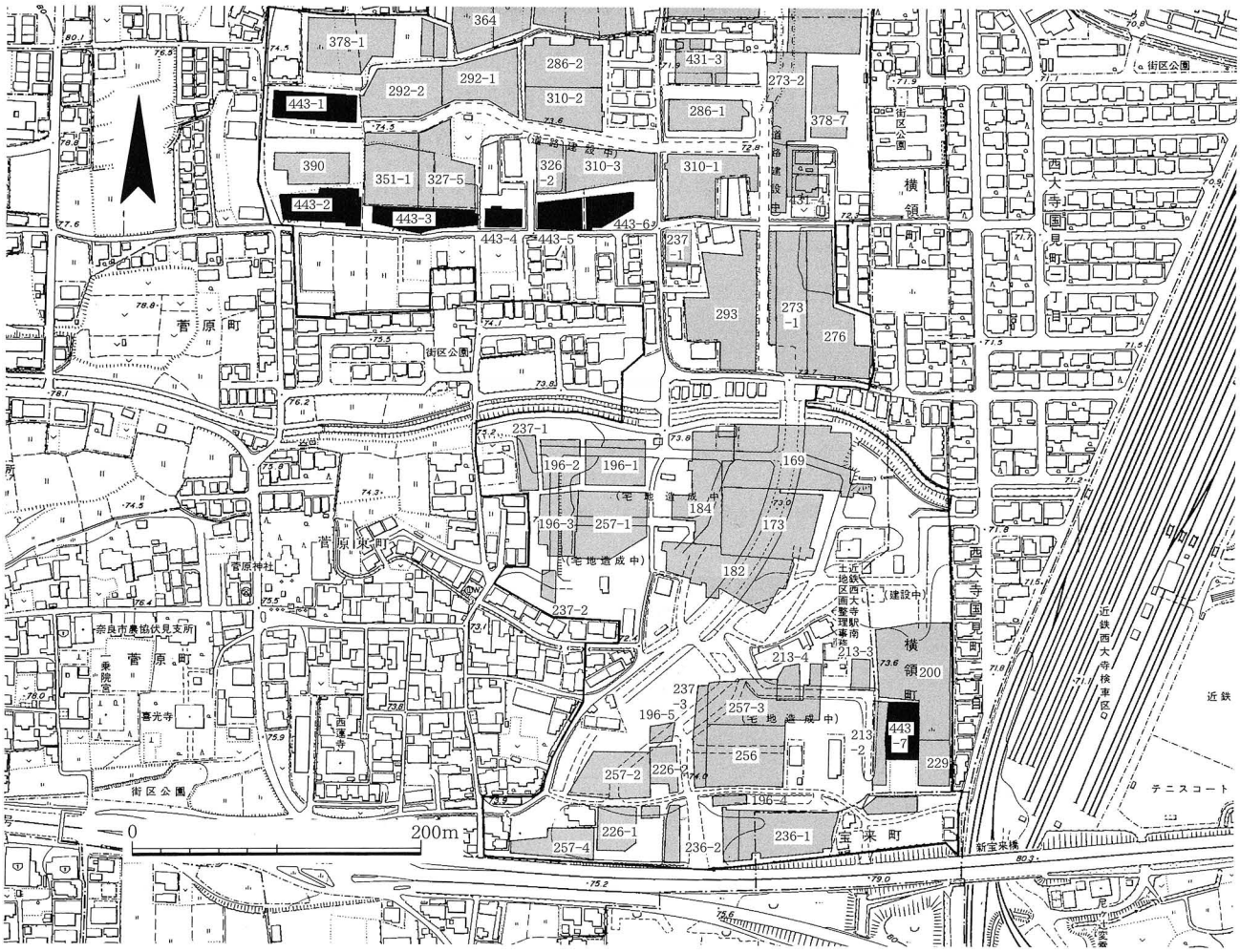
1．近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に係る調査

この調査は、奈良市が進める近鉄西大寺駅南土地区画整理事業（総面積約30万㎡）について実施した埋蔵文化財発掘調査である。奈良市教育委員会では、昭和63年度から事業地内の発掘調査を継続して実施している。平成12年度は下表に示したとおり、促進事業で7箇所の発掘調査を実施した。調査面積は5,267㎡であり、初年度からの総調査面積は98,347㎡になる。

平成12年度に実施した調査地は、平城京の条坊復原では、右京二条三坊六坪・十一坪、三条二坊十五坪の3坪に及んでいる。また、三条二坊十五坪での発掘区は、菅原東遺跡の範囲にも重なり、平成2年度に埴輪窯群が発見された地点の西側にあたる。ここでは、それらの調査を各坪ごとにまとめて報告する。なお、各報告で付した遺構番号は、これまでの各坪の調査からの通し番号である。

平成12年度　近鉄西大寺駅南土地区画整理事業地内発掘調査一覧表

遺跡名	調査次数	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
平城京跡 右京二条三坊十一坪	HJ443-1		菅原町287-1	平成12. 4.27 ～ 7.14	990㎡	松浦・細川
平城京跡 右京二条三坊十一坪	HJ443-2		菅原町269、270	平成12. 4.28 ～ 7.21	1.081㎡	中島・久保清
平城京跡 右京二条三坊十一坪	HJ443-3		菅原町271、272	平成12. 7.25 ～ 10. 3	786㎡	中島・久保清
平城京跡 右京二条三坊六坪	HJ443-4	促進事業（繰越）	菅原町211-1	平成12. 5.22 ～ 6.30	355㎡	立石
平城京跡 右京二条三坊六坪	HJ443-5		菅原町213-1	平成12.10.16 ～ 12. 8	630㎡	松浦・細川
平城京跡 右京二条三坊六坪	HJ443-6		菅原町212	平成12. 7.24 ～ 9.29	700㎡	松浦・細川
菅原東遺跡・平城京跡 右京三条二坊十五坪	HJ443-7		横領町413	平成12.10.16 ～ 12.28	725㎡	中島・久保清



近鉄西大寺駅南土地区画整理事業地内の調査　発掘区位置図　1/5,000

(1)　平城京跡（右京二条三坊六坪）の調査　第443-4・-5・-6次

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京右京二条三坊六坪の南辺に位置する。これまで、六坪内では、第286-2、292-1、310-2・-3、326-2、327-5次の調査を行っており、古墳時代と、奈良・平安時代の遺構を検出している。今回は、五・六坪坪境小路の検出を目的に南西隅に1箇所（第443-4次）、南東部に2箇所（第443-5・-6次）の発掘区を設定し、調査を実施した。

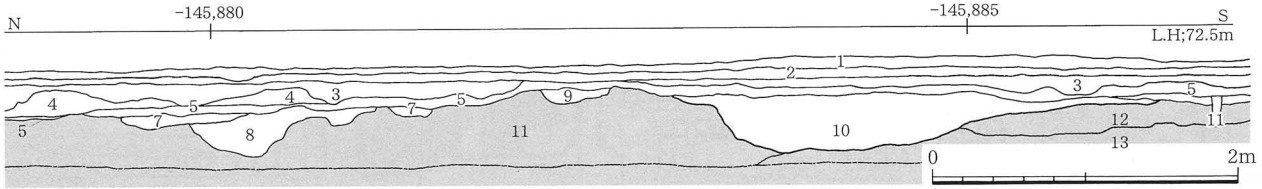
発掘区内の層序は、第443-4次発掘区では、黒灰色粘質土（耕土）以下、灰色砂質土、黄灰色砂質土（遺物包含層）が続き、地表から約0.3mで黄褐色粘土もしくは黄灰色粘砂の地山に至る。地山上面の標高は73.2mである。第443-5・-6次発掘区の西端部では、黒灰色粘土（耕土）、灰色粘土（床土）以下、暗灰色細粒砂が続き、地表から約0.3mで黄灰色シルトの地山に至る。それより東では、東に向かうにしたがい、床土の下に茶灰色粘質土、灰褐色砂質土、橙褐色砂質土（いずれも遺物を包含する）が厚く堆積し、地表から0.7mで茶灰褐色細粒砂、または黄灰色砂質土の地山に至る。地山上面の標高は、西端で72.8m、東端で72.3mである。これは調査地の地形が西から東へなだらかに下っているためであろう。遺構が存する面は地山上面である。第443-5・-6次発掘区では、一部に整地土が広がり、その上面にも遺構があった。

Ⅱ　検出遺構

検出した遺構には、古墳時代の溝、奈良・平安時代の五・六坪坪境小路、同北側溝、宅地を南北に区分する溝1条、東西に区分する坪内道路とその東西側溝、掘立柱建物17棟、門4棟、塀9条、井戸9基、土坑3基、埋甕遺構1基があり、その他に耕作に伴う溝、建物にまとまらない柱穴がある。掘立柱建物と井戸については、表に概要をまとめた。以下、主な遺構について述べる。

SD13・SD14　いずれも国土方眼方位北で西に振れる斜行溝である。幅0.3～0.4m、深さ0.1mである。出土遺物が少なく、時期は不明であるが、周辺の調査例から古墳時代の溝と考えられる。

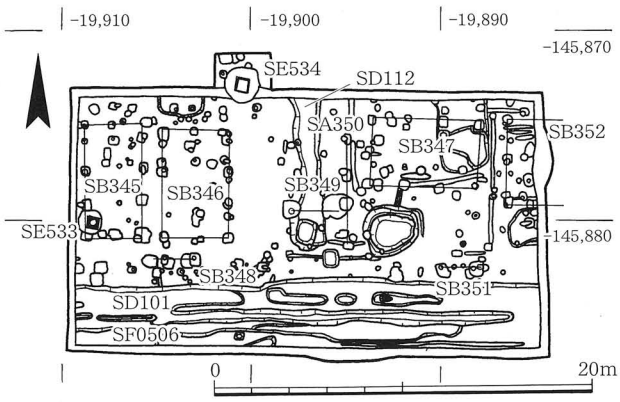
SF0506　五・六坪坪境小路である。発掘区の南端で幅1.0～3.0m分を検出した。発掘区内では路面の全幅を検出することはできなかった。



1. 灰色砂質土（床土）
2. 黄褐色砂質土
3. 黄灰色砂質土
4. 黄灰褐色砂質土
5. 黄灰褐色砂質土（遺物を包含する）
6. 茶灰色砂質土
7. 灰褐色砂質土
8. 暗灰褐色砂質土
9. 茶灰色砂質土
10. 暗灰褐色砂質土（SD101埋土）
11. 灰色砂質土
12. 褐色砂
13. 黄灰色砂

第443-4次調査発掘区　東壁土層図　1／50

第443-4次調査発掘区　溝SD101（東から）



第443-4次調査発掘区　遺構平面図　1/400

SD101　五・六坪坪境小路の北側溝である。幅約2.4mだが、後述するSD113、SD114との接続部では幅約1.0mと狭くなっている。深さは0.25～0.35mである。溝底の標高は、第443-4次発掘区の西端で72.88m、第443-5・-6次発掘区の東端で72.05mである。東へ向かって約0.8m低くなっている。溝心の国土座標は、X＝－145,882.00、Y＝－19,908.00である。溝内から8世紀末～9世紀初頭の遺物が出土した。

SD112　第443-4次発掘区の中央で検出した南北方向の溝である。長さ8.0m分を検出した。幅1.8m、深さ0.28mである。六坪の西から1/6の位置にある。溝心の国土座標は、X＝－145,875.00、Y＝－19,872.00である。溝の南端からSD101の北岸まで1.8mあり、ここに宅地の南を限る塀などの施設を想定する事も可能である。溝内から8世紀末の遺物が出土した。

SF902　六坪を東西1/2ずつに分ける坪内道路である。道路心の国土座標は、X＝－145,875.000、Y＝－19,855.200である。

SD113・SD114　坪内道路SF902の東・西側溝である。南端がSD101に接続する。発掘区内で長さ15.5m分を検出した。SD113は、幅約0.8m、深さ約0.25mで、溝心の国土座標は、X＝－145,875.000、Y＝－19,856.000である。SD114は、幅約0.6m、深さ約0.18mで、溝心の国土座標は、X＝－145,875.000、Y＝－19,854.400である。溝心々間の距離は2.4mである。溝内から8世紀の遺物が出土した。

SB345　第443-４次発掘区の西端で検出した、桁行3間、梁間2間の南北棟建物である。

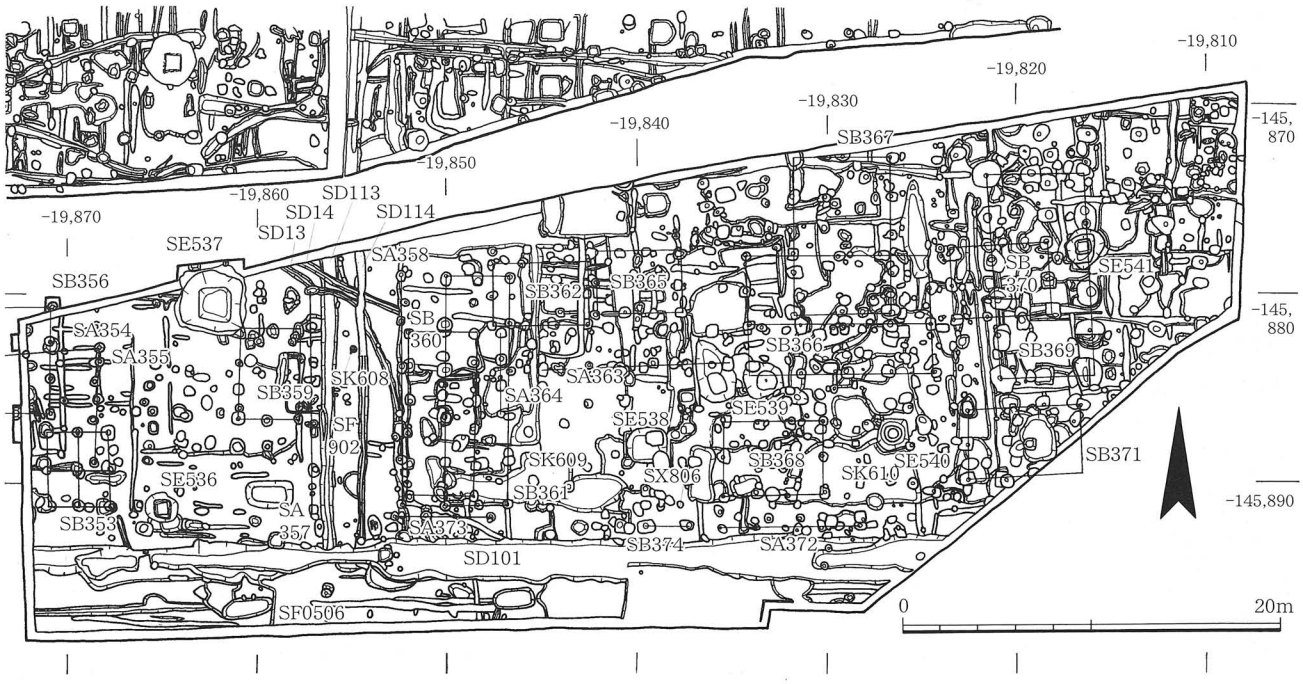
SB349　SD112埋没後に建てられた門と考える柱列である。柱筋と、SD101北端との距離は約3.6mで、柱間は2.4mである。

SB348・SB351　SD101の北岸に沿って建てられた門と考える柱列である。SB348は、柱間2.1mで、門心の位置は、SD112溝心から7.2m西である。SB351は、柱間2.1mで、門心の位置は、SD112溝心から8.1m東である。

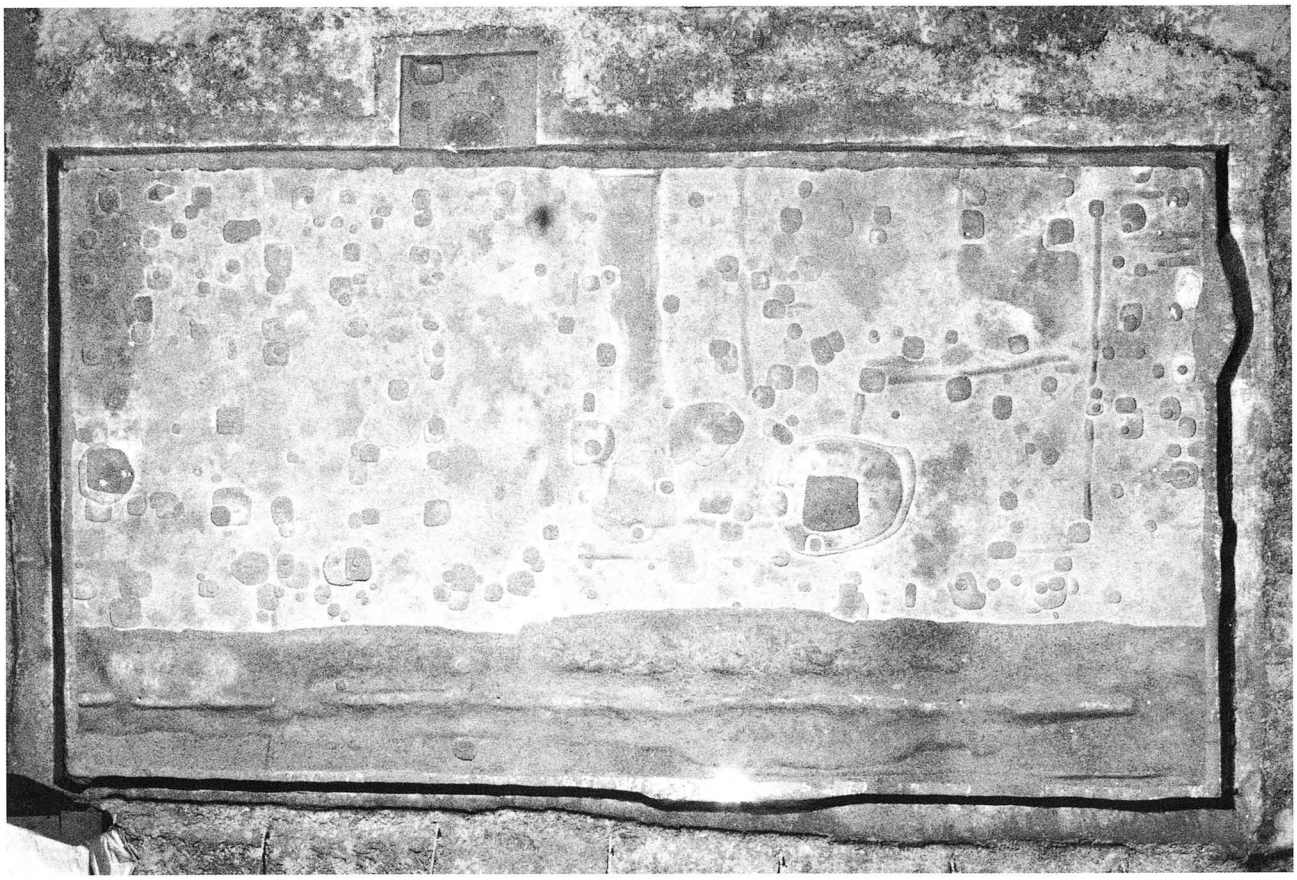
SB353　第443-5・-6次発掘区の西端で検出した桁行2間、梁間2間の総柱建物である。

SA357　SD113の西岸に沿って検出した、柱間6間の南北方向の掘立柱塀である。

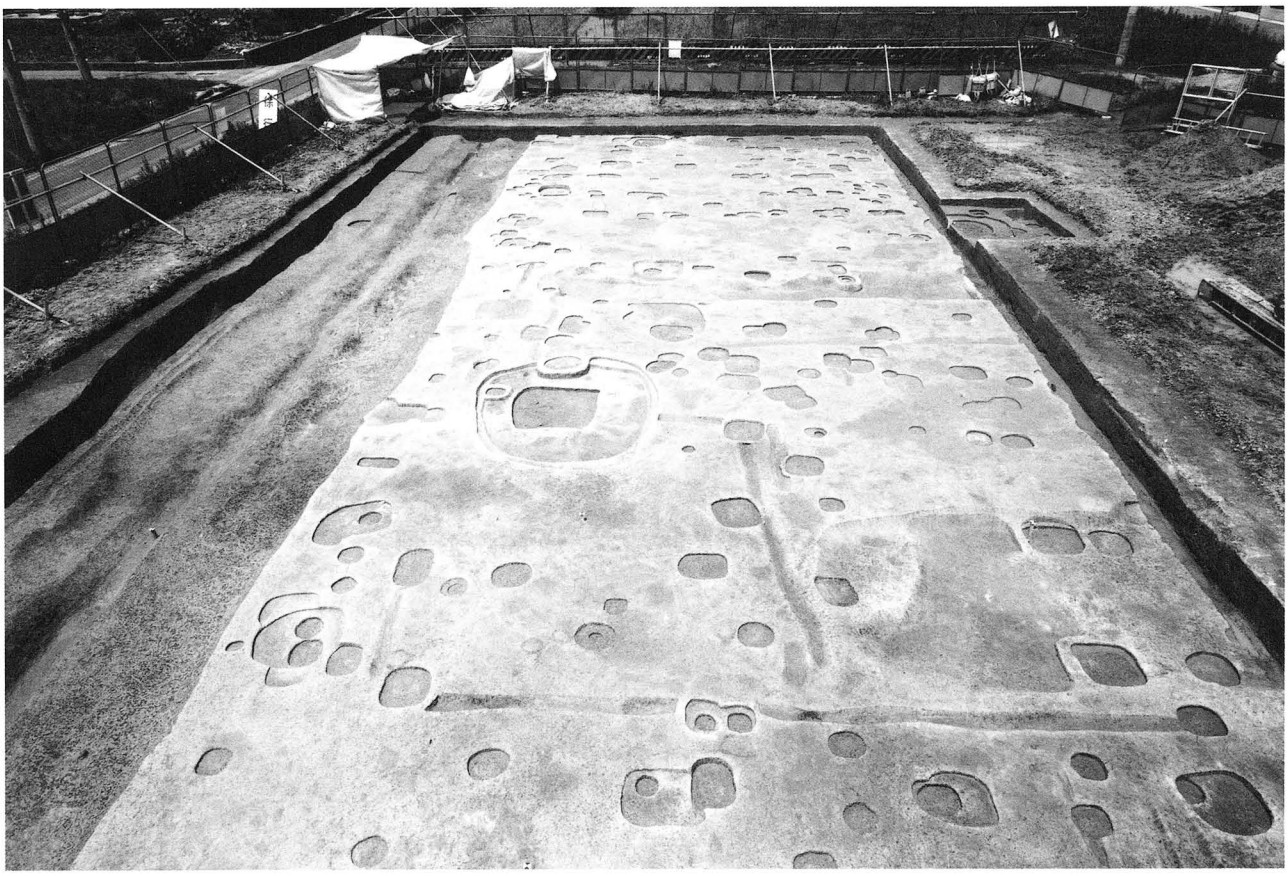
SA358　SD114の東で検出した柱間5間の南北方向の掘立柱塀である。柱筋の位置は、SD114の溝心から2.1mのところである。



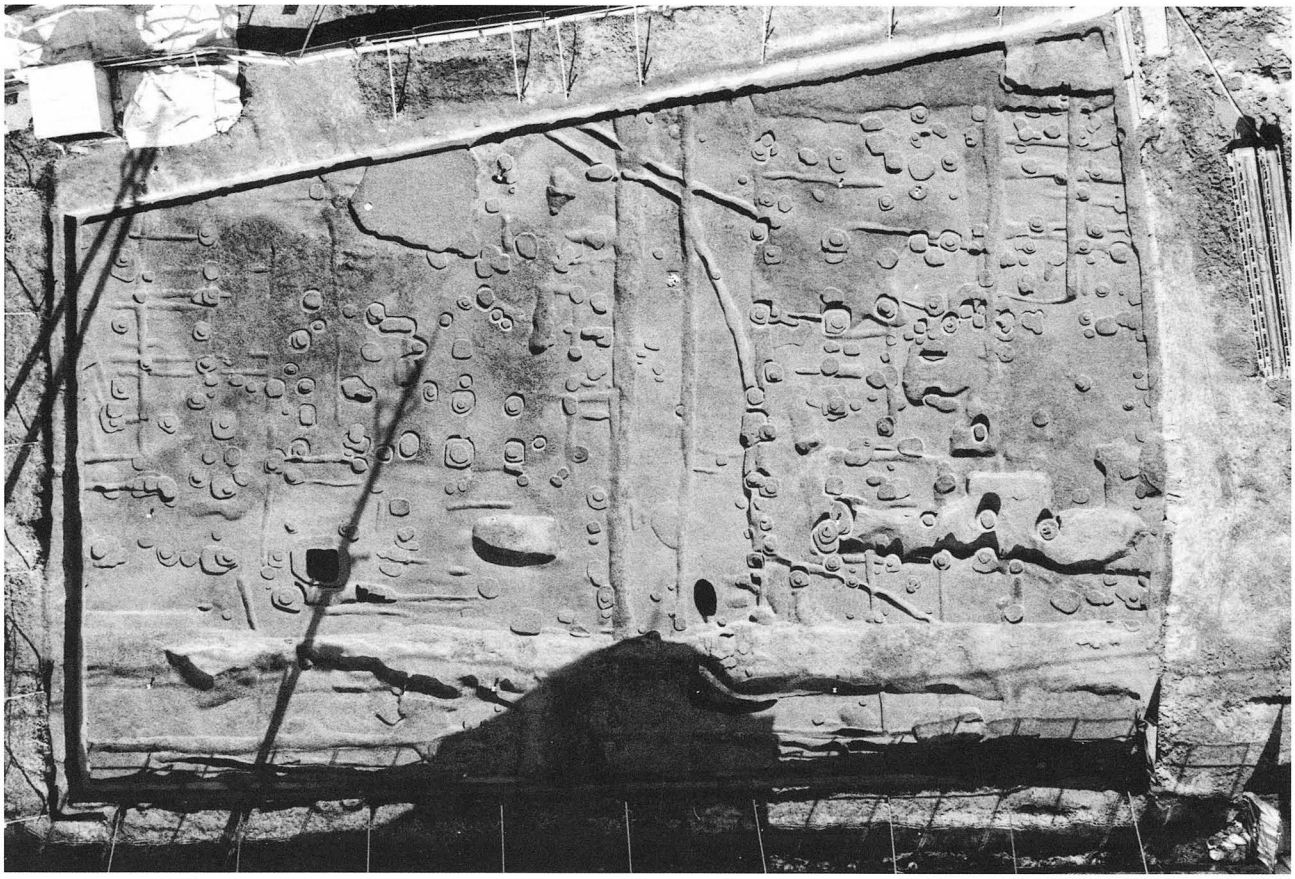
第443-5・-6次調査発掘区　遺構平面図　1/400



第443-4次調査発掘区　全景（上が北）

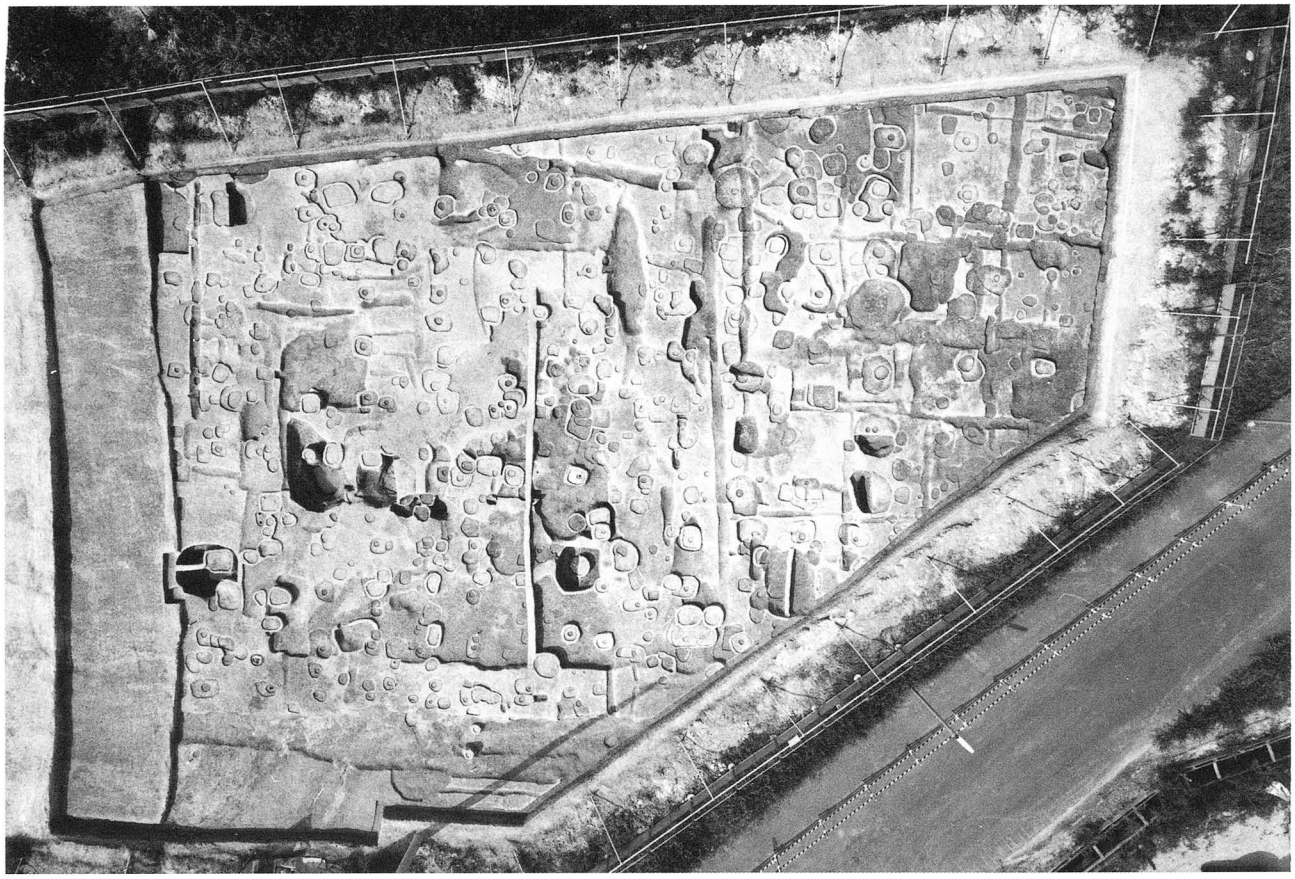


第443-4次調査発掘区　全景（東から）



第443-5次調査発掘区　全景（上が北）

第443-5次調査発掘区　全景（西から）



第443-6次調査発掘区　全景（上が北）

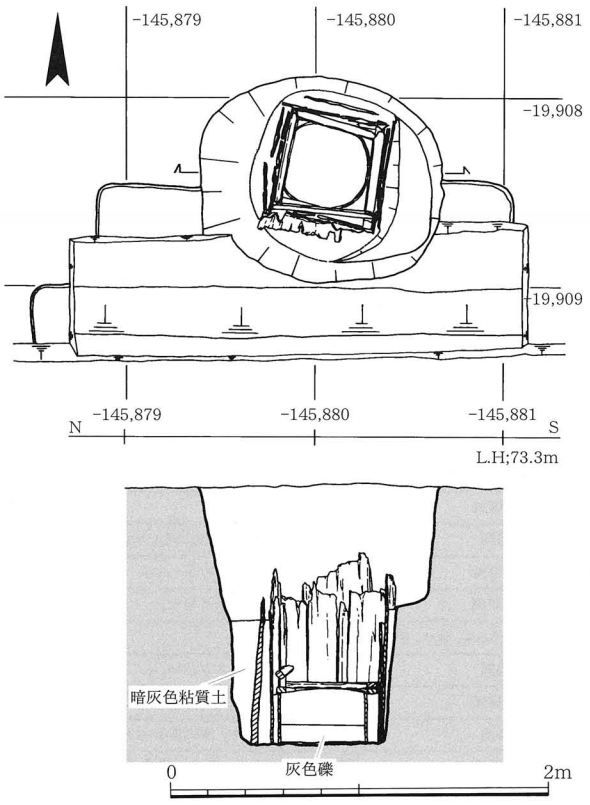
第443-6次調査発掘区　全景（東から）

掘立柱建物・塀一覧表

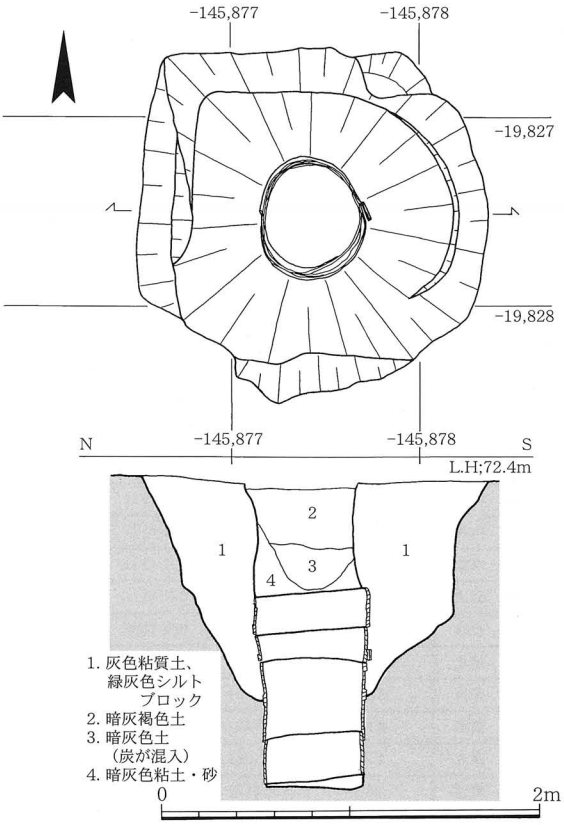
遺構番号	棟方向	規模（桁行×梁間）	桁行全長 m（尺）	梁間全長 m（尺）	桁行柱間寸法 m	梁間柱間寸法 m	廂の出 m	備考
SB345	南北	3×2	6.0（20）	3.0（10）	北から2.4、1.8、1.8	1.5等間		SE533より古い。
SB346	南北	3×2	5.7（19）	3.6（12）	北から2.1、1.8、1.8	1.8等間		
SB347	東西	3×2	5.7（19）	3.6（12）	西から1.8、2.1、1.8	1.8等間		
SB348	東西	1		2.1（7）		2.1		門
SB349	東西	1		2.4（8）		2.4		門。SD112より新しい。
SA350	南北	3		5.4（18）		1.8等間		SB349より新しい。
SB351	東西	1		2.1（7）		2.1		門
SB352	東西	1以上×2	12（4）以上	4.5（15）	1.2	2.25等間		
SB353	南北	2×2	3.9（13）	3.3（11）	1.95等間	1.65等間		総柱建物
SA354	東西	2以上		3.9（13）		西から2.1、1.8		
SA355	南北	3		6.0（20）		北から1.8、2.1、2.1		
SB356	南北	3×2？	5.7（19）	1.8（6）以上	1.9等間	1.8		
SA357	南北	6		11.7（39）		1.95等間		
SA358	南北	5		12.3（41）		2.46等間		SB360より新しい。
SB359	南北	3×2？	4.8（16）	3.3（11）	1.6等間	1.65等間		
SB360	南北	5×2	8.7（29）	3.6（12）	北から1.8、1.8、1.8、1.5、1.8	1.8等間		SA358、SB361より古い。
SB361	南北	5×2	12.3（41）	3.3（11）	2.46等間	1.65等間		SB360より新しい。
SB362	東西	3×2	5.1（17）	3.3（11）	西から1.8、1.8、1.5	1.65等間		SB365より新しい。
SA363	東西	4		9.9（33）		西から2.4、3.0、2.4、2.1		
SA364	南北	3		4.5（15）		1.5等間		SB361より古い。
SB365	東西	3×2	4.5（15）	3.3（11）	1.5等間	1.65等間		SB362より古い。
SB366	東西	4×2	9.6（32）	3.6（12）	2.4等間	1.8等間	2.7	南廂付。SE539より古い。
SB367	南北	4×2	8.4（28）	5.1（17）	2.1等間	2.25等間		北から2間目に間仕切り。
SB368	東西	3×2	5.1（17）	3.9（13）	西から1.8、1.8、1.5	1.95等間		
SB369	南北	5×2	10.8（36）	5.1（17）	2.16等間	2.25等間		SB370より古い。SE541より古い。
SB370	東西	3×2	5.1（17）	3.6（12）	西から1.8、1.8、1.5	1.8等間		SB369より新しい。
SB371	東西	3×2	6.0（20）	3.6（12）	西から2.1、1.8、2.1	1.8等間		
SA372	東西	4		7.5（25）		西から2.1、1.5、1.8、2.1		
SA373	東西	3		5.1（17）		西から1.5、1.8、1.8		
SB374	東西	1		2.4（8）		2.4		門？

井戸一覧表

遺構番号	掘形			枠			主要な出土遺物	備考
	平面形	平面規模（m）	深さ（m）	平面形・構造	内法（m）	水溜・濾過装置等		
SE533	楕円形	東西1.10 南北1.30	1.36	方形・縦板組横桟留	0.50×0.60	曲物、礫敷	土師器、須恵器、ミニチュア竈、製塩土器、箸、線刻板石、台石	
SE534	方形	東西1.70 南北1.60	2.30	方形・縦板組横桟留	0.70×0.70	礫敷	土師器、須恵器、製塩土器、軒丸瓦、磚、萬年通寶、神功開寶、和銅開珎	
SE535	方形	東西2.80 南北2.60	0.68	不明（枠抜取）			土師器、須恵器、製塩土器、線刻土器、丸瓦、平瓦、鉄滓	
SE536	隅丸方形	東西1.75 南北1.50	0.94	方形・縦板組（方形・横板組）	0.60×0.65		土師器、須恵器、製塩土器、軒平瓦、丸瓦、平瓦、桃核	縦板組の5～6㎝内側に横板組を設置、枠留は不明
SE537	隅丸方形	東西3.65 南北3.60	1.60	不明（枠抜取）			土師器、須恵器、黒色土器A、灰釉陶器、墨書土器、土馬、丸瓦、平瓦、斎串	
SE538	楕円形	東西2.10 南北1.90	1.20	不明（枠抜取）			土師器、須恵器、黒色土器A、製塩土器、磚、丸瓦、平瓦、琴柱、曲物、炭、砥石、桃核、梅核	
SE539	円形	直径2.00	0.65	円形・曲物			土師器、須恵器、製塩土器、漆	曲物1段の1/2が残存
SE540	楕円形	東西1.90 南北1.85	1.60	円形・曲物	直径0.6		土師器、須恵器、黒色土器A、製塩土器、磚、丸瓦、平瓦、琴柱、曲物、炭、砥石、桃核、梅核、線刻土器、墨書土器、磚、丸瓦、平瓦、曲物、箸、笊、櫛、刀子形木製品、炭、胡桃、桃核	曲物4段が残存
SE541	円形	東西2.05 南北2.15	1.16	不明（枠抜取）			土師器、須恵器、黒色土器B、瓦器、土馬、丸瓦、平瓦、砥石	



井戸SE533　平面及び断面図　1/40



井戸SE540　平面及び断面図　1/40

SB359　SA357の西側に建つ南北棟建物である。桁行3間、梁間2間で、北側の柱筋がSB360の北側の柱筋と揃う。

SB360　SA358、SB361と重複して検出した、桁行5間、梁間2間の南北棟建物である。SA358、SB361よりも古い。

SB361　桁行5間、柱間2間の南北棟建物である。柱間がSA358と同じで、西側柱列がSA358の柱筋から東へ2.4mのところにある。SA358を西廂とする建物の可能性もある。

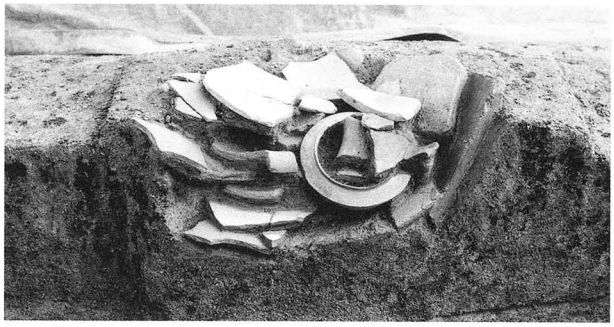
SB366　第443-5・-6次発掘区東部で検出した東西棟建物である。桁行4間、梁間2間の身舎に南廂が付く。廂の出は2.7mである。重複関係から、SE539より古い。

SB367　SB366と重複して検出した南北棟建物である。桁行4間、梁間2間で、北から2間目に間仕切りがある。

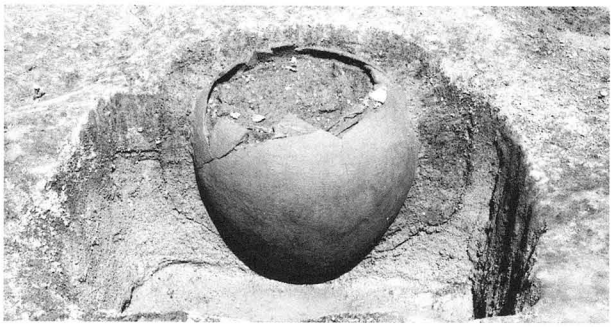
SB369　SB367の東で検出した桁行5間、梁間2間の南北棟建物である。柱穴の一辺の大きさが1.0～1.5mと大きく、6個の柱穴に礎板が敷いてあった。重複関係から、SE541より古い。

SA372・SA373・SB374　SD101の北岸に沿って検出した。SA372は4間、SA373は3間の掘立柱塀である。SB374は、SA372と接続し、塀の一部になる可能性もあるが、柱穴がSA372よりも大きいことから門と考える。柱間は2.4mである。六坪の南辺築地が想定される位置であるが、築地塀の添柱痕や雨落溝を検出していないため、六坪の南辺は、このような掘立柱塀で宅地を限っていたと考える。

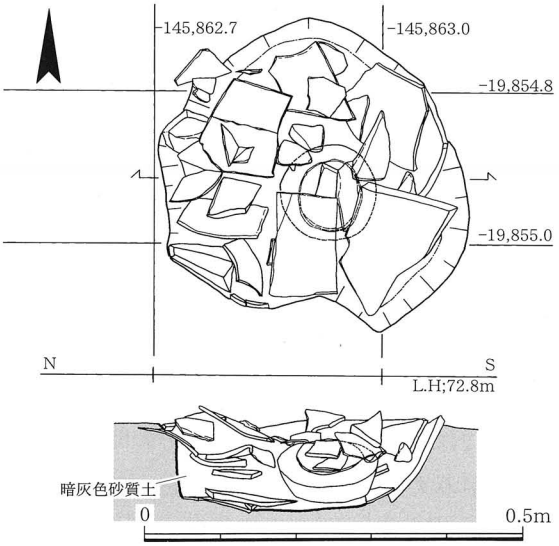
SE533　第443-4次発掘区西端で検出した井戸である。掘形は、南北1.3m、東西1.1mの平面楕円形で、深さは1.36mである。東側にテラス面を設けて掘り込まれている。テラス面は、深さ約0.7mのところに設けられ、その下は直径0.9mの平面円形である。井戸枠の構造は、方形縦板組横桟留であり、底部に直径0.45m、高さ0.25mの曲物を据える。曲物内には浄水のために礫が敷かれる。



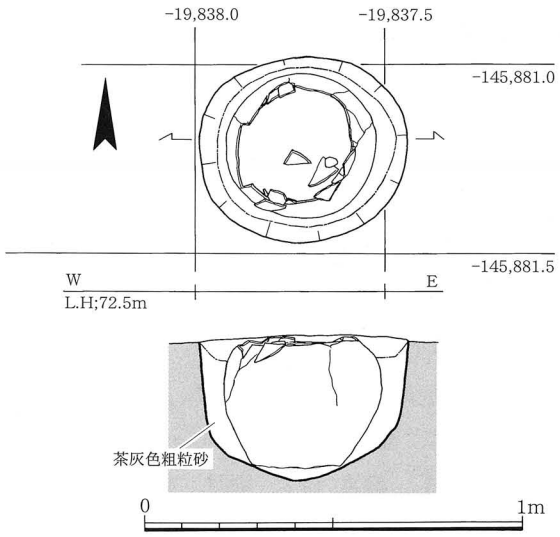
土坑SK608　断面及び遺物出土状態



SX806　断面及び遺物出土状態



土坑SK608　平面及び断面図（遺物は見通し図）　1/10



SX806　平面及び断面図（遺物は見通し図）　1/20

また、縦板と曲物の間には暗灰色粘質土を充填し、その上には礫を入れて固定する。横桟は2段分を確認したが、上段は崩れている。下段は曲物上端で組まれ、原状を保っていると思われる。重複関係からSB345より新しい。掘形から8世紀末、枠内から9世紀前半の遺物が出土した。

SE537　SB359と重複して検出した井戸である。掘形は、南北3.6m、東西3.65mの平面隅丸方形で、深さは1.6mである。0.4mの深さまで擂鉢状に掘られている。それ以下は一辺が1.5～1.8mの平面方形を呈しており、築造当初の掘形の状態を保っていると考える。井戸枠は抜き取られている。埋土から9世紀後半～10世紀初頭の遺物が出土した。SB359より新しい。

SE540　掘形が南北1.85m、東西1.9mの平面楕円形の井戸である。深さは1.6mである。1.2mの深さまで擂鉢状に掘られ、それ以下は井戸枠を据えるために、平面円形に掘られている。井戸枠には、直径0.6mの円形の曲物を積み上げて使用している。曲物は6段分出土したが、上から2段は崩れており、4段分が残存していた。枠内から8世紀末～9世紀初頭の遺物が出土した。

SK608　SF902の路面上で検出した平面円形の土坑である。直径約0.4m、深さ約0.1mである。須恵器の小型の壺と、土器、瓦の破片が出土した。壺はやや斜めに傾いており、据えられたものかどうかは不明である。

SK609・610　SD114の東側で、SD101に沿って検出した、東西方向の溝状に掘られた土坑である。SK609は、長さ10m、幅1.5～2.5m、深さ約0.3mである。SK610は、長さ12.4m、幅3.0m、深さ0.1～0.2mである。SK609・610の南辺とSD101の北辺との距離は、約1.8mである。土坑の底面と埋土の上面の両方で建物の一部を検出している。埋土から8世紀の遺物が出土している。

SX806　SD101の北側で検出した埋甕遺構である。直径約0.55m、深さ約0.38mの土坑に、須恵器の甕が埋められていた。　（細川富貴子）

Ⅲ　出土遺物

土器・土製品が遺物整理箱で44箱、瓦磚が遺物整理箱で29箱、木製品が39点、金属製品が43点、銭貨が10点、石製品が21点、石器が3点である。

土器・土製品　土師器、須恵器、黒色土器A・B類、灰釉陶器、緑釉単彩陶器、輸入磁器、瓦器、墨書土器、製塩土器、硯、竈、甑、土馬がある。これらは8世紀半ば以降のもので、8世紀末～9世紀前半の遺物が多くを占める。道路側溝や井戸枠内から出土した遺物にはこの時期のものが最も多い。ついで、9世紀後半～10世紀前半の遺物が多く、SE537からこの時期のものが出土した。10世紀後半の黒色土器B類と土師器が少量みられ、11世紀後半の瓦器、土師器もあるが、11世紀前半の遺物は出土していない。

これらのうち、SD101、SE533・537・540出土土器について述べる。

SD101出土土器（1～17）には、土師器杯A（1～3）・B・C、皿A（6）・B・C・蓋、椀A（4・5）・C、高杯、盤A（7）、壺B、甕、竈、製塩土器、須恵器蓋（8・9）、杯A（11）・B（12）・C（10）、皿A・B（13）・C・E、高杯、鉢D・F、托（14）、壺、平瓶、甕、土馬、黒色土器A類椀・甕、灰釉陶器椀（15）、緑釉単彩陶器[1]壺蓋（16）・火舎（17）・羽釜がある。

杯A（1～3）のうち、1は、外面にケズリの痕跡がわずかに残る。口縁部上半の内面と、底部内面中央に煤が付着する。3は、口縁部をヨコナデ、底部外面をケズリで調整する。16の緑釉単彩陶器の壺蓋は、口縁部が欠損しており、頂部から口縁部がわずかに残る。残存部はほぼ直角に曲っており、これまでに出土例はないが、壺の蓋と考え、新たな器種となる可能性を示しておく。大半が8世紀末～9世紀初頭のものであるが、黒色土器A類椀、灰釉陶器椀（15）は9世紀末頃である。

SE533枠内出土土器（18～28）には、土師器杯A（18）・B（19）・C、皿A（20・21・23）・C、椀A（24）、高杯、甕（22）、竈、ミニチュアの竈、製塩土器、須恵器蓋（25）、杯A（26・27）・B（28）、鉢、壺E、甕がある。

土師器杯・皿・椀の調整は、18・20・24が外面全体をケズリ、23がヨコナデ、19・21は不明である。20の口縁部・底部外面、21の底部外面には煤が付着する。甕（22）は、口縁部の形態がA形態（外反気味に開き、端部内側が小さく丸く肥厚するもの）で、器高23cmくらいの短胴、丸底の都城形の甕になると思われる[2]。25の須恵器蓋は器高が低く、頂部は平坦である。これらの土器の時期は、8世紀末～9世紀前半である。

SE537出土土器（29～39）には、土師器杯A（29）・B・C、皿A（30～32）、高杯、甕、須恵器蓋、杯A・B（33）、高杯（35）、壺M（36）、壺蓋、甕、黒色土器椀（38・39）・甕（37）、灰釉陶器椀（34）がある。

土師器杯・皿（29～32）の器壁は全体的に薄い。調整手法には、ケズリが粗雑で、その間にナデや指頭圧痕がみえるもの（30～32）と、ヨコナデのもの（29）がある。32の底部外面には「子」と読める墨書がある。須恵器壺M（36）の底部外面には糸切りの痕跡が残る。灰釉陶器椀（34）の底部外面には墨が付着し、磨耗している。転用硯と考えられる。これらの土器の時期は、9世紀後半～10世紀前半である。

SE540出土土器（40～47）には、枠内からのもの（40～46）と掘形からのもの（47）とがある。

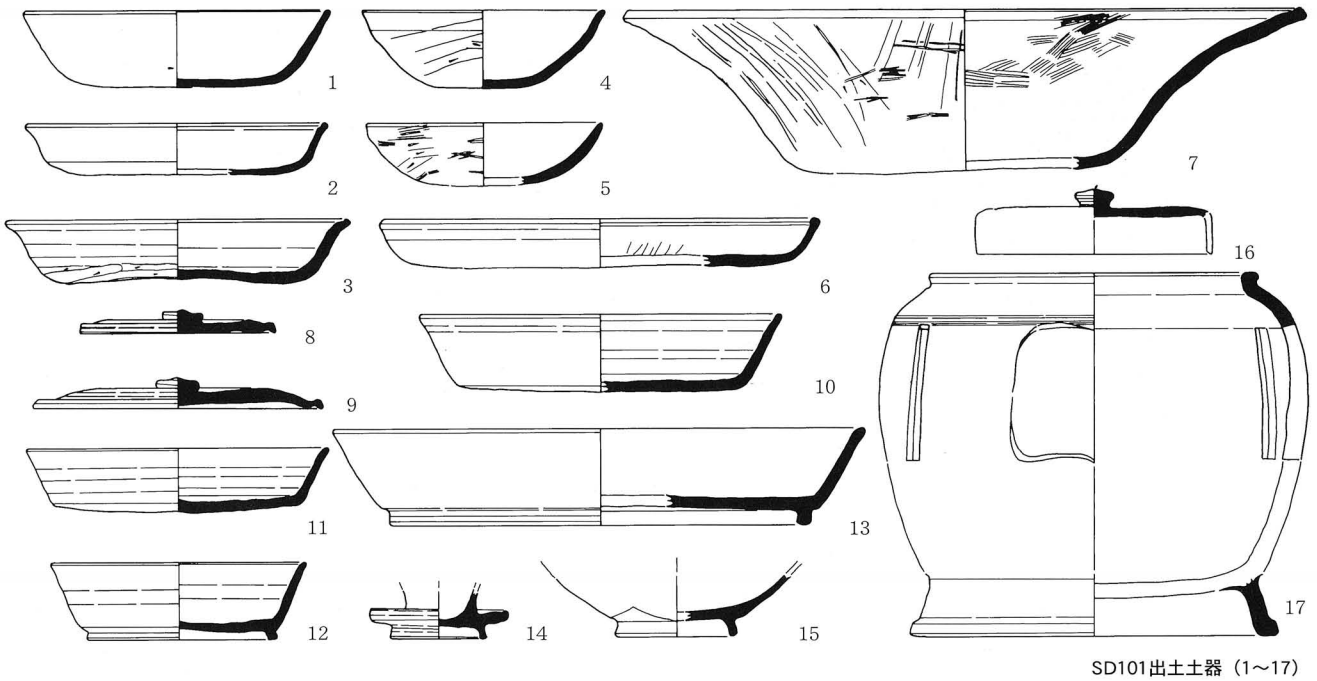
枠内から、土師器杯A（40）・B（41）・C、皿A（42）、椀A（43）、蓋、高杯、壺B、甕、甑、製塩土器、須恵器蓋、杯A（45）・B（46）、皿C、鉢E（45）、壺、甕、黒色土器A類杯が出土した。8世紀末～9世紀初頭のものである。

掘形から、土師器皿C・杯・皿・甕・甑、須恵器蓋・杯A・皿C（47）・鉢・壺・平瓶・甕が出土したが、量が少なく、時期は不明である。

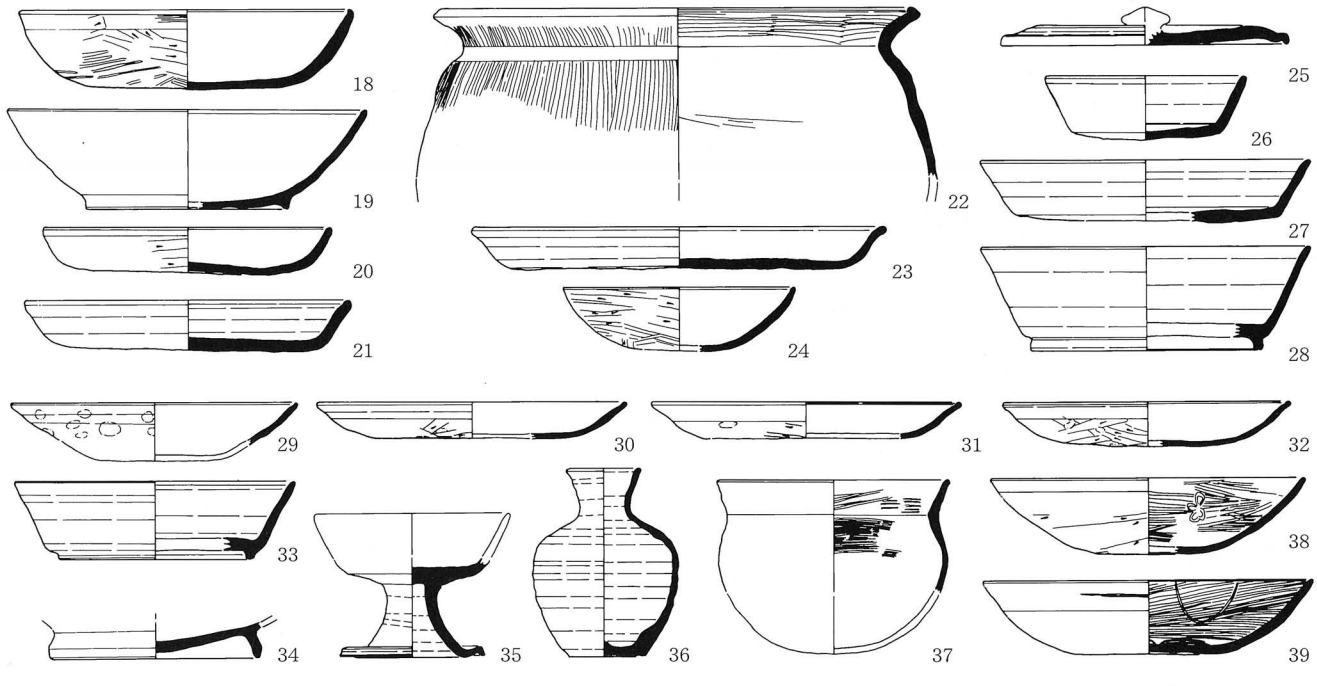
49は、越州窯産の青磁合子蓋である。SB369北

1）緑釉単彩陶器とは、主要な器形に羽釜、火舎、甑などをもつ鉛釉陶器である。製作技法、焼成、胎土などは奈良三彩と同一で、出土する時期は8世紀末～9世紀初頭に限定されている。皿、椀といった日常の食器類を主な器種とする緑釉陶器は量産型緑釉陶器と言われ、9世紀前半から生産が始まるものである。
平尾政幸「弘仁瓷器直前の緑釉単彩陶器」『杉山信三先生米寿記念論集　平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集刊行会編　1993。

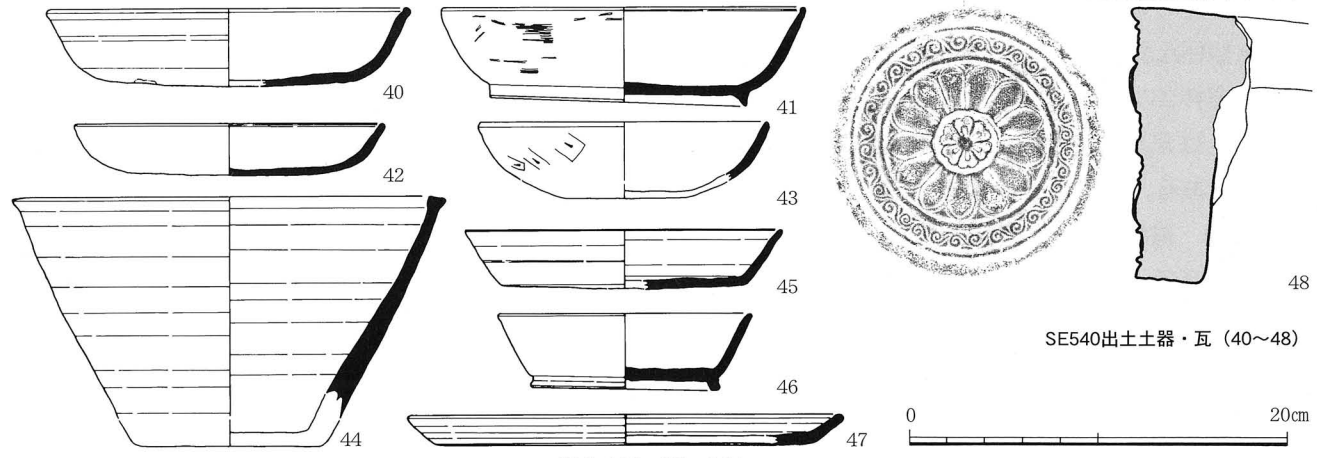
2）小森俊寛「総説」『古代の土器4　煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会編　1996。



SD101出土土器（1～17）



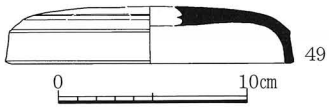
SE533出土土器（18～39）



SE540出土土器・瓦（40～48）

0　20cm

出土土器・瓦　1/4



出土青磁　1/4

東隅柱に重複して掘り込まれた柱穴から出土した。内外面ともに施釉されるが、口縁端部は露胎している。9世紀末～10世紀初頭のものである。

このほかに注目すべきものとして、SE541出土の瓦器椀がある。ロクロで成形されており、他地域で作られたと思われる。口縁部外面には、畿内産の瓦器椀のような粘土接合痕は見られず、ロクロの痕が残る。ミガキは見られない。口縁部内面には、粗いミガキが見られる。底部内面には格子の暗紋を施す。底部外面に糸切りの痕跡が残る。高台は低く、断面三角形状である。手捏ねで成形する畿内産の瓦器椀とともに出土している。形態から平安時代後半のものと考えられる。

また、墨書土器が18点（須恵器16点、土師器2点）あり、SD101から1点、SE534から2点、SE537から1点、SE538から1点、SE540から7点、土坑から3点、柱穴から1点、溝から2点出土した。

須恵器杯または皿の底部外面に「寺」(SD101)、須恵器蓋の頂部外面に記号かとも思われる「十」、須恵器杯Aまたは皿Aの底部外面に「井」(SE538)、須恵器杯Bの底部外面に「大」(SE540)、須恵器杯または皿の底部外面に「唐」（土坑）と読める墨書がある。　（細川富貴子）

瓦磚　遺物整理箱で29箱分出土した。丸瓦、平瓦が大半で、内訳は、破片数にして、丸瓦が797点（71.595kg）、平瓦が1,335点（154.56kg）、いずれか不明なものが795点（11.645kg）の計2,927点（237.8kg）である。また、軒丸瓦が18点、軒平瓦が11点、鬼瓦が1点（平城宮Ⅲ式）、施釉瓦が1点、文字瓦が1点、磚が35点ある。

奈良時代の軒丸瓦の型式と内訳は、6133Mが1点、6225種別不明が1点、6282Gが2点、6282Iが1点、6284Aが1点、6316Gが1点、型式不明が9点で、後述する不退寺式軒丸瓦[3]が1点、中世の軒丸瓦が1点ある。

奈良時代の軒平瓦の型式と内訳は、6663Cが1点、6664Fが1点、6664Hが1点、6685Aが2点、6691Aが1点、6721Dが2点、型式不明が2点で、中世の軒平瓦が1点ある。

施釉瓦は、長辺5.5cm、短辺4.0cm、厚さ1.1cmの破片である。釉は、剥離が著しいが、緑釉（濃淡あり）と褐釉を確認できる。調整は不明である。丸い釘穴があるので、垂木先瓦であると思われる。

文字瓦は、平瓦の端面に「目」の刻印がある。刻印「目」は、a・bの2種類[4]が知られており、出土したのは、第3、4画が第2画に接するb種である。

不退寺式軒丸瓦（48）は、胎土が粗く、色調は表面が黒灰色、内面は灰白色で、焼成は堅緻である。調整技法は瓦当裏面下半はケズリ、瓦当側面下半は瓦当面から裏面に向かってケズリ、その後にそれと直交方向のナデを施している。同笵品が法華寺、平城京左京一条三坊十五・十六坪や東三坊大路から出土しており[5]、いずれも今回の出土品と、胎土、調整技法の違いは、ほとんどない。「不退寺式軒丸瓦」の製作時期は、平安時代初期（784～824年）に比定されており、830年頃に造営が開始された可能性が高い不退寺の創建瓦であると考えられている[6]が、今回出土した「不退寺式軒丸瓦」は、SE540曲物内から8世紀末～9世紀初頭の土器と共に出土しており、創建瓦であるならばと土器の年代とに矛盾がある。　（山前智敬）

木製品　斎串（50）は、長さ17.0cm、幅2.2cmである。厚さは0.4cmであるが、末端から約3cmを残して、さらに薄く2枚に割り裂かれている。上

3）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ』1974。

4）奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅴ　瓦編5』1977。

5）これらの軒丸瓦は、奈良文化財研究所にて実物照合を行った。

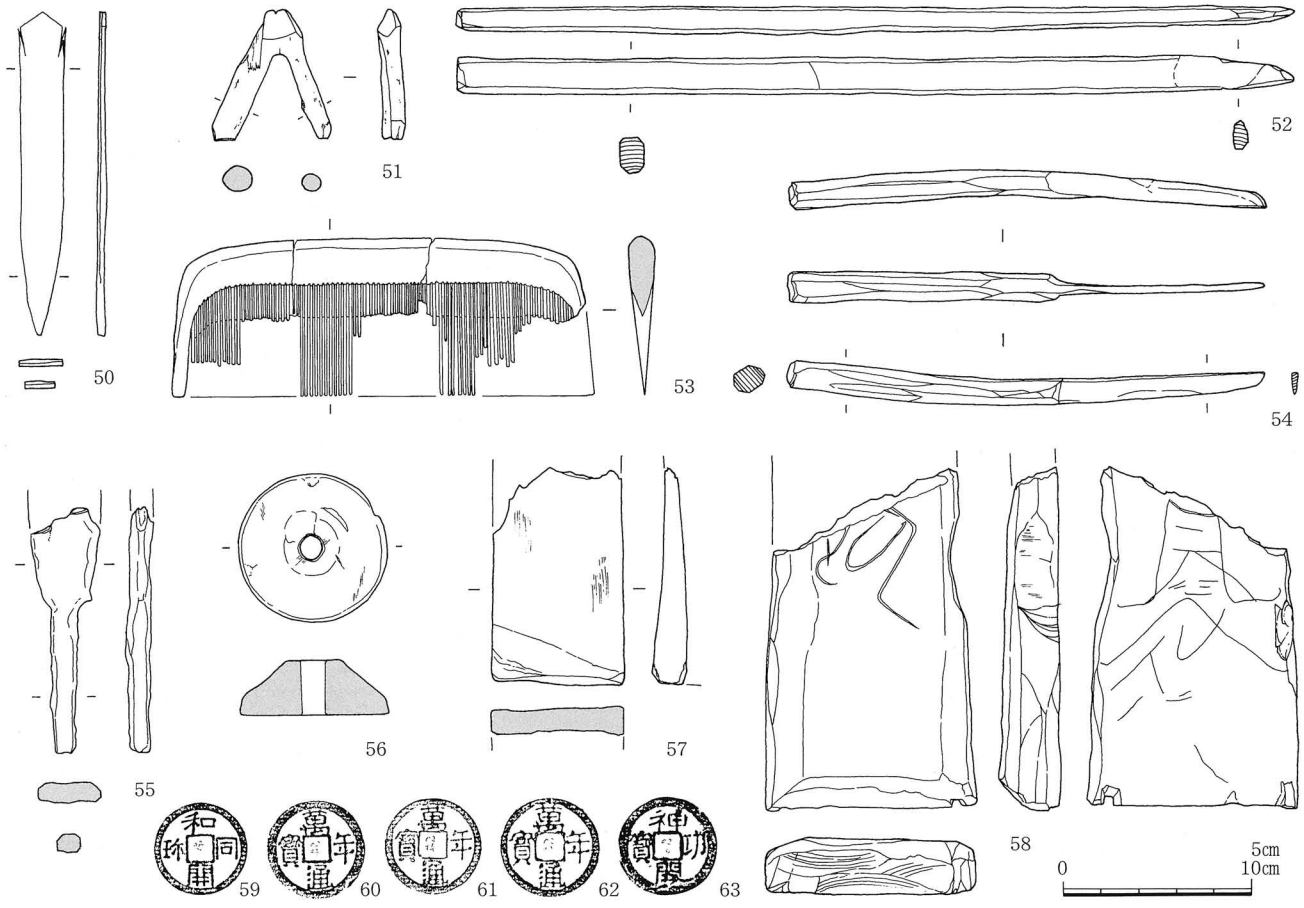
6）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅻ』1991。

部の切り込みと割り裂きの先後関係は判別し難い。SE537出土。琴柱（51）は、高さ3.5cm、脚部幅3.1cmである。全体に樹皮が残るが、頂部は両面から削られ、上端には弦を通した刻みがみられる。脚端部は琴本体に接する部分とその側面を平滑に削っている。樹種は未鑑定であるが、カエデの枝を利用した可能性が高い。SE538出土。52は、柄と考えられる。長さ44.3cm、幅1.8cm、厚さ1.3cm。一端を薄く尖るように削り、その端から約6cmは何かに固く差し込まれていたような圧痕が残る。SE541出土。横櫛（53）は、推定幅11.0cm、高さ4.2cm、厚さ0.7cm、歯の数79本である。全体が丁寧に磨かれており、表面は黒色を呈す。樹種は未鑑定。SE540出土。刀子形木製品（54）は、長さ12.5cm、刃部の厚さ0.15cmである。先端から約5.5cmを刃の形状に削り、柄の部分はやや楕円形で背が反るように仕上げられている。SE540出土。

金属製品　55は、茎をもち、鉄鏃または工具と思われる。残存長6.5cm、幅1.8cm、厚さ0.6cmで、茎部は幅0.6cm、厚さ0.5cmである。遺物包含層から出土した。

石製品　紡錘車（56）は、直径3.9cm、厚さ1.4cm、孔の径0.7cm、重さ30.12ｇである。やや緑がかった黒色の滑石製で、孔の縁には表裏とも同方向の擦痕が認められる。SD101出土。砥石（57）は、残存長5.7cm、幅3.5cm、残存厚さ1.0cmで、明灰色の頁岩製である。遺物包含層出土。線刻のある石板（58）は、残存長9.0cm、幅5.6cm、厚さ1.7cmである。縞模様の紫灰色の滑石製で、表面には刃物で刻んだと思われる太目の線刻があり、裏面は針で彫ったような細い線刻がある。どちらの図柄も絵か文字か判読できない。端部は鋸で挽いたような痕が残り、両角付近には抉り込みがある。SE533から出土した。

銭貨（銅銭）　和同開珎3点、萬年通寶6点、神功開寶1点がある。萬年通寶は4種以上の銭文が認められ、神功開寶は功字の旁を「力」につくる。59～63はSE534から出土した。　（松浦五輪美）



出土木製品・金属製品・石製品・銭貨　50・52は1/4、他は1/2

Ⅳ　まとめ

六坪では、奈良時代前半の遺構・遺物は少なく、奈良時代中頃～後半以降になると遺構・遺物が増加する傾向がある。これは右京二条三坊全体にみられる傾向である。また、六坪内でこれまでに検出した遺構は、掘立柱建物167棟、井戸38基、条坊道路4条、道路側溝7条などがある。これらの遺構の重複関係、配置から、坪全体を利用しているのは平安時代前半までで、それ以降は利用が坪の一部に限られる様子が窺える。遺構の変遷を以下で詳しく考えてみる。

A期（奈良時代前半）　坪境小路北側溝SD101から、奈良時代半ば頃と思われる土器が出土しているので、この時期までには周囲の条坊道路と側溝は整備されていたと考える。四周の道路心を基準に遺構を配置している。東辺と南辺に部分的に掘立柱塀が建ち、北辺と西辺では掘立柱塀を検出していない。六坪の周囲を囲む掘立柱塀は、途切れがちで、四周を取り囲むように建てられていなかったと思われる。また、六坪の四周には、雨落溝や添柱跡などの築地塀の痕跡もなく、このような状況はＦ期まで続くようである。

坪内を南北1/2に区画する位置に、東西方向の溝が2条ある。これを坪内道路の南北両側溝と考えると、坪内を東西1/2に区画する道路SF902とともに、坪を1/4以下に分割して宅地利用する基準となっていたと考える。坪境小路北側溝SD101の幅が、SF902の東西両側溝SD113・114との接続部で狭くなっているのは、坪内道路が坪境小路と同時に計画されたからであろう。建物の数は少なく、配置が坪の西半分に偏っている。

B期（奈良時代後半）　側溝心を基準に遺構を配置している。坪内を東西1/2に分ける坪内道路SF902、南北1/2に分ける坪内道路、東辺、南辺の掘立柱塀はA期から続き、新たに南西部に西から1/6に位置する南北溝SD112、北半に東から1/3に位置する南北方向の坪内道路SF901が造られる。SF901は、南北1/2で途切れているので、坪内を南北1/2に区画する坪内道路と接続する可能性がある。建物は坪を南北2分割、東西4分割した配置である。また、井戸の位置からみると、坪内1/4、または1/8の区画を宅地利用していたと思われる。廂付建物や大型の建物が建ち、その数もA期より増加する。ただ、SF901のある北東部の区画には、建物が見られない。SD112は坪内1/4の宅地の中を、さらに区画する溝の可能性があり、SD112の位置を基準に配置されている建物もある。

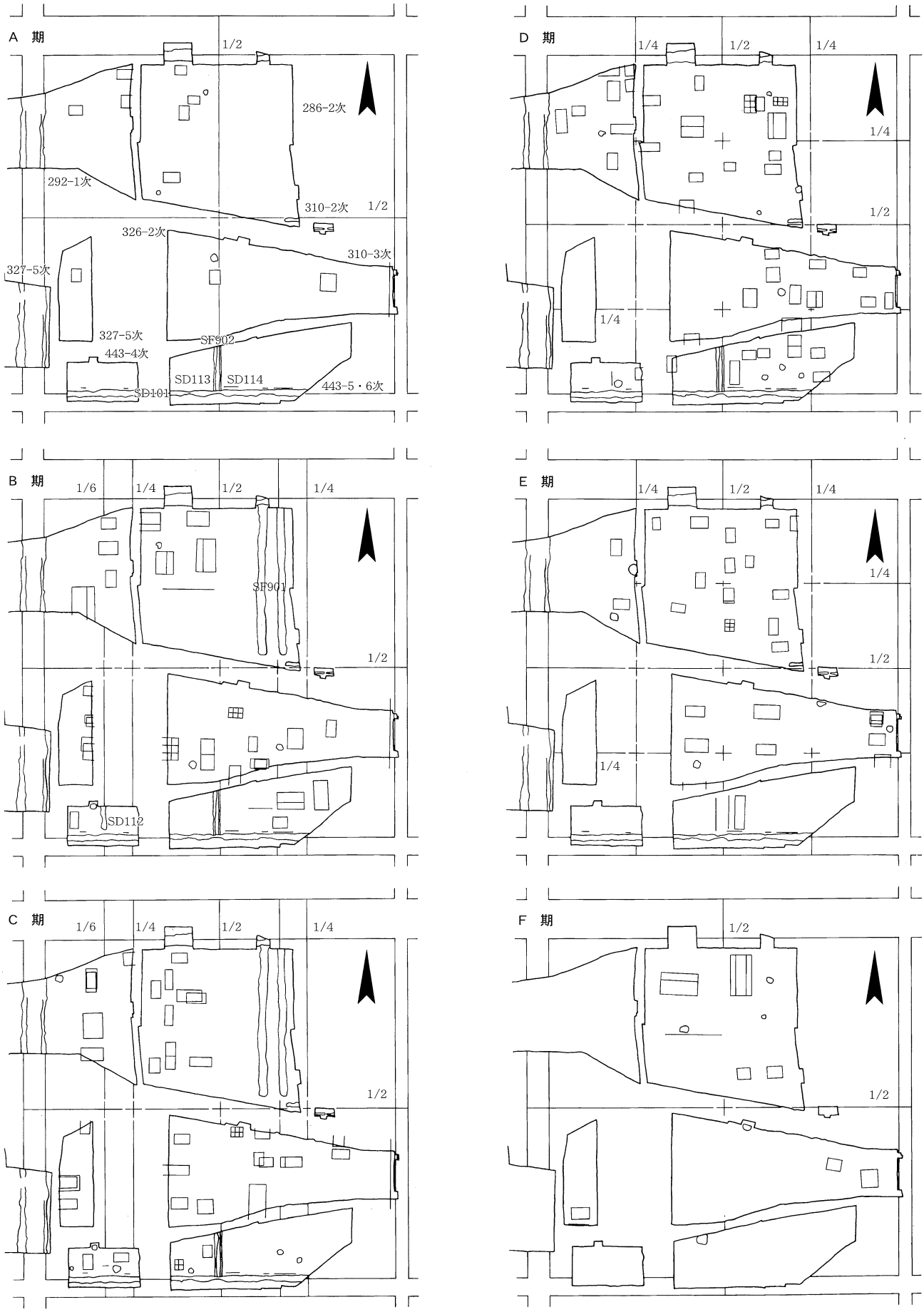
C期（奈良時代末）　側溝心を基準に遺構を配置している。坪内道路の位置はB期と変わらない。坪内は、井戸の配置から見ると、1/4または、1/8に区画して利用していたと思われる。建物の規模は、B期に比べると小さくなっているものが多い。坪の北西部では、建物の規模が小さくなった分、その数が増加しているようである。SD112の廃絶後、その南端に門が造られる。この門心を基準に配置されている建物もあり、西から1/6の区画は、B期に引き続き使われているようである。

D期（平安時代初頭）　側溝心を基準に遺構を配置している。東から1/3に位置する坪内道路SF901と、西から1/6に位置する門が廃絶するが、坪内を東西1/2、南北1/2に分ける坪内道路は存続し、なおも区画の基準になっている。坪東辺の掘立柱塀も廃絶する。SF901と東辺の掘立柱塀のあったところにも建物が建ち、坪の東側への利用範囲が広がるようである。

1/8、または1/4の区画を宅地利用していたと思われるが、南北1/4の線上に沿って配置される建物もあることから、坪内1/16の区画を宅地利用している場所もあると考える。

E期（平安時代前半）　側溝心を基準に遺構を配置している。SF902の東西両側溝SD113・114からは、この時期の遺物が出土しておらず、廃絶していた可能性があるが、SF901のように廃絶後に建物が建ち、道路が消滅した様子は見られない。SF902は、側溝に替わって2条の掘立柱塀で区画され、坪内道路として残っていたと考える。坪内1/8または1/16の区画を宅地利用していたと思われる。

F期（平安時代中頃から中世まで）　SD101から9世紀末の遺物が出土しているが、側溝が機能していたかどうかは不明である。　（細川富貴子）



平城京右京二条三坊六坪の遺構変遷図

(2)　平城京跡（右京二条三坊十一坪）の調査　第443-1・-2・-3次

Ⅰ　はじめに

本年度は、平城京右京二条三坊十一坪内の3箇所において発掘調査を実施した。今回の発掘区は、坪の西半中央（第443-1次）および坪の南辺を区画する十一・十二坪坪境小路に沿って西半（第443-2次）と東半（第443-3次）に設定した。同坪における調査は、本年度をもって一応終了した。十一坪内においては、条坊道路部分も含め、これまで7度の調査が行われており、調査面積は約1.2haで、坪のおよそ65％にあたる。

調査地の層相は各発掘区で異なる。第443-1次発掘区の基本層序は、耕土以下、灰褐色土が0.15m前後、暗灰色シルトおよび砂質土が0.2m前後堆積し、地表下約0.5mで黄灰白色または青灰色の粘土・シルトに至る。この上面が遺構の存する面である。なお、発掘区西半には、奈良時代のものと思われる整地土が認められる。第443-2次発掘区は、地表下約0.3mの耕土直下で黄灰色または黄褐色の粘土となる。発掘区西半は、奈良時代に谷地形を埋めて整地しており、遺構の存する面は、この整地土および粘土上面である。第443-3次発掘区は、西半では、第443-2次発掘区と同様であるが、東半は、耕土下に灰褐色砂質土が0.3m前後堆積し、黄灰色シルトとなる。遺構の存する面は、黄灰色粘土・シルトの上面である。遺構の存する面の標高は、第443-1次発掘区で約72.2m、第443-2次発掘区で約74.4m、第443-3次発掘区では73.5～73.9mで東に下っている。

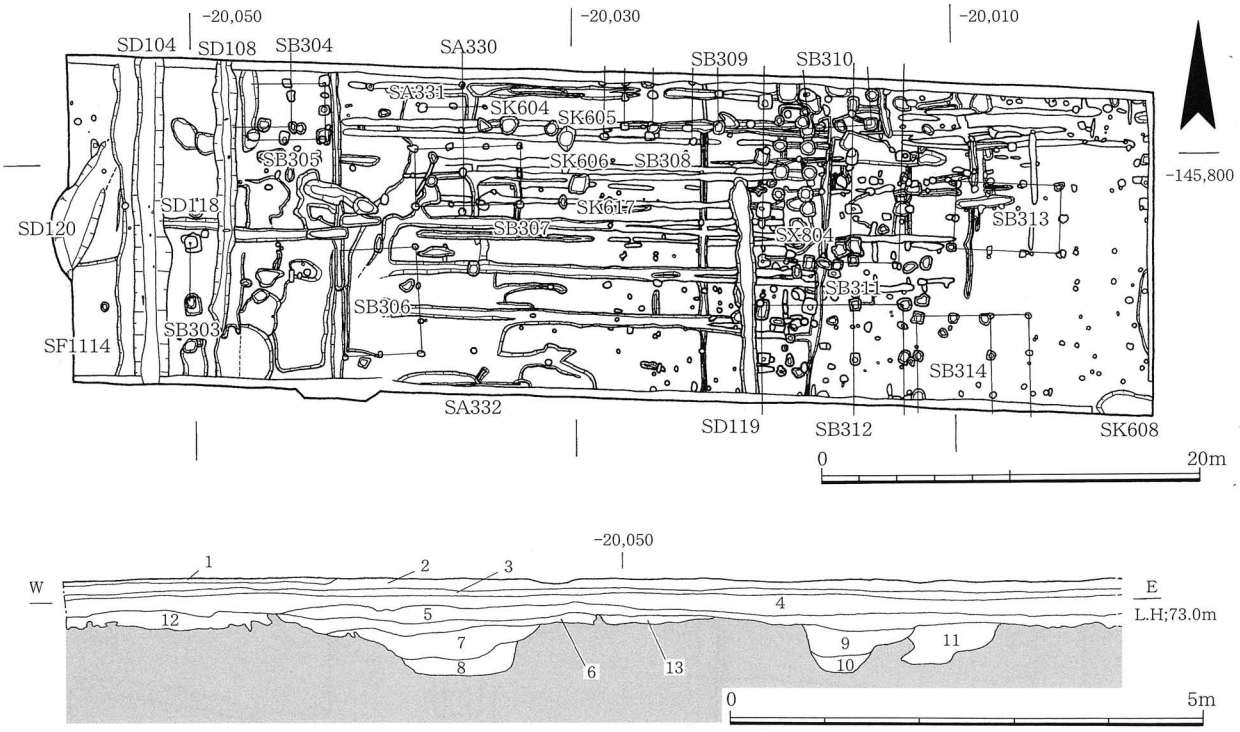
Ⅱ　検出遺構

遺構については、これまでの坪内の調査に続く通し番号を付し、遺構番号の後にその調査次数を記した。建物・塀、井戸は一覧表にまとめた。

古墳時代の遺構

SD06 〔443-2〕　発掘区中央で約18m分検出した、断面U字形を呈す南北溝である。幅0.5m、深さ0.4mである。

SD07 〔443-2〕　南西から北東に斜行する溝で、発掘区南東隅を横切る約9m分を検出した。幅0.8



1. 灰黒色土　2. 明灰褐色土　3. 暗灰褐色土　4. 暗灰色シルト　5. 暗灰色砂質土　6. 淡茶灰色土（SD104埋土）　7. 灰色砂質土（SD104埋土）　8. 青灰色砂（SD104埋土）　9. 暗灰色シルト（SD108埋土）　10. 暗青灰色砂（SD108埋土）　11. 灰色砂質土　12. 暗灰色砂　13. 暗灰黒色土

第443-1次調査　遺構平面図　1/400　及び発掘区北壁（西半）土層図　1/80

～1.0m、深さ0.4mで、断面はU字形である。

SD08 〔443-2〕　SD07の南に並行する溝で、約5m分検出した。幅0.5m、深さ0.3mで、断面はV字形である。

SD09 〔443-3〕　南西から北東に斜行する溝で、約4m分検出した。幅0.5m、深さ0.4mで、断面はU字形である。

SD10 〔443-3〕　SD09の東に並行する溝である。長さ14.0m、幅0.7m、深さ0.5mで、断面はU字形である。

これらの溝のうち、SD08は第351-1次調査で検出された溝に繋がるものと思われる。

奈良時代・平安時代前半の遺構

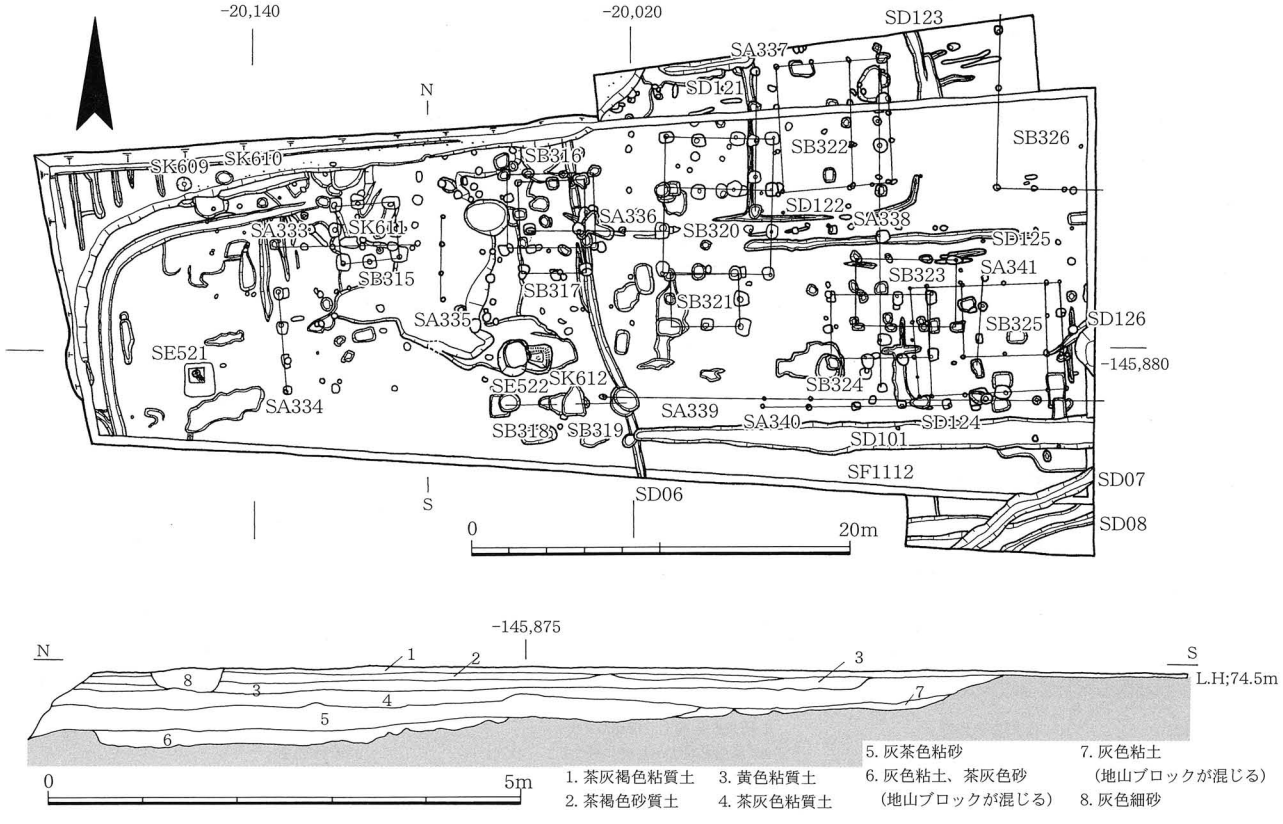
主な検出遺構は、道路2条、溝7条、掘立柱建物22棟、掘立柱塀11条、門3棟、井戸5基、土坑10基で、そのほか、甕を据付けたと思われる土坑群や土器埋納遺構がある。

SF0611 〔443-3〕　西三坊坊間路である。路面幅は約6mで、道路心の座標値は、X＝－145,882.20、Y＝－19,922.20である。この道路遺構は、第443-3次発掘区の北で2箇所検出されており、宅地面より道路面が低い、切り通し状の道路であったことが確認されている。今回の調査においてもそのことが追認された。道路は、北へ向かって緩やかな下り勾配で、道路面の標高は、発掘区南端で約73.2m、北端で73.0mである。

SD103 〔443-3〕　西三坊坊間路西側溝である。幅3.0～3.7m、深さ0.6～0.7mで、溝心の座標値は、X＝－145,888.50、Y＝－19,926.90である。溝底は、道路面と同様に北へ向かって下り勾配であり、標高は、南端で約72.5m、北端で約72.3mである。十一・十二坪坪境小路との交差点部分は、道路を横切って南に繋がっている。この部分では、溝内に杭列が残存しており、西三坊坊間路と十一・十二坪坪境小路の交差点には、側溝をまたぐ橋が架かっていたと考えられる。

SD129 〔443-3〕　西三坊坊間路東側溝である。幅1.8～2.1m、深さ約0.3mで、溝心の座標値は、X＝－145,887.30、Y＝－19,918.20である。溝底は北がやや低い。

SF1112 〔443-2・-3〕　十一・十二坪坪境小路である。路面幅は4.8～5.8mで、道路心の座標値は、



第443-2次調査　遺構平面図　1/400　及び発掘区中央（N—S）土層図　1/80

X＝－145,888.30、Y＝－19,953.00である。道路面は東へ向かって下り勾配で、標高は、西端で約74.4m、東端で約73.1mである。西三坊坊間路に取り付く付近では、特に勾配が急である。

SD101 〔443-2・-3〕　十一・十二坪坪境小路北側溝である。幅約2.5m、深さ約0.4m。溝心の座標値は、X＝－145,884.40、Y＝－19,953.00である。溝底は、道路面と同様な東へ向かう下り勾配で、標高は、西端で約74.2m、東端で72.5m。やはり西三坊坊間路に取付く付近では、勾配が急である。

SD128 〔443-3〕　十一・十二坪坪境小路南側溝である。幅約1.5m、深さ約0.2m。溝心の座標値は、X＝－145,891.70、Y＝－19,953.00である。溝底の標高は、西端で約73.5m、東端で約73.0m。北側溝と同様の勾配となっている。

SF1114 〔443-1〕　十一・十四坪坪境小路である。路面幅は３m以上、路面の標高は約72.7mである。路面はほぼ平坦である。

SD104 〔443-1〕　十一・十四坪坪境小路東側溝である。幅約1.7m、深さ約0.5m。溝心の座標値は、X＝－145,795.00、Y＝－20,052.10である。溝底の標高は約72.2mで、小路の道路面と同じく、ほぼ平坦である。

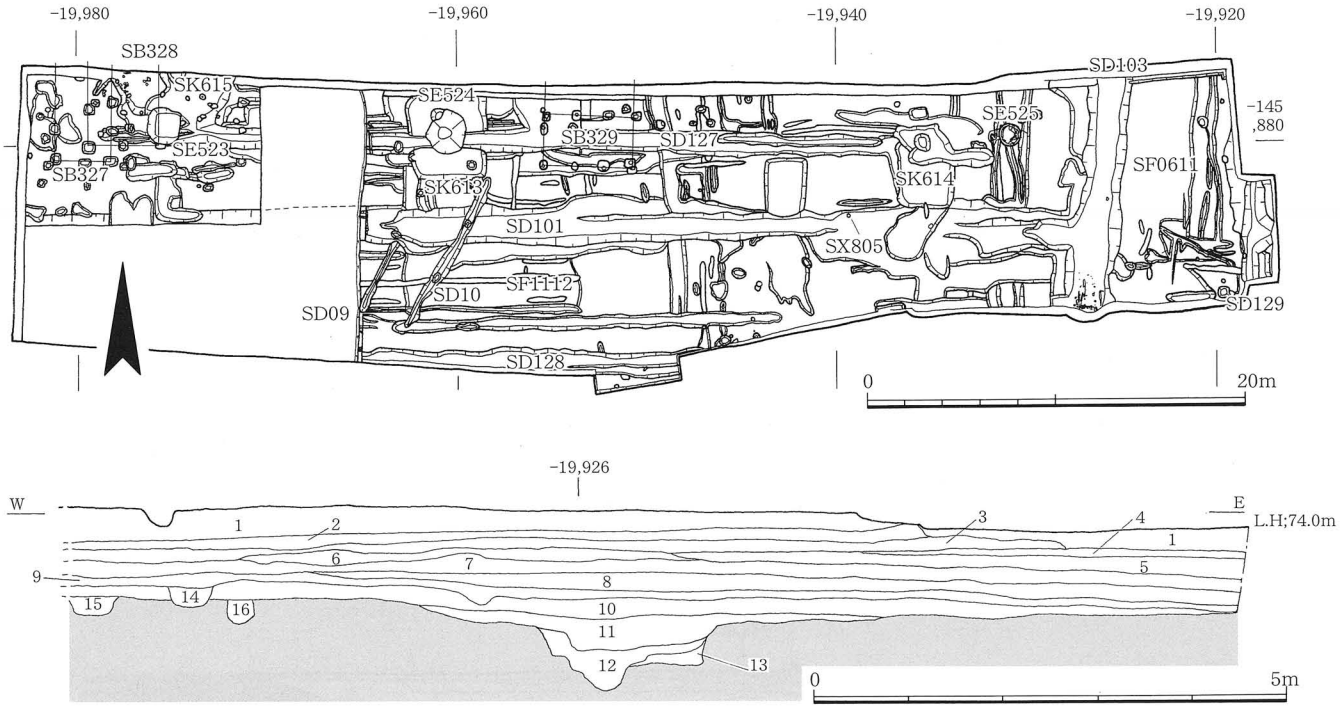
SD108 〔443-1〕　SD104の東に並行する、幅約1.0m、深さ約0.5mの南北溝であり、南は発掘区内で途切れている。SD104に沿って築地塀が築かれていたと考えると、この溝が築地塀の雨落溝である可能性が高い。

SD118 〔443-1〕　SD104とSD108の間を繋ぐ長さ2.5m、幅約0.6m、深さ約0.3mの東西溝である。道路側溝SD104に取り付く部分が急勾配になっており、SD108からSD104への排水路であったと思われる。

SD119 〔443-1〕　長さ11m以上、幅約0.9m、深さ約0.15mの南北溝である。坪の東辺から4分の1に位置しており、宅地内を区画するための溝である可能性が考えられる。

掘立柱建物・塀　掘立柱建物および塀については表にまとめ、一部について詳細な説明を記す。

SB303 〔443-1〕は、門と判断したものである。十一・十四坪坪境小路東側溝SD104と築地雨落溝SD108に挟まれ、両溝を繋ぐSD118のすぐ南に位



1. 耕土
2. 橙黄褐色砂質土
3. 灰茶色砂質土
4. 橙灰色砂質土
5. 茶灰色砂質土
6. 黄灰色砂質土
7. 茶灰褐色砂質土
8. 灰褐色砂質土（切通し埋土）
9. 灰黄色粘質土（切通し埋土）
10. 灰色粘質土（切通し埋土）
11. 灰褐色粘砂土（SD103埋土）
12. 暗灰色粘土、灰色土（炭が混じる、SD103埋土）
13. 灰色粘土、灰色砂、青灰色シルト（SD103埋土）
14. 灰色土
15. 灰色砂
16. 暗灰色粘砂土

第443-3次調査　遺構平面図　1/400　及び発掘区北壁（東半）土層図　1/80

掘立柱建物・塀一覧表

遺構番号	棟方向	規　模（桁行×梁間）	桁行全長 m（尺）	梁間全長 m（尺）	桁行柱間寸法 m	梁間柱間寸法 m	廂（縁）の出 m	備　考	調査次数
SB303	南北	1	3.3（11）		3.3			門。	443-1
SB304	南北	2以上×1以上	3.6（12）以上	1.5（5）	1.8等間	1.5			443-1
SB305	東西	2以上×2	3.6（12）以上	3.0（10）	1.8等間	1.5等間			443-1
SB306	南北	3×2	5.85（1.95）	4.2（14）	1.95等間	2.1等間			443-1
SB307	東西	3×2	5.4（18）	3.0（10）	1.8等間	1.5等間			443-1
SB308	南北	1以上×2	2.7（9）以上	4.8（16）	2.7	2.4等間			443-1
SB309	南北	1以上×3	1.8（6）以上	5.1（17）	1.8	1.8等間	1.5	西廂付。	443-1
SB310	南北	1以上×2	1.8（6）以上	3.6（12）	1.8	1.8等間		ＳＢ311より古い。	443-1
SB311	南北	4以上×3	10.8（36）以上	7.2（24）	2.7等間	2.4等間	2.4	東廂付。間仕切り？。内部に甕据付土坑群あり。	443-1
SB312	南北	2以上×3	5.4（18）以上	7.2（24）	2.7等間	2.4等間	2.4	東廂付。	443-1
SB313	東西	3×2	5.4（18）	3.6（12）	1.8等間	1.8等間			443-1
SB314	南北	2以上×3	4.2（14）以上	6.0（20）	2.1等間	東から2.1、1.8、2.1	2.1	東廂付。	443-1
SB315		2×2	3.0（10）	3.0（10）	1.5等間	1.5等間			443-2
SB316	東西	3×2	5.1（17）	3.9（13）	西から1.8、1.8、1.5	1.95等間			443-2
SB317	南北	3×2	4.65（15.5）	3.3（11）	北から1.65、1.5、1.5	1.65等間			443-2
SB318	東西	1	2.7（9）		2.7			門。	443-2
SB319	東西	1	3.0（10）		3			門。ＳＢ318より新しい。	443-2
SB320	東西	3×3	5.4（18）	6.9（23）	1.8等間	2.1等間	2.7	北廂付。	443-2
SB321	東西	2×2	3.6（12）	3.0（10）	1.8等間	1.5等間		ＳＢ320より古い。	443-2
SB322	南北	3×3	6.75（22.5）	5.4（18）	2.25等間	1.8等間	1.8	東廂付。中世。	443-2
SB323	東西	3×2	5.4（18）	3.6（12）	1.8等間	1.8等間			443-2
SB324	東西	3×2	5.4（18）	3.6（12）	1.8等間	1.8等間			443-2
SB325	南北	3×5	5.7（19）	7.95（26.5）	北から2.1、1.8、1.8	東から0.9、1.8、2.1、2.25、0.9	0.9	東西に縁が付く。間仕切りあり。中世。	443-2
SB326		2以上×2以上	8.1（27）以上	4.2（14）以上	（5.1）、3.0	2.1等間			443-2
SB327	南北	2以上×2	3.0（10）以上	3.0（10）	1.5等間	1.5等間			443-3
SB328	南北	（4）×2	8.1（27）	3.6（12）	北から（6.0）、2.1	1.8等間			443-3
SB329		3×1以上	4.95（16.5）	2.4（8）	1.65等間				443-3
SA330	南北	3以上	6.6（22）		北から2.1、2.1、2.4				443-1
SA331	東西	2	3.3（11）		西から1.5、1.8				443-1
SA332	東西	3	5.1（17）		西から1.8、1.8、1.5				443-1
SA333	東西	6	9.0（30）		1.5等間				443-2
SA334	南北	3	5.4（18）		1.8等間				443-2
SA335	南北	3	4.5（15）		1.5等間				443-2
SA336	東西	3	7.2（24）		2.4等間				443-2
SA337	南北	4以上	7.2（24）		1.8等間				443-2
SA338	南北	7	17.7（59）		北から2.7が3間、2.4が4間				443-2
SA339	東西	7以上	23.1（77）		西から2.7、3.3、2.7、3.3、2.4、8.7				443-2
SA340	東西	4	9.6（32）		2.4等間				443-2

井戸一覧表

遺構番号	掘形			枠			主要出土遺物	備　考	調査次数
	平面形	平面規模　（m）	深さ（m）	構造	内法（m）	濾過装置等			
SE521	隅丸方形	東西1.55×南北1.75	2.3	方形横板組	0.7×0.7	須恵器片、瓦片を敷く	曲物	枠7段分残存。	443-2
SE522	楕円形	東西1.75×南北1.85	2.7				曲物・桃の種	SK612より新しい。	443-2
SE523	隅丸方形	東西2.0×南北2.0	1.3						443-3
SE524	不整円形	東西2.1×南北2.4	1.6						443-3
SE525	楕円形	東西1.7×南北1.1以上	0.8	須恵器大甕	体部径1.04	曲物		板で補強.	443-3

置する。この位置は、坪を南北に４等分した場合、北から二つめの区画のほぼ南北中央にあたる。

また、SB303の中心軸を東へ延長した線を対称軸として、同規模の建物SB311とSB312が南北に並んでいる。このことから、SB303は、SB311とSB312が存在した時期に、小路に面して開いていた門の可能性がある。

SB304〔443-1〕は、重複関係から築地雨落溝SD108より古いと判断した建物である。したがって、築地塀がめぐる以前にも、建物が存在していたものと考えられる。

SB311〔443-1〕は、東廂付の建物であり、内部に甕据付痕跡と思われる土坑群SX804を伴っている。

SX804は、直径0.5～0.8m、深さ0.1～0.3mの平面円形の土坑が、東西2列、南北4列に並んだ土坑群である。断面形は椀状を呈す。付近の調査でも同様な遺構がいくつか検出されている。

SB318・319〔443-2〕も門と判断したものである。SB318の方が古い。SB318は、北側の第390次調査で検出した東西に並列する建物の中心線上にあり、SB319は、坪を東から4分の1に分割する線上

右京二条三坊十一坪全景（上が北）

にあたる。このことから、両者は坪の宅地利用の変遷に伴って建て直された門の可能性が考えられる。

SB328〔443-3〕は、第351-1次調査の掘立柱建物SB265の柱列の一部とつながり、桁行4間の南北棟建物になる可能性が高い。

SA332〔443-1〕は、発掘区の南壁際で検出した3間の東西柱列であるが、その北に位置する東西棟SB307とは、南北棟SB306を中心として対照的な位置関係にある。このことから、SA332はSB307と同規模な2間×3間の東西棟建物の北側柱列である可能性がある。

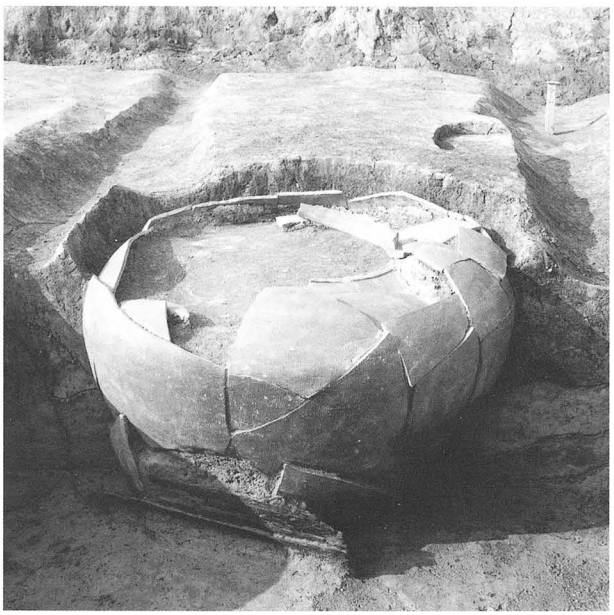
これらの建物は、重複関係から3時期以上の変遷が確認できる。

井戸　井戸についても表にまとめたが、構造が特殊なSE525について詳細に記す。SE525〔443-3〕は、須恵器の大甕を井戸枠に転用したものである。掘形は、東西に長い楕円形であるが、東に張り出した段掘り状の部分は、甕を据える作業の必要性によるものと思われ、南北については、甕がちょうど入る程度の寸法でしかない。構造は、砂層まで掘り抜かれた掘形の底に直径約60cmの曲物を据

第443-1次調査　SD104・108、SB303（南から）

第443-3次調査　SF0611、SD103（北から）

第443-2次調査　SK611全景（西から）



第443-3次調査　SE525全景（南から）

え、それにかぶせるように底を打ち欠いた大甕を置いている。おそらく、甕の底を打ち欠いた際に、予定以上に割れたものと思われ、余計に欠けた部分は板をあてがって塞いでいる。また、甕の口縁から肩部にかけても意図的に打ち欠いたものと思われるが、このとき、下に据えた曲物の直上に広く打ち欠いた部分がくるよう意識されていたようである。おそらくは、一旦甕を据えた後、曲物との位置関係を見て調節したものと思われる。出土した土器からみて、この井戸は平安時代中頃には埋まったものと考えられる。

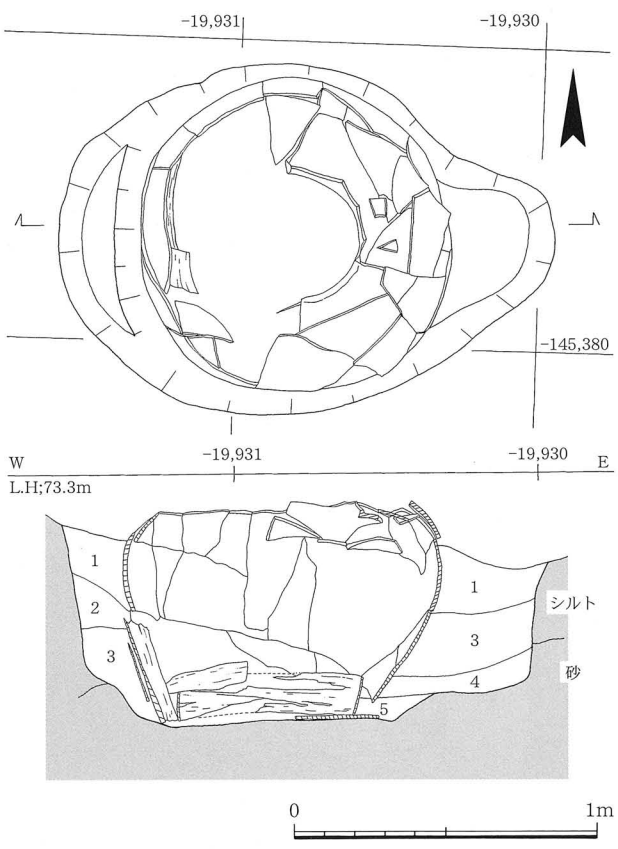
SK604 〔443-1〕　直径0.8m、深さ0.3mの、平面円形の土坑である。埋土には粘土ブロックが混じり、一度に埋められたものと考えられる。

SK605 〔443-1〕　東西0.6m、南北0.8m、深さ0.25mの、平面楕円形の土坑である。埋土から奈良時代の須恵器壺がほぼ完形を保って出土した。

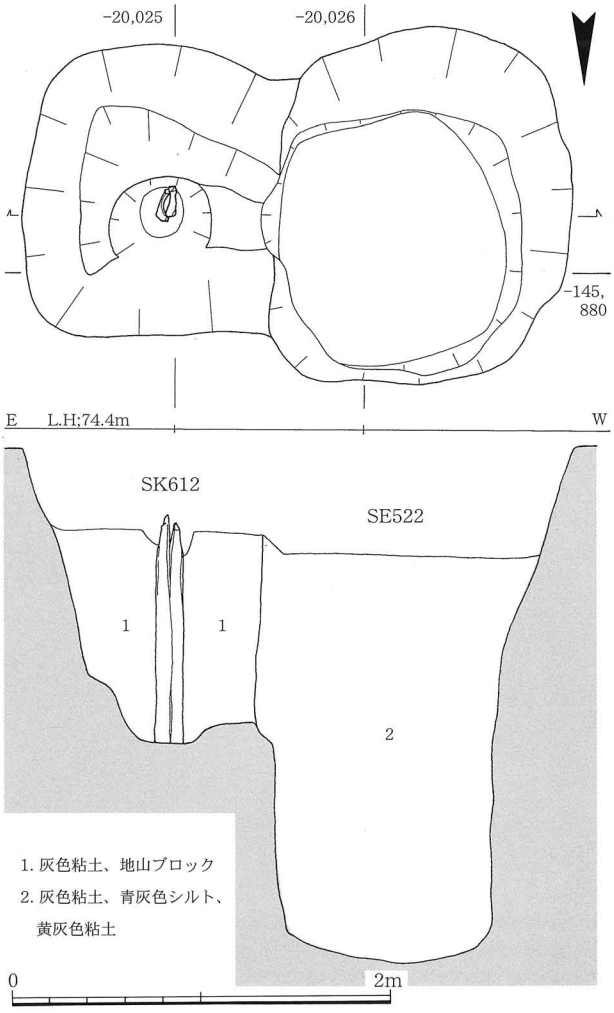
SK606 〔443-1〕　東西1.0m、南北1.4m、深さ0.7mの、平面楕円形の土坑である。断面は、瓢箪状に中央が内に張り出ししているが、これは、湧水が激しいため、砂層となる底部付近の壁が崩落したものと思われる。埋土の状態から、土坑は一度に埋められたものと考えられ、その際に入れられたと思われる奈良時代の土師器甕と高杯が底から出土した。以上の状況から、この土坑はそれらの土器を埋めることを目的とし、掘ってからすぐに埋め戻されたものと考えられる。

SK607 〔443-1〕　一辺0.9m、深さ0.2mの平面方形の土坑である。四壁がほぼ垂直に掘り込まれた箱状の土坑で、底の中央から奈良時代の須恵器長頸壺と土師器甕が出土した。土器の出土状態からみると、土坑の大部分は削平されたと考えられる。

SK608 〔443-1〕　東西3m以上、南北1m以上、深さ0.25mの、平面楕円形と考えられる土坑である。



第443-3次調査　井戸SE525平面及び断面土層図　1/25



第443-2次調査　SE522、SK612平面及び断面土層図　1/40

埋土には炭が多く含まれていた。

SK609〔443-2〕　直径0.8m、深さ1.25mの、平面円形の土坑である。埋土から奈良時代の土師器甕・皿が出土した。検出面は、後世に地下げされており、本来の奈良時代の面から考えると、土坑の深さは2m以上あったと考えられる。この土坑は、井戸の可能性もあるが、同じ発掘区内の井戸掘形が砂層まで掘り抜かれて湧水するのと異なり、周囲が粘土層で湧水しないことから、井戸掘形ではないと判断した。

SK610〔443-2〕　東西0.9m、南北0.7m、深さ0.5mの、平面楕円形の土坑である。埋土の下位には、炭が混じっていた。

SK611〔443-2〕　東西1.0m、南北0.55m、深さ0.5mで、平面形は、東辺が内彎する異形の隅丸方形状の土坑である。土坑内は、灰褐色粘土で充填されており、西半にはさらにその上から小土坑が掘り込まれ、炭を多く含む土で埋められていた。同じく北東部には、鋳造作業に用いられる坩堝が据えられた痕跡かと思われる直径約20cm、深さ約5cmの椀形の焼土が残り、一部は、かなり焼けしまって、土器状になっていた。これら上面から掘り込んだ小土坑はSK611と一体のものと判断した。椀形の焼土の縁から西へ約10cm、細長く焼土が残っており、その中から鋳型の湯口で固まったものと思われる銅塊が出土した。これらの状況から、SK611は、銅製品の鋳造に関わる遺構の可能性が考えられる。ただし、SK611本体には、熱を受けた様子が認められなかった。

SK612〔443-2〕　東西1.3m以上、南北1.5m、深さ1.55mの、平面隅丸方形と推定される土坑である。中心部には、筒状に加工した柱が高さ1.2m分残存していた。長さ1.2m以上の角材を半裁し、互いの半裁面を浅く刳り抜いた後、再び合わせたものである。断面は0.2×0.15mの長方形で、内部に断面レンズ状の空洞がある。これとよく似た遺構が第353-1次調査（SE113）でも検出されている。この中空の柱が井戸の気抜きのための筒で、この土坑が井戸掘形である可能性も考えられるが、これと重なり合う井戸SE522や他の井戸掘形の深さを考えると、当時の湧水層まで達していなかった可能性が高く、また、底面に向かって狭くなる形状も通常の井戸掘形とは異なっているように思われる。このような点から、この遺構の用途は不明であるが、中空の柱を立てた土坑として捉えておきたい。

SK613〔443-3〕　東西4.2m、南北4.5m以上、深さ0.5mの、平面隅丸方形の土坑である。SE524より新しい。

SK614〔443-3〕　東西4.5m、南北2.0m以上、深さ0.5mの、平面不整円形の土坑である。

SX805〔443-3〕　SD101の北岸に位置する、直径0.23m、深さ0.15mの平面円形土坑に土師器甕が埋納された遺構である。甕の下半部のみが残存し、底部に銅銭が置かれていた痕跡が認められた。地鎮もしくは胞衣壺の可能性がある。

平安時代後半・鎌倉時代の遺構

主な遺構は、掘立柱建物2棟、溝8条、土坑1基である。建物の規模は、表に一括して記した。

SB322、SD121～123〔443-2〕　東廂付建物とそれを囲む溝である。溝は、幅0.5m前後、深さ0.05～0.1mで、途切れながらＳＢ322の東西および南を廻るが、本来繋がっていたものが削平された可能性が高い。発掘区外となる北側も含め、四周を囲んでいたと思われる。建物は北でやや西に振れる。

SB325、SD124～126〔443-2〕　東西廂（もしくは縁）の付く建物とそれを囲む溝である。溝は、幅0.3～0.7m、深さ0.05～0.1mで、やはり途切れながら建物の東西および北を廻る。SD121～123同様、部分的に削平されていると思われる。建物の主軸は北でやや西に振れ、建物内には間仕切りと思われる柱掘形がある。

SD120〔443-1〕　幅約1.7m、深さ0.3mの、北東から南西へ斜行する溝である。

SD127・SK615〔443-3〕　東西7.5m、南北5.0m以上、深さ0.4mの平面不整の円形土坑とそこから東へ延びる長さ約37m、幅約1m、深さ0.3mの溝である。埋土が同一であることから、両者は併存し、同時に廃絶されたことが考えられる。埋土から12世紀前半の瓦器、土師器が出土した。

（松浦五輪美）

Ⅲ　出土遺物

土器・土製品が遺物整理箱で57箱、瓦が遺物整理箱で53箱、磚仏1点（口絵４）、木製品38点、金属製品8点、銭貨22点、石製品17点、石器21点、坩堝2点、鞴羽口3点がある。

土器・土製品　埴輪、土師器、須恵器、黒色土器A類、奈良三彩、緑釉単彩陶器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入磁器、瓦器、瓦質土器、近世陶磁器、墨書土器、製塩土器、硯、竈、土馬がある。

遺物の時期は、8世紀～9世紀後半、9世紀末～10世紀前半、12世紀中頃～後半である。古墳時代と近世の遺物も少量出土している。ここでは、8世紀後半～9世紀初頭を中心とするSD103出土土器について述べる。

SD103からは、遺物整理箱11箱分の土器が出土した。器種構成を26頁の表にまとめ、一部を図示した。土師器と須恵器の出土破片数の比率は、約6：4で、須恵器が若干多い。食器だけで土師器と須恵器を比較すると、土師器は21.2％、須恵器は16.1％を占める。食器は、土師器に重点を置いて構成されているようである。また、土師器、須恵器ともに皿Bが少ない。高台の付く大型の食器は減少しているようである。土師器の器種構成を見ると、食器が煮炊具よりやや多く出土している。平城宮・京で一般的に知られている出土例では、食器が煮炊具を上回る例が多い[1]ことと符合する。食器の中では、椀Aが多い。椀Aが主要器種として量的に増えてくるのは8世紀後半～9世紀前半であり[2]、土器の時期を示していると考える。須恵器の食器と貯蔵器の破片数を比較すると、貯蔵器は食器の2倍以上の割合である。これは、朱雀大路東側溝SD1002の器種構成と類似する[3]。

1～19、21～23は土師器である。杯A（1・2）はともに外面全体をケズリで調整し、1の口縁端部上端は、強くヨコナデしているため、ケズリが及ばない。杯C（3・4）は、この時期になると、器高が低くなり、皿として使用されたと思われる。口縁端部が内傾する。3はヨコナデ、4は底部外面をケズリで調整する。皿A（5～8）の調整をみると、6は底部外面を、他は外面全体を削る。7の底部外面には「衣」と読める墨書がある。9・13～15は壺Bである。9の体部外面には墨書があり、人面墨書土器と思われる。10は、杯または皿の底部破片で、外面に「會齋」か「會齊」と読める墨書がある。外面にケズリが見られる。11・12は杯蓋である。椀A（16～18）は、16は外面全体、18は底部外面をケズリ、17はユビオサエで調整し、3点ともミガキを施す。16の口縁部内外面と17の口縁端部内外面に煤が付着する。19は盤B、21～23は甕である。甕の口縁部形態は、21がA（外反気味に開き、端部内側が小さく丸く肥厚するもの）、22がⅠ（内彎し、端面が外傾するもの）、23がG（外反気味に開き、端部は丸みのある三角形状である）である[4]。いずれも火を受けた痕跡が残る。20は黒色土器A類杯である。口縁部内面に、横方向のミガキを密に施す。外面は表面が剥離して、調整は不明である。

24～45は須恵器である。杯蓋（24～27）は、器高が低く、頂部が平坦である。26は硯に転用している。杯B（28～31）は、高台が底部外面の端近くに付くものが多い。28～30の底部内面は摩耗のため調整痕が消失している。29の底部外面に「□重」、31の底部外面に「角」と読める墨書がある。杯A（32～35）には小型のもの（32）、浅いもの（33）、深いもの（34・35）の3タイプが見られる。33の底部外面には「西」と読める墨書がある。36は土師器杯Aを模倣した杯Cである。37は丸みを帯びた底部外面をロクロケズリで調整する。皿Cよりも器高が高い点から、皿Aとする。皿C（38～40）は、口縁端部に外傾する面をもつもの（38）と、口縁端部を外方へつまみ出すもの（39・40）がある。皿B（41）は硯に転用している。42は壺M、43は壺G、44・45は甕である。他に土馬が7点ある。

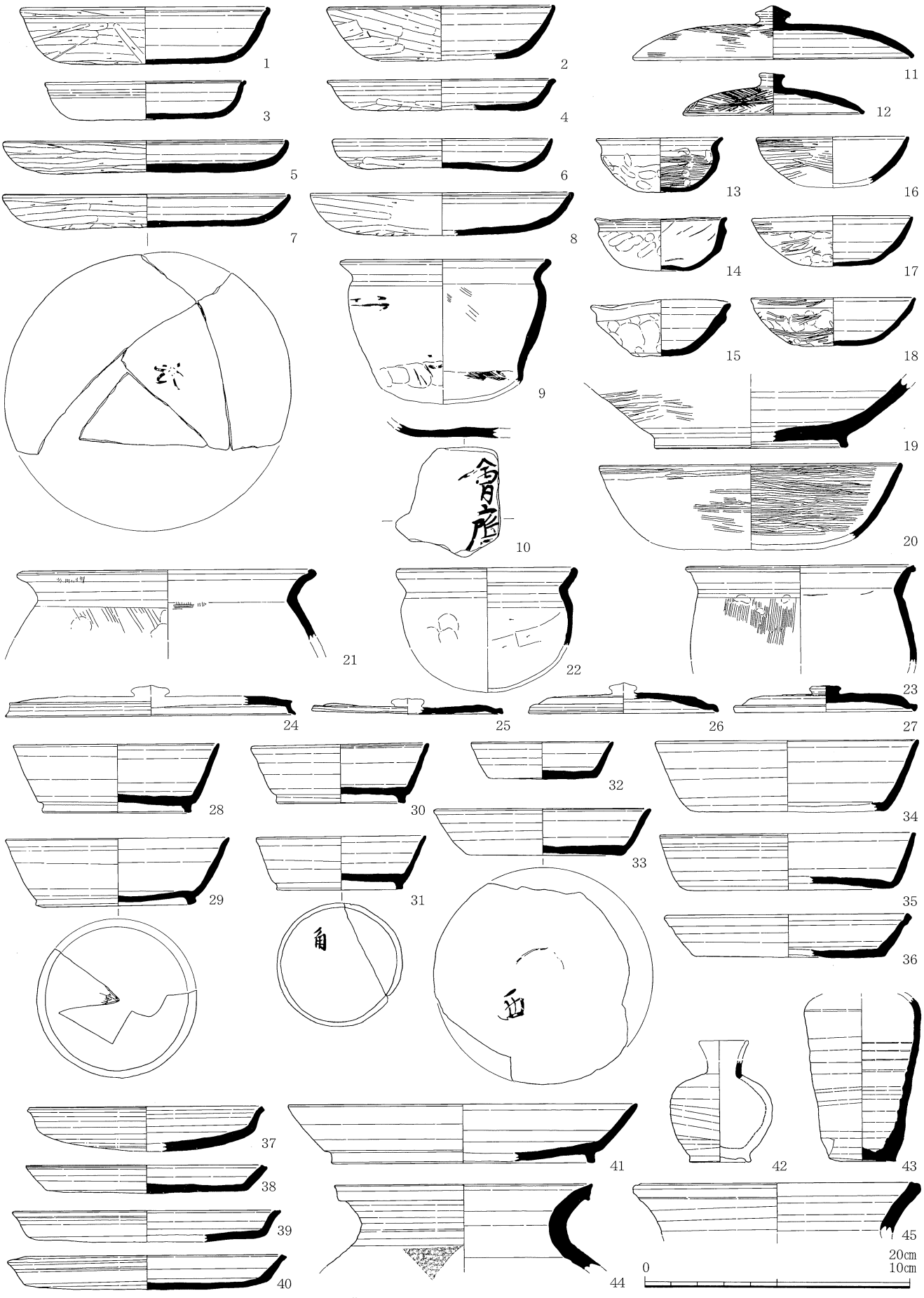
墨書土器は、図示したもの（7・9・10・29・31・33）を含めて60点（土師器13点、須恵器37

1）三好美穂「平城京の土師器」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東―』古代の土器研究会　1992。

2）小森俊寛「概説」『古代の土器1　都城の土器集成』古代の土器研究会編　1992。

3）三好美穂・ほか「第Ⅲ章出土遺物　2土器」『史跡平城京朱雀大路跡―発掘調査・整備事業報告―』奈良市教育委員会　1999。

4）小森俊寛「総説」『古代の土器4　煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会編　1996。



溝SD103出土土器　1/4（10は1/2）

SD26出土土器の器種別破片数の内訳と比率

食器 1,645点 (49.1%)	杯 204点 (12.4%)	A 43点	(21.1%)
		B 18点	(8.8%)
		C 57点	(27.9%)
		AあるいはB 86点	(42.2%)
			(計100%)
	皿 184点 (11.2%)	A 165点	
		C 14点	
		AあるいはB 5点	
	椀 147点 (8.9%)	A 133点	
		C 14点	
	杯あるいは皿 941点(28.1%)	杯Aあるいは皿A159点	
		不明 782点	
	杯あるいは椀 21点 (0.6%)	杯Aあるいは椀A21点	
	蓋 24点 (1.5%)	杯蓋 4点	
		器種不明 20点	
	高杯 124点(7.5%)		
	(計100%)		
貯蔵器 59点 (1.8%)	鉢 1点 (1.7%)		
	壺 47点 (79.7%)	A 9点	
		B 38点	
	盤 10点 (16.9%)	B 5点	
		不明 5点	
	器種不明1点(1.7%)		
	(計100%)		
煮炊具 1,574点 (47.0%)	甕 1,543点 (98.0%)		
	羽釜 9点 (0.6%)		
	竈 6点 (0.4%)		
	甑 16点 (1.1%)		
	(計100%)		
器種不明 71点 (2.1%)			
(計100%)			

黒色土器 A 21点 (0.3%)

食器	杯 19点	
	椀 1点	
煮炊具	甕 1点	

緑釉単彩陶器（羽釜） 3点 (0.04%)

緑釉陶器 （壺） 2点 (0.03%)

製塩土器 253点 (3.2%)

食器 1,250点 (28.4%)	杯 473点 (37.8%)	A 47点	(9.9%)
		B 220点	(46.5%)
		C 13点	(2.7%)
		AあるいはB 193点	(40.8%)
			(計100%)
	皿 70点(5.6%)	A 4点	(5.7%)
		B 11点	(15.7%)
		C 53点	(75.7%)
		器種不明 2点	(2.9%)
			(計100%)
	杯あるいは皿 438点 (35.0%)	杯Aあるいは皿A 76点	
		器種不明 362点	
	蓋265点 (21.2%)	杯蓋 36点	
		杯または皿蓋 229点	
	高杯4点 (0.3%)		
	(計100%)		
貯蔵器 3,129点 (71.1%)	鉢135点 (4.3%)	A 8点	
		D 33点	
		F 1点	
		不明 93点	
	壺714点 (22.8%)	A 9点	
		E 3点	
		G 32点	
		K 5点	
		L 18点	
		M 14点	
		蓋 4点	
		器種不明 629点	
	壺あるいは鉢69点 (1.6%)		
	盤 7点 (0.2%)		
	平瓶12点 (0.4%)		
	横瓶8点 (0.3%)		
	甕2,178点 (69.6%)		
	器種不明 6点(0.1%)		
	(計100%)		
器種不明 21点 (0.5%)			
(計100%)			

土器総点数 8,028点

点、人面墨書土器10点）ある。

土師器・須恵器は、SD103から37点、SD104から2点、SD128から1点、SE521から1点、SE522から1点、SK609から1点、SX804から2点、土坑から3点、柱穴から2点出土した。

SD103出土の土師器杯または皿底部外面に「角」、須恵器杯B底部外面に「角ヵ」、須恵器蓋頂部外面に「廣」、須恵器鉢D底部外面に「中」、SD104出土の須恵器蓋頂部外面に「北」、土坑出土の須恵器杯A底部外面に「西」と読める墨書があり、また、柱穴出土の須恵器杯または皿底部外面には2文字あり、おそらく「大夫」と読める。

人面墨書土器は、SD103から8点、SD108から2点出土している。　（細川富貴子）

瓦磚　遺物整理箱で53箱分出土した。丸瓦、平瓦が大半で、内訳は、破片数にして、丸瓦が1,676点（119.825kg）、平瓦が3,421点（317.16kg）、いずれか不明なものが2,223点（36.59kg）の計7,320点（473.575kg）である。また、軒丸瓦が33点、軒平瓦が22点、鬼瓦が1点（平城宮Ⅰ式1A）、磚が42点（緑釉水波紋磚1点）ある。

奈良時代の軒丸瓦の型式と点数は、6133Aが2点、6139Aが1点、6225Aが1点、6229種別不明が1点、6236Dが1点、6273種別不明が1点、6282Haが1点、6284Cが1点、6313Cが1点、6316Dcが1点、6348Aが1点、型式不明が19点で、平安時代・中世の軒丸瓦が2点ある。

奈良時代の軒平瓦の型式と点数は、6663Cが2点、6664Cが1点、6664Hが1点、6664Kが1点、6685Aが1点、6694Aが1点、6710Cが4点、6732Cが1点、6760Aが1点、型式不明が7点で、中世・近世の軒平瓦が2点ある。

緑釉水波紋磚は、長辺8.7cm、短辺6.8cm、厚さ2.8cmの破片である。胎土は、白っぽく精良である。水波紋は、直線と曲線を組み合わせて表現し、先端が尖った工具で刻んでいる。釉はほとんど残っておらず、刻線部分にわずかに確認できる。遺物包含層から出土した。　（山前智敬）

坩堝　47は、口径12.0cm、高さ6.3cm、厚さ1.5～2.0cmである。未分析であるが類例からみて銅を溶かした可能性が高い。口縁の一箇所に注口

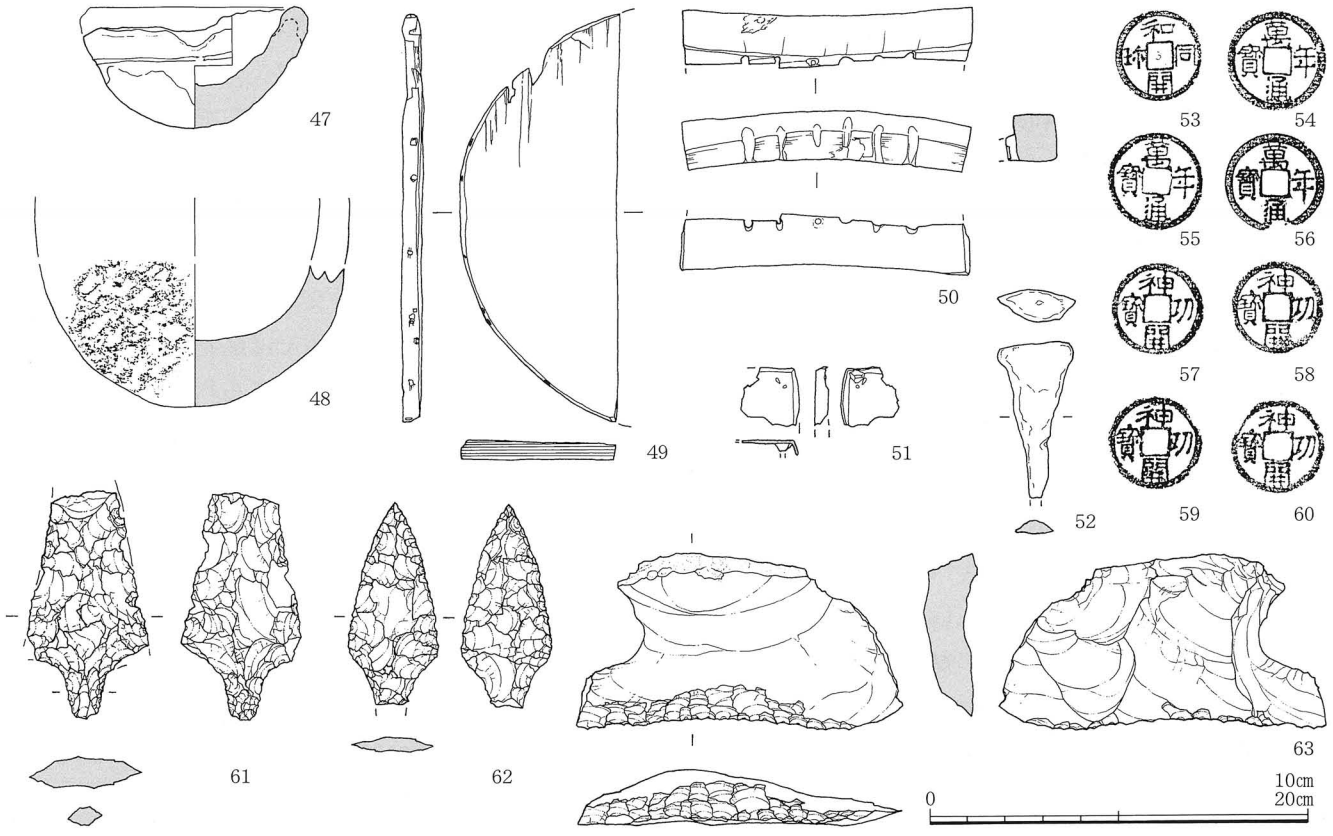
と思われる凹みがあるが、滓の状態からはその位置とは90度異なる縁から融銅が注がれたようにみえる。外面口縁下約3cmの位置に、棒状のもので引かれた凹線が1条廻る。外面に粘土が貼り直されており、修復して繰り返し利用されたことがわかる。SD103出土。ガラス坩堝（48）は、残存部径7.9cm、高さ3.6cm、厚さ1.0～1.7cmである。内面は黄褐色で部分的に光沢があり、外面には斜格子のタタキメがみられる。胎土は石英粒を多く含み、薄く多重の層理をなす。SD127上面出土。

木製品　曲物の底板（49）は、残存長21.4cm、厚さ1.0cmである。木釘や釘穴の間隔と位置からみて修復されたものと考えられる。50は、和琴の龍角である。琴の頭部側で弦をまとめる部品であり、孔の位置で欠損している。長さ7.5cm、高さ1.3cm。6つの孔のそれぞれに弦を通し、上面を通して琴の尾部に向けて弦を張ったもので、上面にはわずかに弦の圧痕がみられる。黒色の硬質木材で、未鑑定であるが紫檀材の可能性がある。49・50ともにSE522から出土。

金属製品　51は、帯金具の銅製巡方である。右上角約1.5cmのみの残欠で、糸通しの孔と鋲痕の両方がみられる。SF0611上面出土。52は、鋳型の湯口で固まった銅塊と思われる。残存長4.0cm、頭部幅2.0cm。断面はレンズ状を呈すが、蒲鉾形に近く、鋳型の片方がより深く掘り込まれていたことがわかる。

銭貨（銅銭）　和同開珎1点、萬年通寶8点、神功開寶10点、大観通寶1点、銭種不明がある。このうち、5点がSD103、13点がSD104から出土しており、これらの遺構から出土した神功開寶は、いずれも同じ特徴をもつ。53・57・58はSD103、54～56・60・63はSD104から出土。

石器　61・62は石鏃である。61は残存長5.9cm、幅3.1cm、厚さ0.9cm、重さ15.43ｇ。62は残存長5.8cm、幅2.4cm、厚さ0.4cm、重さ5.84ｇ。両者とも安山岩製で茎をもつ。弥生時代のものと考えられる。61は遺物包含層、62は整地層出土。スクレイパー（63）は、縦4.3cm、横8.5cm、厚さ1.3cm、重さ50.25ｇである。安山岩製で、主要剥離面側に細かな剥離を施して刃部を形成している。SD104から出土。　（松浦五輪美）



出土鍛冶関係遺物・銭貨・石器　47・49は1/4、他は1/2

Ⅳ　まとめ

右京二条三坊十一坪は、これまで坪の約3分の2を調査し、掘立柱建物・塀が合わせて140棟（条）、井戸25基、土坑14基等が検出された。四周を区画する条坊遺構も検出され、東西約126m、南北約122mの宅地であったことが明らかとなった。建物には、奈良時代～平安時代と思われる少なくとも4時期の重複関係が認められ、また、中世の建物も認められることから建物配置は5時期以上の変遷があったと考えられる。以下、これまでの調査成果もあわせて坪内の様相をまとめる。

条坊道路を除く坪内は、東西南北にそれぞれ4分割した16分の1坪の区画を最小単位として利用していたようであるが、明確な区画施設は少ない。坪の東西中心線（坪を東西に2等分するライン）と南北中心線（南北に2等分するライン）の大部分は発掘区域外であり、その位置に区画施設が存在していたかどうかは不明である。ただしそのラインをまたぐ建物はないようであり、東西中心線付近には空閑地が広がっていたようにさえ見える。また、南北中心線にかかる唯一の発掘区（第327-5次）で、発掘区外に延びる建物とされたものは東西方向の塀である可能性がある。このようにみると、東西、南北とも2等分されており、4分の1坪の宅地をこえる利用はなかったと思われる。

宅地利用の仕方は、坪の東西で異なっていた様相が窺える。東半では、溝や塀によって宅地が16分の１坪の区画で利用された様子が認められる。北東隅の宅地と、東から2つめで北から3つめの宅地内には、ともに宅地の南辺に溝に挟まれた東西方向の道路状の部分がある。しかし、それらの道路状遺構は16分の1坪宅地の範囲をこえては延びていないように見受けられ、坪の東半を4等分するような道路ではなかった可能性がある。この道路と重なる建物はそれより古い場合が多く、本来広かった宅地が細分化されていったことを示していると言えよう。井戸は、平安時代のものも含めて東半のほうが多い。宅地の端に掘られており、地下水との関係からかほぼ南北に列をなすような位置に掘られている。

坪の西半は、そこをさらに東西に2等分するラインに溝が掘られているようであるが、南北に4等分するラインの大部分が発掘区外であるため、16分の1坪の区画については不明である。逆に言えば、その遺存地割が現在まで踏襲されていたとも考えられるが、西半の宅地には、廂付の比較的大型の建物が建てられており、また、それらに伴う門と思われる遺構も認められることから、8分の1坪または4分の1坪の大きな宅地割となっていた可能性が考えられる。第443-1次調査では、築地の雨落溝と考えられる溝があり、小路に面して西に開く門と思われる遺構がある。この門は、その東約30mに南北に並んで建つ大型建物と意図的な配置関係にあると思われ、門の内側の宅地が8分の1坪以上あった可能性が考えられる。また、第443-2次調査で検出した南に開く門と思われる遺構は、坪の西から4分の1のラインにあたるが、ここから北へ延びる坪内道路が検出されていないことから、南西隅8分の1坪もしくは4分の1坪が一つの宅地として利用され、その南辺中央に門が造られたと解釈することもできる。

以上のように、右京二条三坊十一坪は、基本的に東西に分割され、8分の1坪もしくは4分の1坪宅地を単位として利用されていた時期があり、時期が下って、少なくとも東半は、さらに16分の1坪に細分されたと考えられる。そして、平安時代後半頃には、西三坊坊間路の側溝は埋まったものと考えられ、その上から掘り込まれた井戸もあり、地割りが乱れてきたようである。中世には、二条条間路と西三坊坊間路の交差点付近は完全に流路となってしまうが、坪北辺では建物が未だ坪境小路や東西中心線を意識して建てられているようであり、条坊および地割が踏襲されたと考えられる。

最後に、この坪で初めて検出された切り通し状の条坊道路について述べる。坪の東を区画する西三坊坊間路は、宅地部分より道路面が低くなっていたことが3箇所の発掘区で確認された。この付近の地形は南西から北東に向かって緩やかに下る低丘陵となっていたようであり、西三坊坊間路はこの低丘陵を南北に切り通した状態となっている。ただし、遺構の残存状態を見る限り、当時でも100m間で1m程度の高低差しかなかったと思わ

れ、地形どおりに道路を通しても交通に困難なほど勾配がついたとは考えられない。現に検出した道路面は北へ下っており、切り通して水平な道を造った訳ではない。

そこで、一試案として以下の事を考えてみたい。それは、丘陵地や斜面地を区画する際、先に広く宅地造成が行われていたということである。斜面部に平坦な宅地を設ける場合、数段に分けて一定範囲の平坦面を作り出すのが普通であるが、この時、高い位置の平坦面から低い位置の平坦面に道を通すと、各平坦面は道路より高くならざるを得ない。現在の住宅地と同じ状況である。第443-3次調査で検出した西三坊坊間路が北に向かうほど宅地面との高低差が大きくなっているのもそのためと思われる。このように考えると、宅地にあたる場所は条坊道路敷設以前から段差によって分割されていた可能性があるということになる。西三坊坊間路との高低差がより少ない南辺に坪内道路が位置することもうなずける。切り通し道路の存在は、単に丘陵地を切り通したということでなく、平城京造営の手順を探る上で重要な手がかりとなるものといえるだろう。　（松浦五輪美）

右京二条三坊十一坪の遺構配置図　1/1,000

(3)　菅原東遺跡・平城京跡（右京三条二坊十五坪）の調査　第443-7次

Ⅰ　はじめに

発掘区の位置は、平城京右京三条二坊十五坪の西半部の南北中央付近にあたり、また菅原東遺跡の東南部にあたる。発掘区の東側で市第200・229次調査（平成2・3年度）が、西側で第213-2次調査（平成2年度）が行われており、これらの発掘区に接して今回の発掘区を設定した。これまでの調査では、奈良時代の遺構とともに、弥生・古墳時代の遺構を検出しており、特に第200次調査では古墳時代後期の埴輪窯6基を検出した。

発掘区内の層序は、北半部と南半部とで大きく様相が異なる。

北半部は、北西から南東にのびる丘陵上で、奈良時代以降に削平されたため、耕土の直下が遺構の存する黄褐色粘土（地山）上面である。

南半部は、北西から南東方向に下る浅い谷状の地形で、この谷は第213-2次発掘区西端から第229次発掘区の東端まで続く。最深部は標高約70.5mである。地山の上面の最高所は、第213-2次発掘区の北東で、標高約73.4mである。谷最深部との比高は約2.9mである。谷の堆積は、大きくみて、下から順に茶灰褐色粘質土の古墳時代の遺物包含層（36）、茶灰褐色砂質土等の奈良時代の整地土または遺物包含層（24～28）、茶灰色粘質土等の中近世の遺物包含層（3～23）である。

古墳時代の遺物包含層は、谷のほぼ全域に堆積し、層の厚さは約0.2～0.4mである。この層の上面が飛鳥時代の遺構の存する面である。層の上位に古墳時代後期、下位に前期の遺物が数多く含まれ、この間に古墳時代後期の遺構の存する面が想定されるが、確認できなかった。なお、この層から碧玉製管玉1点が出土した。

奈良時代の整地土または遺物包含層は、今回の発掘区の東半から第200・229次発掘区にかけて広がり、層の厚さは約0.1～0.3mである。掘立柱塀1条がこの層の上面から掘り込まれており、奈良時代には、谷は埋まりきらず、凹地のままである。後述するように、ここには奈良時代を通して建物が建てられず、空閑地だったようである。

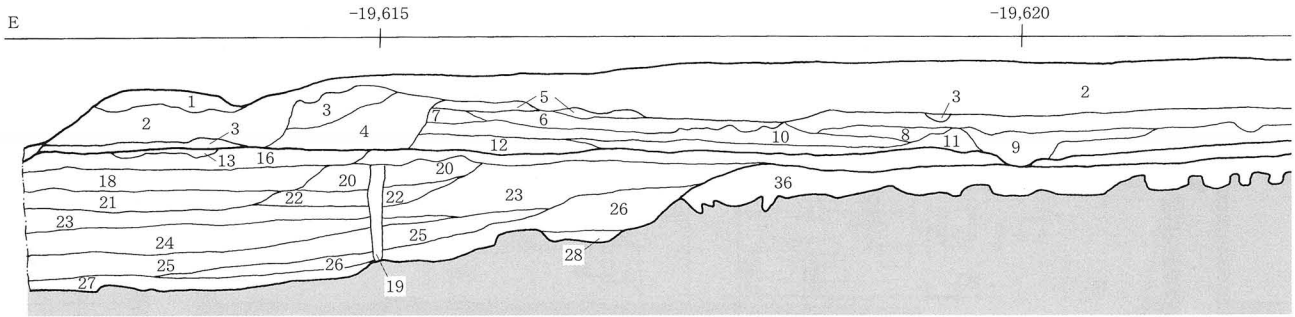
この層の上面から地表面までは、すべて中世以降の堆積土で、厚さは約1.1mである。

Ⅱ　検出遺構

検出遺構には、古墳・飛鳥・奈良・平安時代のものと中近世の素掘小溝、江戸時代の井戸がある。また、遺構はないが、縄文あるいは弥生時代の安山岩製の石器や剥片が出土している。

古墳時代の遺構　建物（掘立柱建物2棟、竪穴住居2棟）、土坑5基、溝3条がある。前期と後期の遺構があり、前期は、SD11・28、SK29・30・31が、後期は、SD08、SK32・33がある。他の遺構は、出土遺物が少なく、時期は不明である。

SD11　北東から南西方向の溝で、丘陵の稜線と直交方向に走る。第200次調査分を含めて、全長約47.0mあり、幅約1.5m、深さ約0.6mである。溝の底をさらに掘り窪める2段掘りで、底は平坦である。溝の南端は途切れており、東側に平行す



1. 造成土　2. 耕土　3. 灰色砂質土　4. 灰色粘砂土　5. 明黄灰色砂質土　6. 黄灰色粘砂土　7. 灰黄色砂質土　8. 灰黄色粘砂土　9. 灰色砂質土（素掘小溝埋土）　10. 黄灰色粘質土　11. 黄灰色粘土　12. 茶灰色砂質土　13. 灰色砂質土（素掘小溝埋土）　14. 灰褐色粘砂土（黄褐色粘土を含む、素掘小溝埋土）　15. 灰褐色粘質土　16. 黄灰色砂質土　17. 灰茶褐色砂質土　18. 黄灰色粘砂土（杭跡埋土）　19. 茶灰色粘質土（茶灰褐色砂質土を含む）　20. 暗茶灰色砂質土　21. 淡茶灰色砂質土　22. 茶灰色砂質土　23. 茶灰色粘質土

発掘区南壁土層図1（東）　1/60

る溝SD12のように南端が谷に接続して終わるものとは異なる。布留式のやや古相の土師器と鞴羽口、鉄滓が出土した。

SD28　幅約0.4m、深さ約0.2mの溝で、谷の北側を谷筋に沿って緩やかなS字のカーブを描き東西に走る。土器が少量出土した。

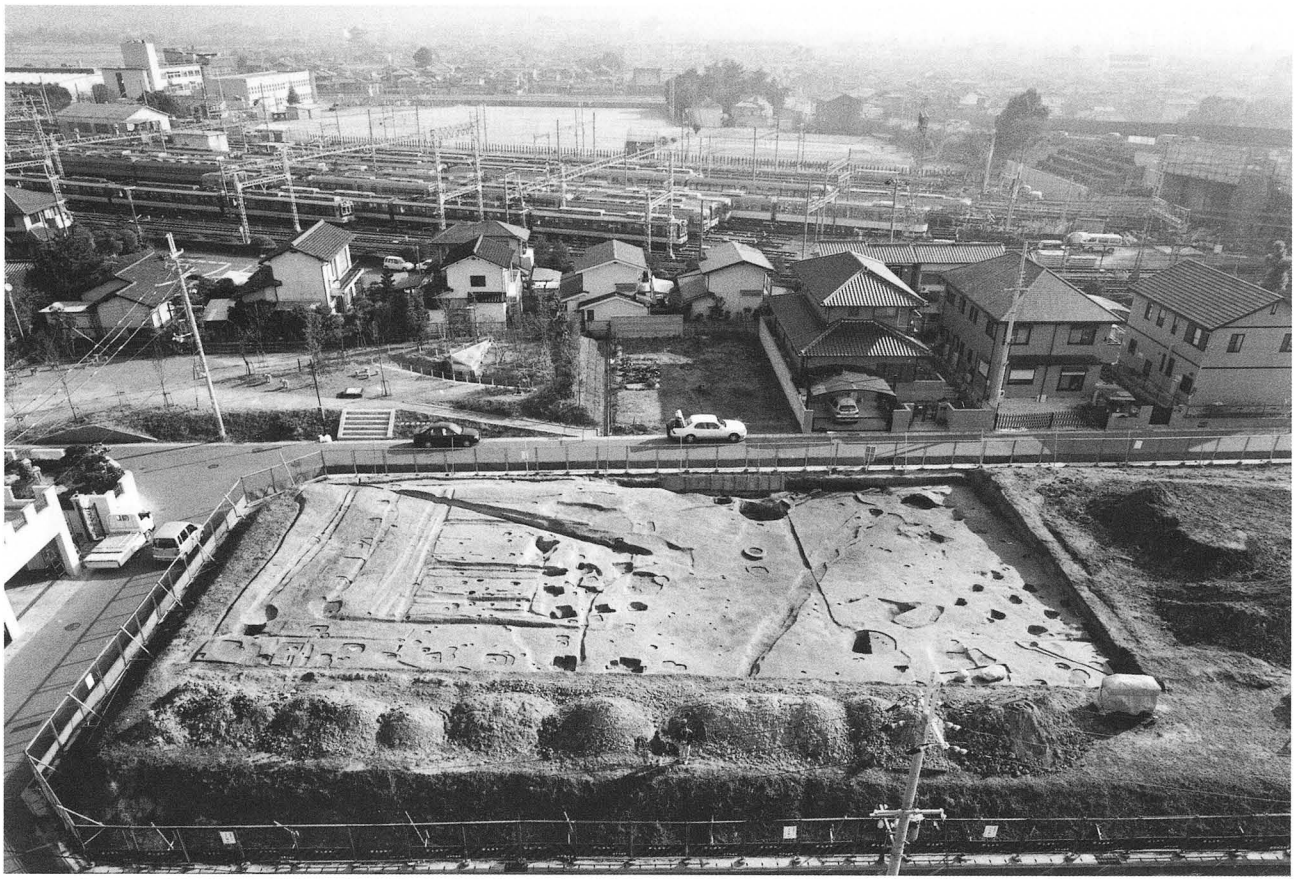
SK29　平面が不整方形の土坑で、東西約0.8m、南北約0.8m、深さ約0.1mである。

SK30　平面円形の土坑で、東西約0.8m、南北約0.8m、深さ約0.5mである。

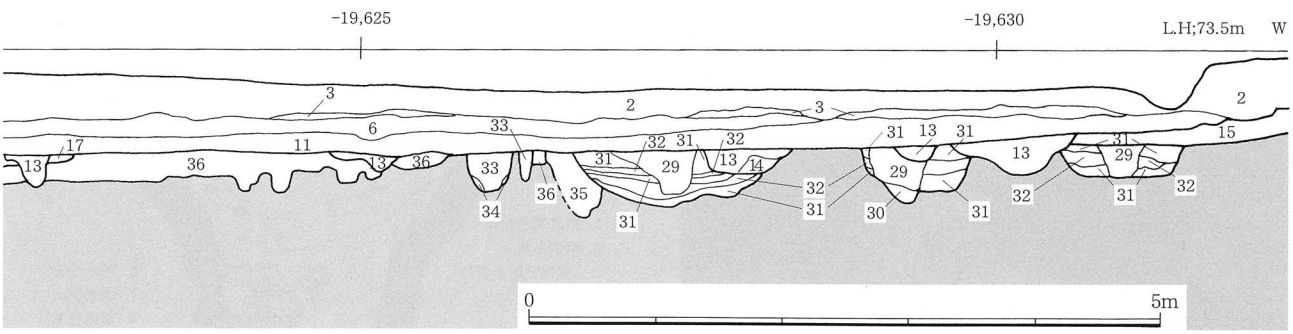
SK31　平面円形の土坑で、東西約1.7m、南北約2.0m、深さ約1.3mである。

これら3つの土坑から土器が少量出土した。

SD08　北西から南東方向へ下る溝で、第213-2次調査分を含め、長さ約32m分を検出したが、さらに西側に続く。幅約1.3m、深さ約0.3mである。ほぼ谷の最深部に沿って走る。東に向かって徐々に浅くなり、東端は谷に接続して終わる。須



発掘区全景―古墳時代（西から）



24. 茶灰褐色砂質土
25. 茶灰褐色砂質土（灰色砂を含む）
26. 茶灰色砂質土（灰色砂を含む）
27. 灰褐色粘砂土（黄褐色粘土を含む）
28. 暗灰色粘土（黄褐色粘土を含む）
29. 灰褐色土（黄褐色粘土を含む、柱穴埋土）
30. 灰色粘砂土（柱穴埋土）
31. 茶灰色粘質土（黄褐色粘土を含む、柱穴埋土）
32. 灰色粘土（黄褐色粘土を含む、柱穴埋土）
33. 茶灰色粘質土（黄褐色粘土を含む、柱穴埋土）
34. 黄褐色粘土（褐色粘土を含む、柱穴埋土）
35. 灰褐色土（黄褐色粘土を含む、柱穴埋土）
36. 茶灰褐色粘質土（古墳時代の遺物包含層）

発掘区南壁土層図2（西）　1/60

恵器、土師器、埴輪、陶棺が出土し、古墳時代後期の埴輪窯操業後に埋没したことがわかる。

SK32　平面楕円形の土坑で、東西約2.2m、南北約2.3m、深さ約1.6mである。掘形の形状は、上部と下部とで異なる。上部は、すり鉢状で、暗茶褐色粘質土等で埋まっている（深さ約0.8m）。大量の土器とともに埴輪片と陶棺片が出土した。下部は、平面方形で、暗灰色粘土等で埋まっている。土師器甕が7個体分出土し、そのうち3個体が完形を保っている。形態から井戸とも考えられるが、掘削は湧水層まで達していない。土器型式からみて、SD08と同時期のものと考えられる。

SK33　平面円形の土坑で、東西約2.2m、南北約2.3m、深さ約1.3mである。土師器と須恵器が少量出土した。SD08と同時期と考えられる。

SB24　平面方形の建物（竪穴住居）で、北辺と西辺の周壁溝だけが残っている。東西約1.3m以上、南北約3.4m以上で、北で東に振れる。

土坑SK32全景（北から）

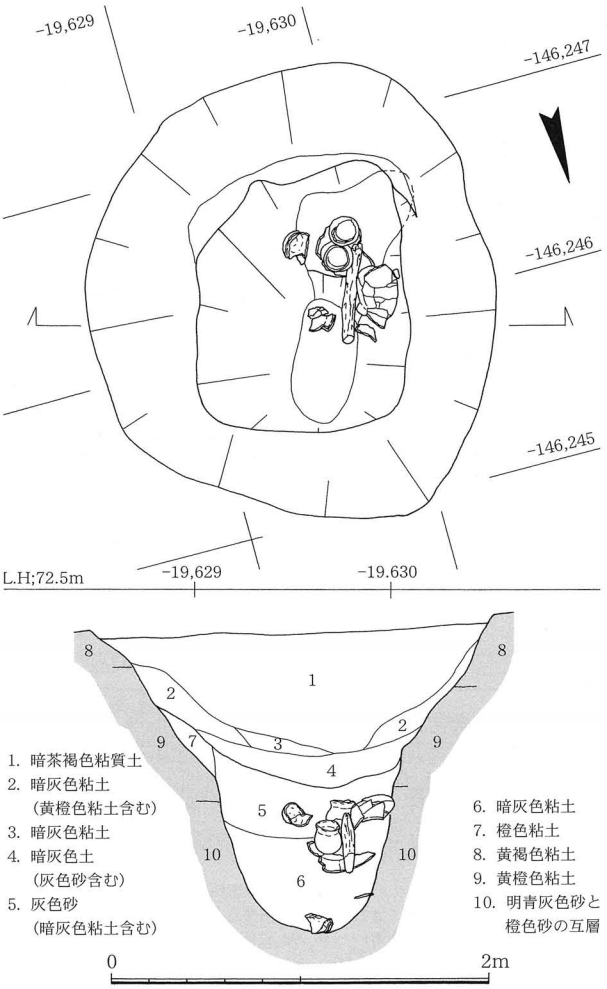
土坑SK33全景（南から）

SB25　平面方形の建物（竪穴住居）で、南辺と東辺の周壁溝だけが残っている。東西約2.3m以上、南北約2.6m以上で、北で東に振れる。いずれの建物も柱穴は見つからなかった。

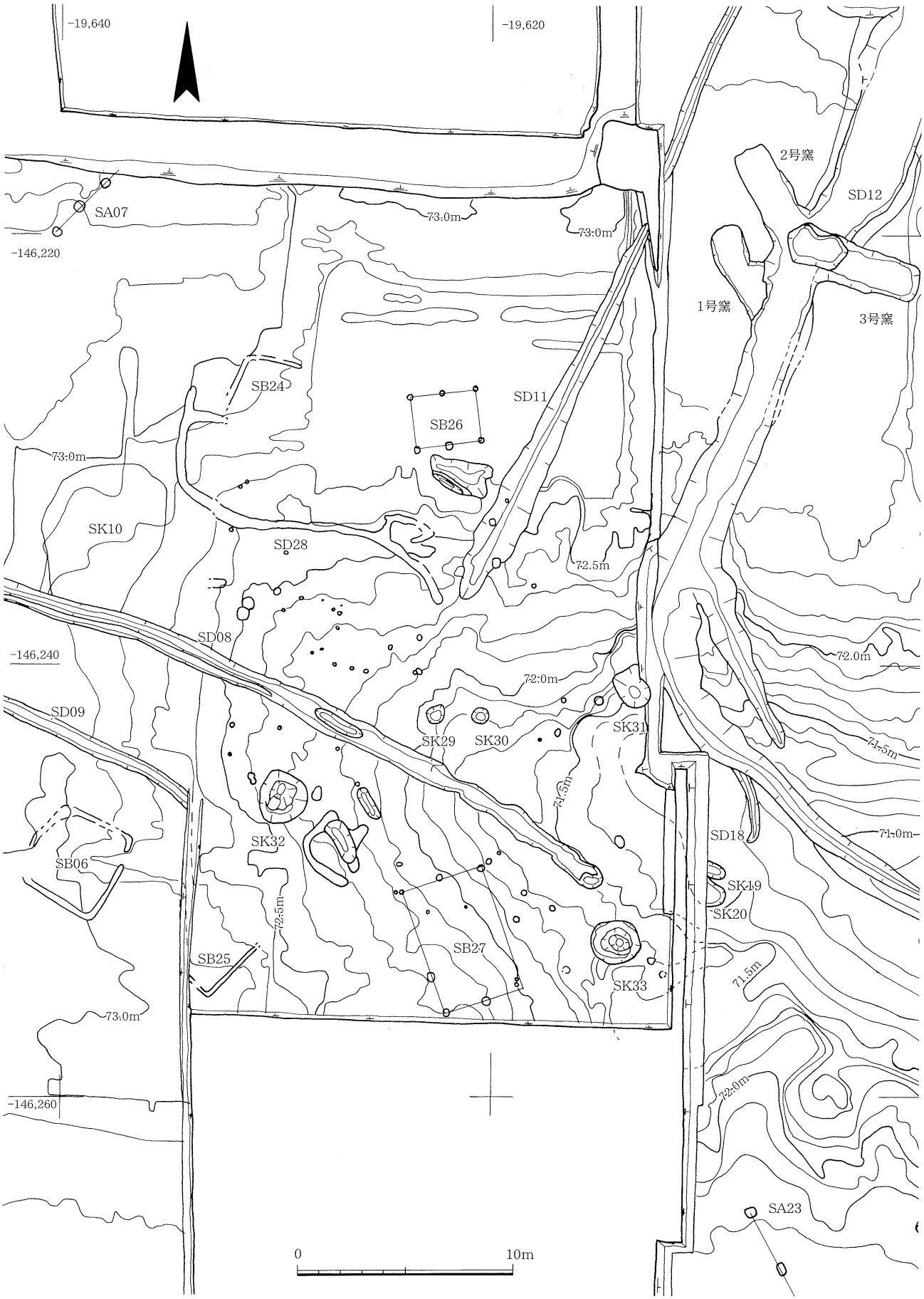
SB26　桁行2間（3.0m）、梁間1間（2.4m）の東西棟掘立柱建物で、梁間の柱間寸法は1.5m等間である。建物は北で東に振れる。

SB27　南北棟掘立柱建物で、柱穴を一部欠くが、梁間2間（3.8m）、桁行3間（6.0m）と推定される。柱間寸法は、梁間が1.9m等間で、桁行は、北から2.1、2.1、1.8mと推定され、建物は北で西に振れる。

飛鳥時代の遺構　古墳時代の遺物包含層上面で検出した遺構で、奈良時代の整地土に覆われている。出土遺物からみて、厳密には平城京遷都前後の遺構と考えられるが、建物の振れ等は、奈良時代の平城京跡の遺構と様相を大きく異にしており、平城京造営前の遺構と考える。したがって、



土坑SK32　平面・断面土層図（遺物は見通し）　1/40



遺構平面図―古墳時代　1/250

平城京跡の遺構と別に報告する。掘立柱建物2棟、井戸1基、土坑1基がある。

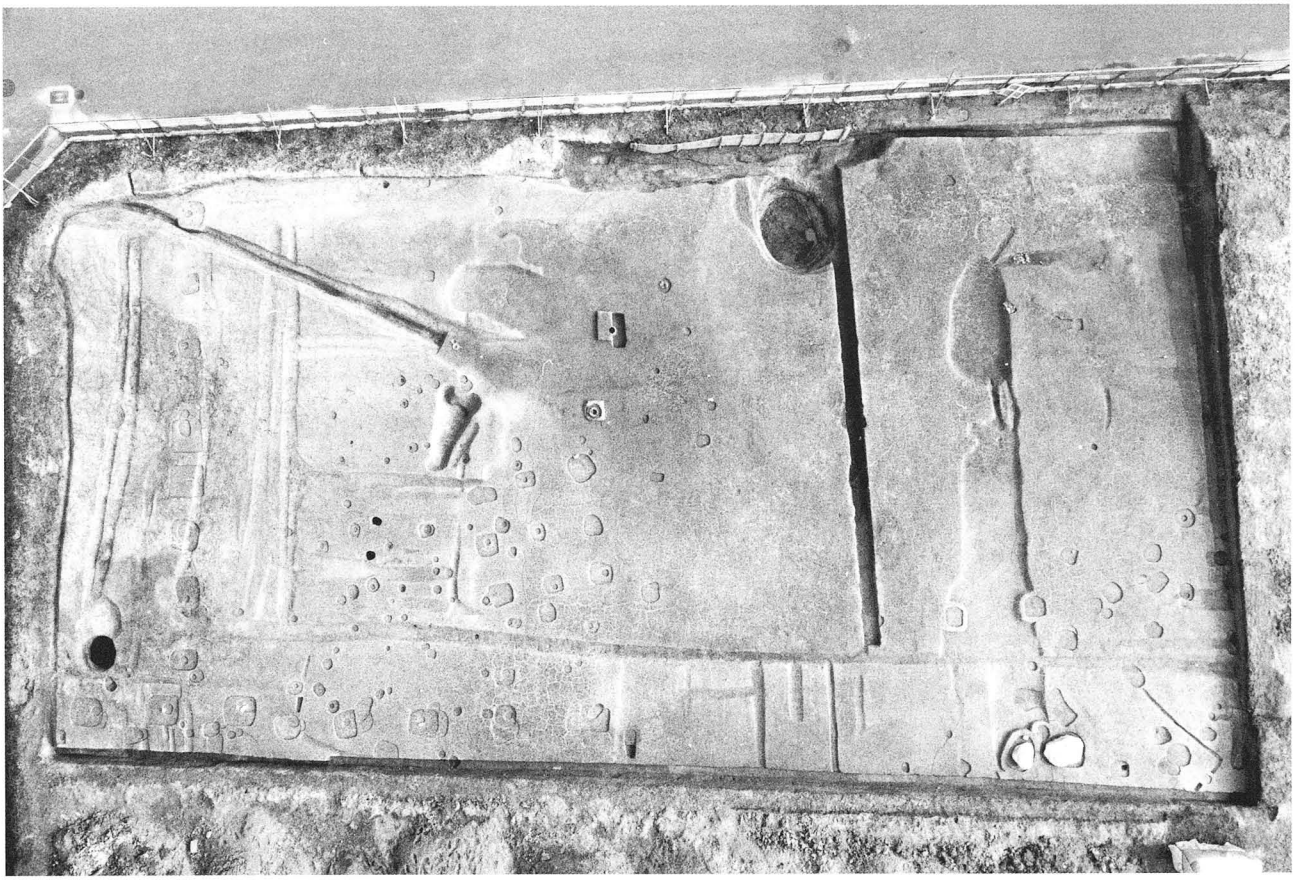
SB34　2間（3.6m）×2間（3.6m）の総柱建物で、柱間寸法は1.8m等間である。建物は北で西に振れる。柱穴から丸瓦、平瓦が出土しており、平瓦には凸面が格子目タタキと縄目タタキのものがあり、後者は桶巻き作りと考えられる。

SB35　2間（3.5m）×2間（3.5m）の総柱建物で、柱間寸法は、北西側柱列が1.75m等間、北東側柱列が北から1.7m、1.8mである。建物は北で西に大きく振れる。

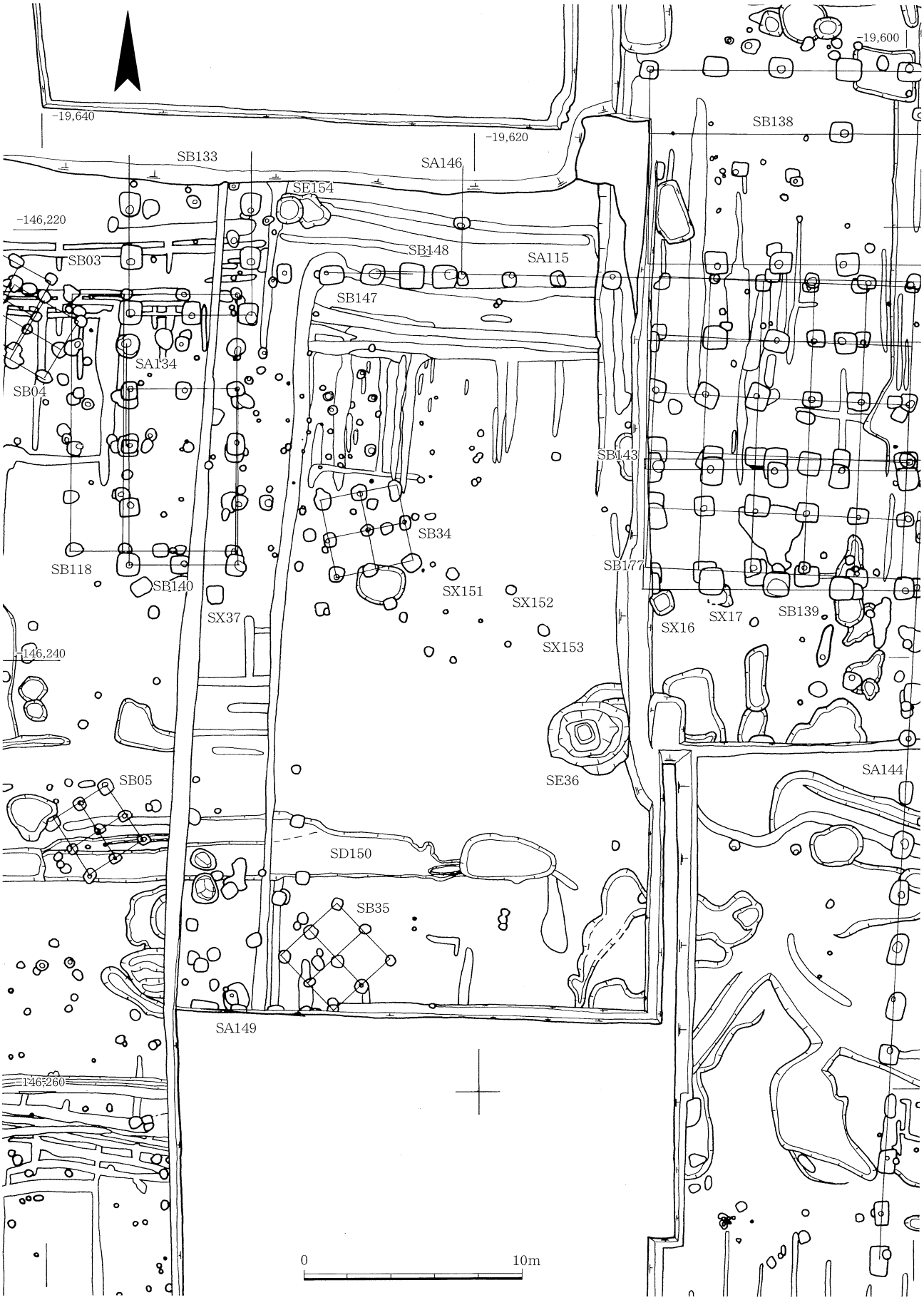
SE36　深さ約4.1mの井戸で、枠は完全に抜き取られている。抜き取り坑は、東西約3.7m、南北約3.4mの平面楕円形で、上から約3.5mまではすり鉢状に掘られている。そこから下は一辺約1.3mの平面隅丸方形で、垂直に掘られままに残っている。土器、木製品が少量出土した。

SX37　北壁に厚さ約10cmの赤く焼けた粘土が貼り付く特殊な土坑で、平面は隅丸方形、東西約0.75m、南北約0.8m、深さ約0.15mである。埋

井戸SE36全景（南から）



発掘区全景―飛鳥・奈良・平安時代及び中世・近世（左が北）



遺構平面図―飛鳥・奈良・平安時代及び中世・近世　1/250

奈良時代の掘立柱建物一覧表

遺構番号	棟方向	規模（桁行×梁間）	桁行全長 m	梁間全長 m	桁行柱間寸法 m	梁間柱間寸法 m	廂の出 m	備考
SA115	東西	11	25.3		2.3等間			
SB117	南北	5×5	13.5	12.0	2.7等間	2.4等間		総柱建物
SB118	南北	5×2	12.0	7.8	2.4等間	2.7等間	2.4	西廂付き建物
SB133	南北	3以上×2	4.8以上	5.7	2.4等間	2.85等間		
SA134	南北	2	4.8		2.4等間			
SB138	東西	6×2	18.0	9.0	3.0等間	3.0等間	3	北廂付き建物
SB139	東西	6×2	18.0	6.0	3.0等間	3.0等間		
SB140	南北	3×2	8.1	5.1	北から2.4、2.85、2.85	2.55等間		
SB143	東西	6×2	18.0	6.0	3.0等間	3.0等間		
SA144	南北	15	36.0		2.4等間			
SA146	南北	2以上	2.3以上		2.3			
SB147	東西	1	3.9		3.9			門か
SB148	東西	1	3.6		3.6			門か
SA149	東西	3	5.4		1.8等間			建物の可能性もあり

土は、暗褐色粘土で焼土・炭を含み、土器片が少量出土した。同様な遺構が東側の第200次調査でも2基（SX16・17）検出されている。

なお、西側の213-2次発掘区で検出しているSB03・04・05は、出土土器からみて、この時期の建物であり、掘立柱建物はこれを含めて、合計5棟である。

奈良・平安時代の遺構　掘立柱建物4棟、掘立柱塀3条、土器埋納遺構3基、溝1条を検出した。今回新たに検出したものは、建物2棟、塀2条だけで、他は両隣の発掘区からの続きである。また、今回の発掘区には続かないことが確認でき、規模が確定した建物についても表にまとめた。なお、今回の調査により、遺構の内容を改めた点がある。第200次調査の東西方向の掘立柱塀SA109の7間のうち、西5間を掘立柱建物SB117の北側柱とし、東2間を東西方向の掘立柱塀SA115の東に加えて、11間の塀とした。南北方向の掘立柱塀SA116の北5間を掘立柱建物SB117の東側柱とし、桁行5間、梁間5間の総柱建物とした。掘立柱建物SB138・139・143は、第200次発掘区内にとどまり、桁行6間の建物であることが確認された。なお、谷の部分には溝と土器埋納遺構があるのみで、第229次発掘区のSA144以外に建物はない。

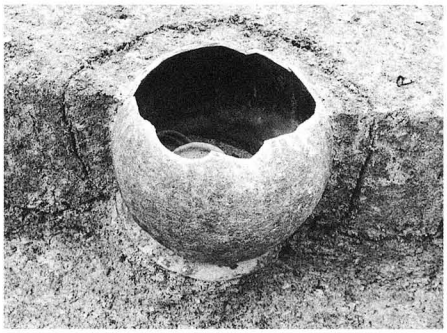
SD150　第213-2次調査分を含め、全長27.0mの溝である。幅約1.5m、深さ約0.1mで、奈良時代の土器、瓦が少量出土した。

SX151～153　谷の北側に沿ってほぼ東西に3つ並ぶ土器埋納遺構で、いずれも土師器甕の中に土師器皿Cを数枚入れて埋納している。掘形は、甕より一回り大きい。甕の口縁部を下にして埋めるもの（SX152）と、口縁部を上にして埋めるもの（SX151・153）とがある。前者は、皿Cを上向きで12枚重ねて置き、後者は、皿Cを伏せて重ねて入れている。SX151に6枚以上、SX153に23枚以上が入っていた。SX151・153ともに上部が損壊しており、蓋の有無は不明である。いずれも土器以外のものは入っていなかった。出土土器からみて、すべて平安時代初頭（9世紀初め）のものと考えられる。

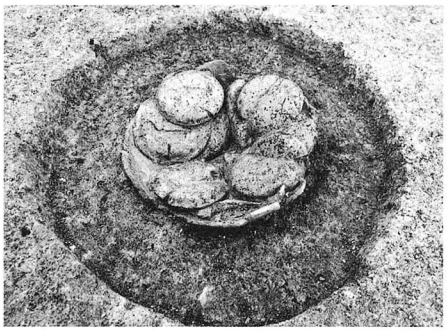
第200次調査では、掘立柱建物の変遷を大きく3時期と考えたが、今回、遺構の内容を改めたため、南半部の変遷を改めた。第200次調査時と異なり、古い順にⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期とする。

Ⅰ期には、SB107・117・118がある。SB117とSB118は、十五坪の南北中軸線の南側に沿って建てられる。南側の谷には建物はない。坪の東西南北の中軸線をまたぐ建物はなく、坪内は1/4以下に分れて利用されている可能性がある。

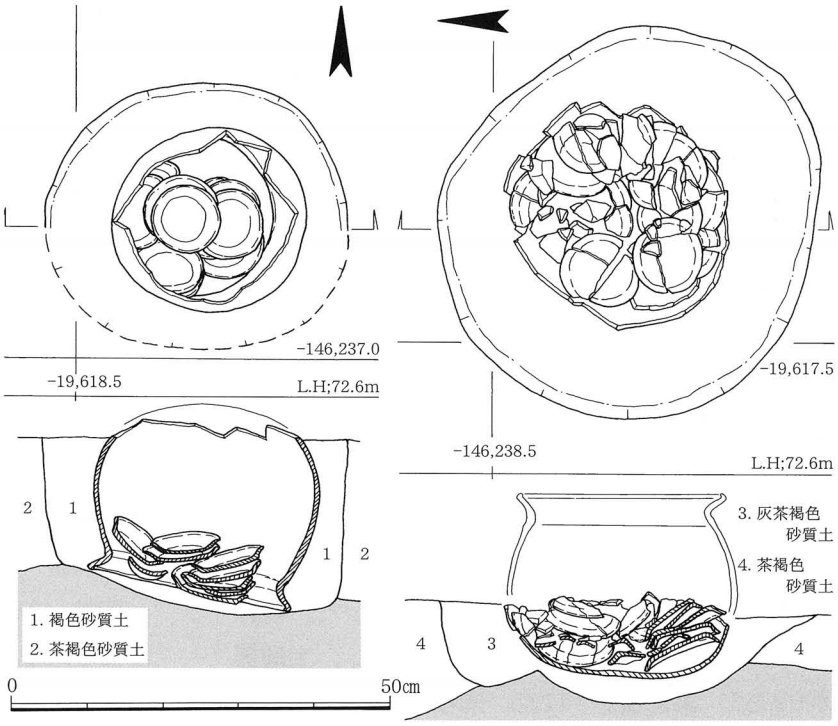
Ⅱ期には、SB108・110・119、SA115・144・146・149がある。東西塀SA115は、坪の南北中軸線近くにあり、坪を南北に2分する。北側には埋甕を覆う建物SB119があり、その西側を南北塀SA146で区画する。SA115の南側には、坪の東西中軸線上にSB110があり、その西側を南北塀SA144で区画する。SA144は、谷を横断する南北



SX152全景（南から）



SX153全景（西から）

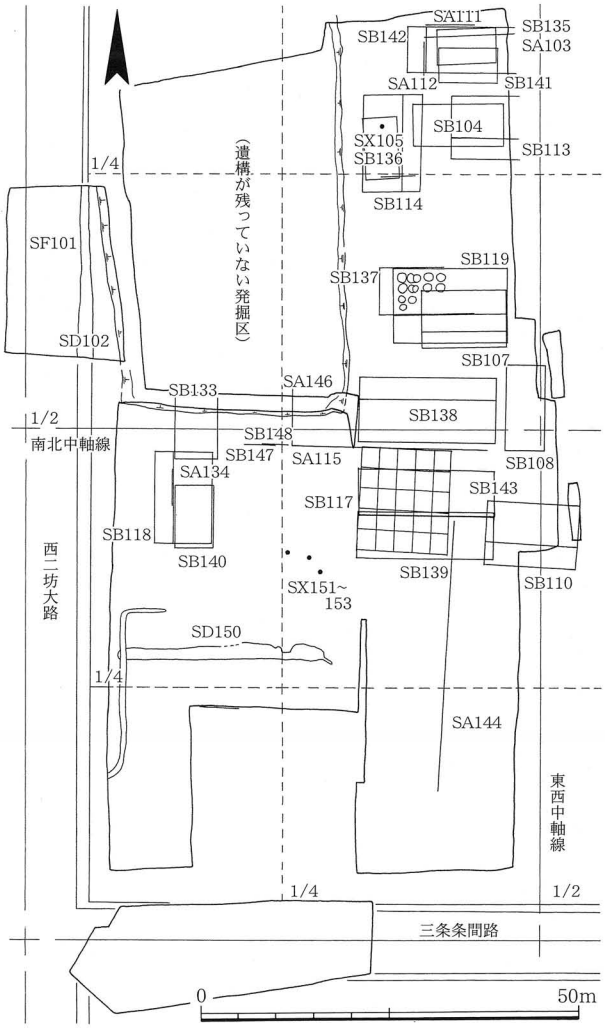


SX152（左）・SX153（右）平面及び断面土層図　1/10

塀で、その西側に東西塀SA149があるが、それ以外に谷には建物がない。坪を少なくとも南北に2分割して利用していると考えられる。

Ⅲ期には、SB133・138・139・140・143・147・148、SA134、SX151～153があり、さらにa・bの小期に細分される。Ⅲa期は、南北に並ぶ東西棟建物SB138・139を中心に、西側に南北塀SA134があり、建物と塀の間には、東西棟の門SB147がある。谷の北側には、土器埋納遺構SX151～153があり、これより深い南側には建物がない。なお、SB139の南西隅柱にも土師器皿と杯と椀が16枚重ねられて出土しており、居住地の縁辺に土器を埋納する遺構が集中することがうかがえる。Ⅲb期は、中央部でSB139に代わりSB143が、西側でSA134に代わり南北棟建物SB133・140が、その間でSB147に代わりSB148が建てられる。この時期は、坪の南北中軸線をまたぐ建物があることから、西半部の1/2を一つの敷地として利用していることがわかる。土器埋納遺構、柱穴出土土器から平安時代初頭（9世紀初め）の時期と考えられる。

江戸時代の遺構　発掘区北西隅に井戸SE154が1基ある。平面円形、径2.5m、深さ約0.9mである。19世紀前半の土器が出土した。（中島和彦）



十五坪西半部の奈良・平安時代の遺構配置図　1/1,000

Ⅲ　出土遺物

弥生・古墳・飛鳥・奈良・平安・江戸時代の遺物が遺物整理箱54箱分ある。

古墳時代の遺物　前期と後期の遺物が多く、中期の遺物が少量ある。

前期の遺物には、土師器の他に、SD11出土の鞴羽口、鉄滓と、谷部出土の管玉がある。管玉は碧玉製で、径0.25cm、長さ1.35cmである。

中期の遺物には、埴輪が少量あり、後期の遺構から混じって出土している。黒班をもち、ヨコハケ調整する円筒埴輪が出土している。

後期の遺物には、土師器、須恵器、埴輪、陶棺があり、これについて報告する。

SK32からは良好な一括資料が出土した。破片数にして986点の土器・土製品が出土し、土師器が697点、須恵器が141点、陶棺が23点、埴輪が125点である。2～27・34が上層出土で、28～33が下層出土である。

須恵器には、杯（1～9）、高杯（10・11）、壺（13・14）、台付長頸壺（15）、横瓶（12）、甕がある。須恵器杯蓋の口径は11.8～12.2cmである。1～3とも頂部にヘラキリ痕跡を残すが、2は粗いロクロケズリ調整を行っている。杯身の受部径は10.2～13.7cmであり、底部は、4～6がヘラキリ痕跡を残し、7・9が粗いロクロケズリ調整、8が丁寧なロクロケズリ調整をする。10は、無蓋高杯の杯部と考えられるが、接合する脚部がなく、杯とも考えられる。高杯（11）は、長脚の2段で、2方向の透かし孔がある。

土師器には、杯（23）、高杯（16～19）、鉢（20～22）、壺（24）、甕（25～31）、甑（32・33）、羽釜、竈がある。土師器高杯（19）は、杯部外底面に脚部を差し込んで接合している。脚部外面は縦方向に面取りされ、内面にはしぼり目がある。鉢（20）は外面に粘土紐接合痕跡が残る。壺（24）は体部内面を板状工具でナデ調整し、体部外面上半をハケ調整、底部外面をケズリ調整する。また体部外面には粘土紐接合痕が残る。甕には、体部が球形に近いものと胴長のものとがある。いずれも体部内面をハケ調整し、体部外面上半をタテハケ調整する。底部外面はケズリ調整するもの（27～29・31）とハケ調整するもの（30）とがある。28と30の体部外面には粘土紐接合痕が残る。甑（32）には、把手が1対あり、把手には細長い刺突孔が2つある。甑の把手には他に円形の孔を穿つものがある。甑（33）は底無で、径約10.8cmの底部の中央に幅約2.5cmの粘土帯を取り付ける。SK32出土土器は、須恵器の型式からTK209型式[1]の時期と考えられる。

陶棺は、各遺構から少量ずつ出土しており、破片数にして68点ある。ほとんどが土師質の亀甲形陶棺であるが、一部に形式不明のものがある。形態、調整、胎土から数個体分があると考えられる。

陶棺（34）は、谷部出土のもので、同一個体と考えられる破片から復原したものである。棺身は、脚部の配置、凸帯間隔などから、狐塚1号横穴墓（市KZ第1次・昭和59年度）出土品を参考に復原した。棺蓋は、縦方向の凸帯を幅約21cm間隔で貼り付けている。内外面ともナデ調整で、下端面に葉脈と思われる圧痕がある。内外面は灰白色で、断面は灰色である。棺身の外側面は、下端と中央の水平方向の凸帯で上下2段に分割し、さらに縦方向の凸帯を約16～19cm間隔で貼り付けている。棺身外底面には黒班がある。棺身の合わせ口の端面も切り離し後、ナデ調整される。脚部は、径約15.0cmの円筒形で、高さは不明である。脚の総数は不明であるが、棺の長軸方向に約29cm間隔で、短軸方向に27cm以上の間隔で配置されている。内外面は摩滅が著しいが、ナデ調整されている。

他に赤色顔料が付着する破片が数点ある。なお、陶棺の周辺からはTK43・TK209型式の須恵器が出土している。

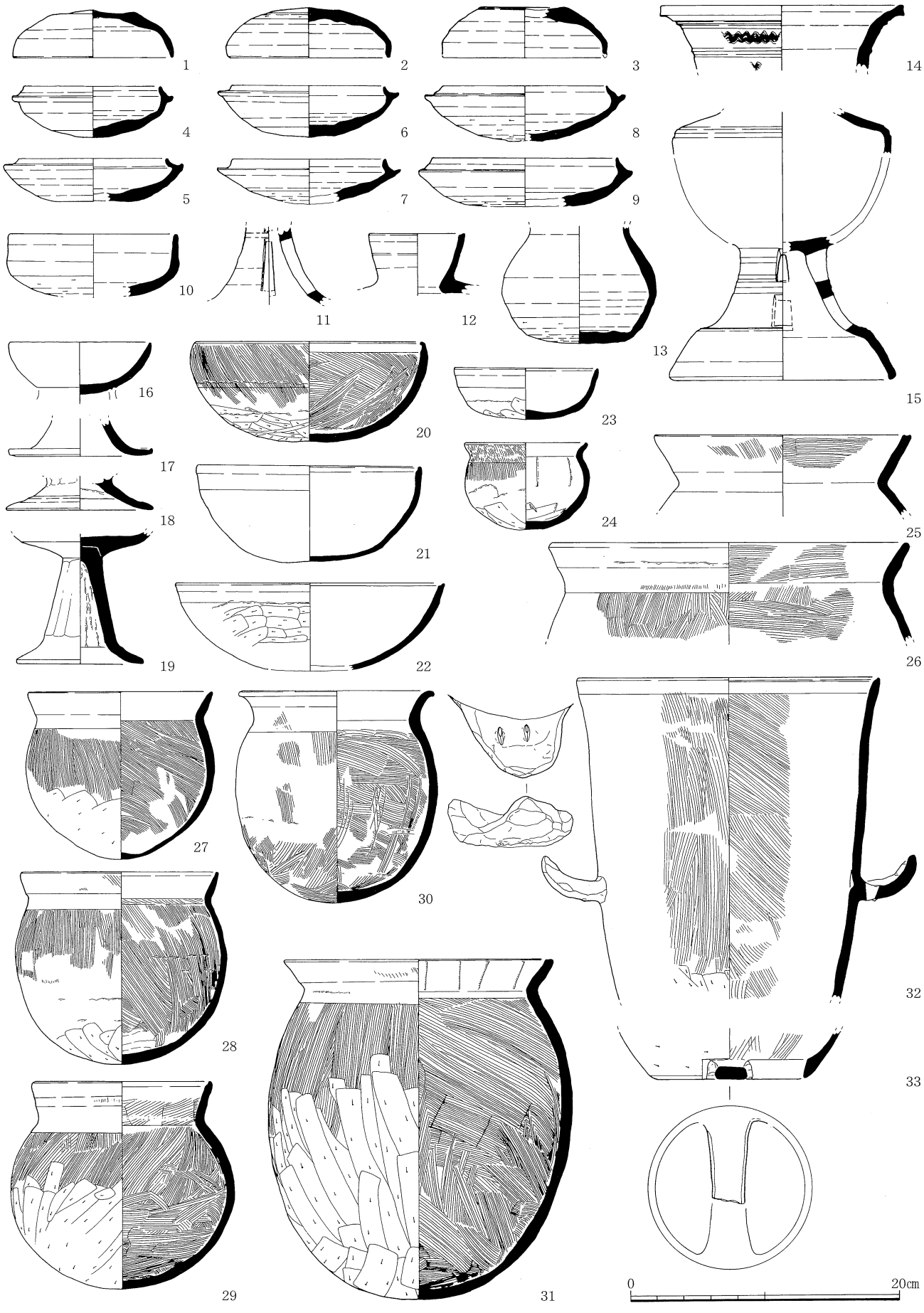
埴輪は、発掘区東側の埴輪窯跡群出土品と形態、調整、胎土が同じである。　（中島和彦）

飛鳥時代の遺物　SE36から遺物整理箱で2箱分の土器、瓦、木製品、金属製品が出土した。大半は土器で、その他の遺物はわずかである。以下、図示したものについて概略を記す。

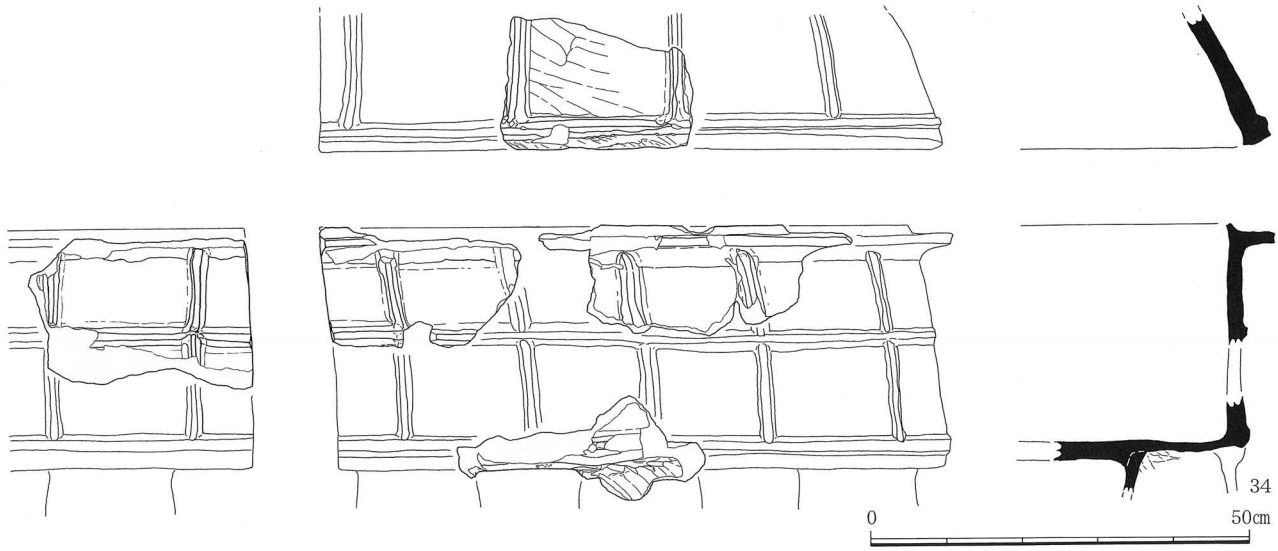
土器　土師器、須恵器、製塩土器がある。

土師器には、杯A・C、皿A、高台付皿、蓋、椀

1）古墳時代の須恵器型式については、田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1981を参考にした。



土坑SK32出土土器（古墳時代）　1/4

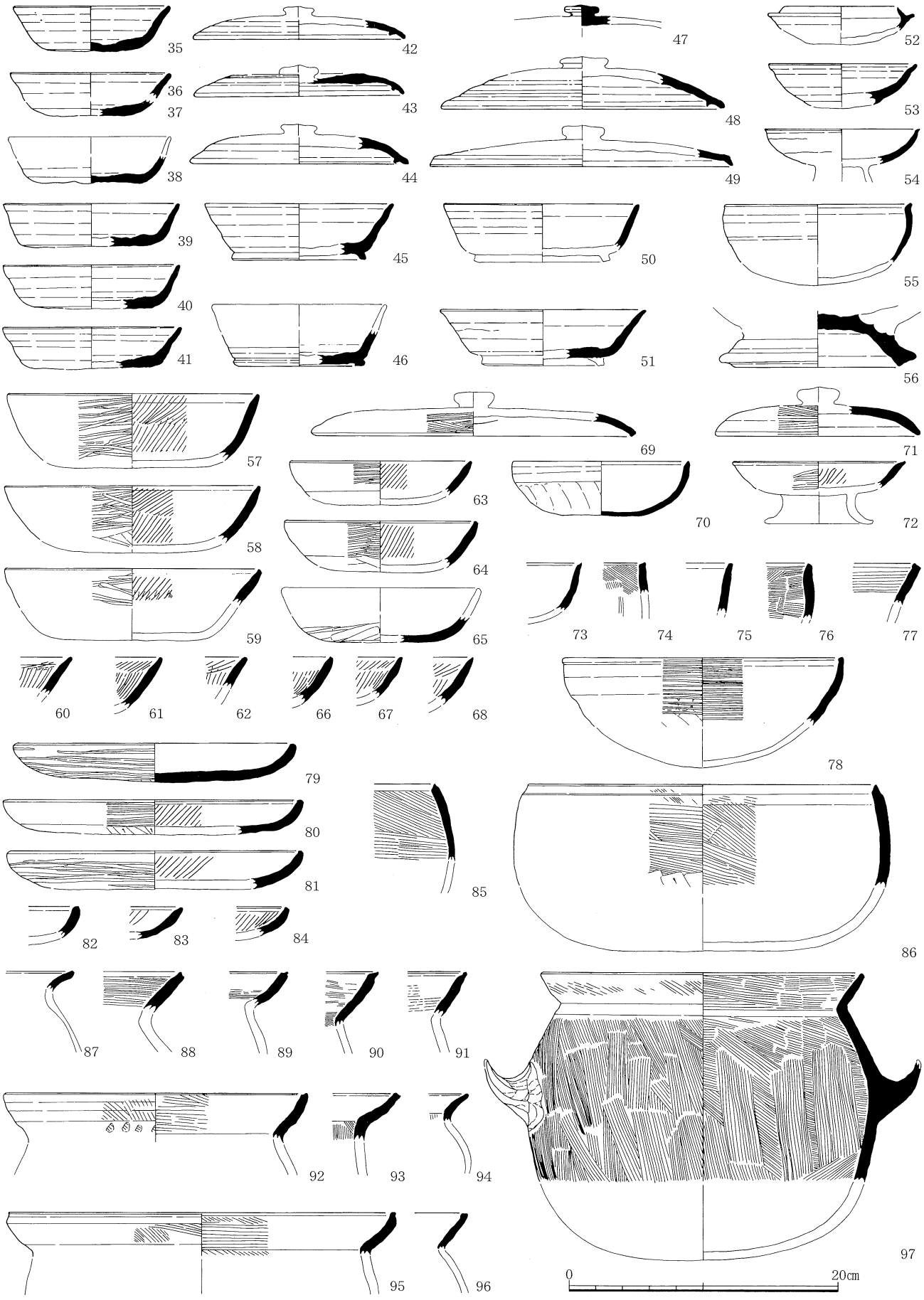


出土陶棺（網目は破断面を示す）　1/10

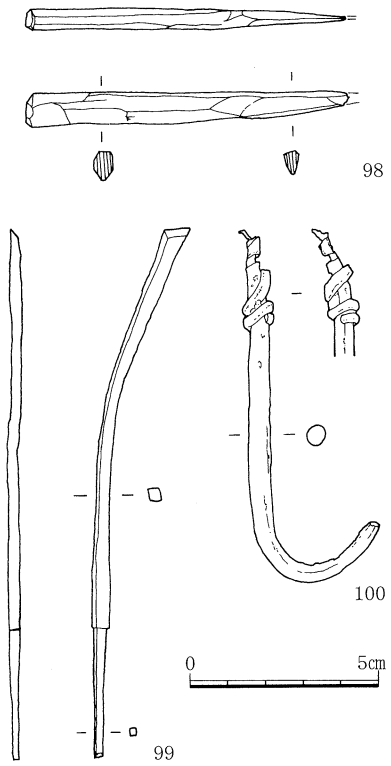
C、高杯、鉢A・B、鉢、甑、鍋、甕、竈がある。杯A（57～68）は、口径の大きさからⅠ〔口径18.6～19.0cm〕（57～59）、とⅡ〔口径13.4～14.3cm〕（63～65）に分けられる。60～62・66～68は、小破片のため口径が不明だが、口縁部の形状から、60～62はⅠ、66～68はⅡに属すと考えられる。皿A（79～81）は、口径が約22.0cmで、3点ともほぼ同じ大きさである。82～84は皿Aで、小破片のため、口径は不明。杯Aと皿Aの調整は、底部外面から口縁部下半にケズリをするもの（58・64～66・79～81・83）が多く見られ、口縁部外面には横方向のミガキがあるもの（57～64・67～81・83・84）が大半をしめている。内面には、一段の斜放射状暗紋（63・64・80・81・83・84）と二段の斜放射状暗紋（57～62・66～68）を施すものがあるが、暗紋がないもの（65・82）もある。杯C（73）の底部は残存しないが、やや丸底ぎみになると思われる。口縁部内外面ともヨコナデ調整する。72は口縁部の形状から高台付きの皿になると思われる。口縁端部がやや内傾するのが特徴的である。ヨコナデの後、ミガキ調整。内面には一段の粗い斜放射状暗紋がある。蓋は、口径が24.0cmを越すもの（69）と15.0cmのもの（71）がある。いずれもヨコナデの後、ミガキ調整。69は皿蓋の可能性がある。椀C（70）は、内面と口縁部外面上半はヨコナデ調整。底部外面から口縁部半ばまでは指頭圧痕が消されずに残っている。鉢A（85・86）は、いずれも体部内外面の上半にハケメ痕跡が残る。86の体部下半はケズリ調整している。鉢D（78）はハケメとケズリの痕跡が残る。この他に、鉢に分類できるもの（74～77）があるが、口縁部から体部上半の一部が残るだけで、全形は不明である。甕（87～97）は、大半が破片で、全形が分かるものが少ないが、口縁部の形態的特徴から6つに分類できる[2)]。87は、口縁端部内側が小さく丸く肥厚するA形態。88は、口縁端部が外傾するC形態。89～92・95は、口縁部が内彎しながら立ち上がり、口縁端部は内傾するI形態。93は、口縁部が内彎しながら立ち上がり、口縁端部は外傾するJ形態。94・97は、口縁部が外反しながら立ち上がり、口縁端部を丸くおさめるK形態。96は、内彎しながら斜め外上方に開く口縁部で、口縁端部の内側が玉縁状に小さく肥厚するM形態である。I形態に属する甕が多い。

須恵器には、杯A・B・H、杯、高台付皿、蓋、鉢A、壺、甕がある。杯A（35～41）は、やや丸味をおびた底部（35～38）と平坦で広い底部（39～41）のものとがある。いずれも口縁部内外面はロクロナデ、底部外面はヘラキリ痕跡を残す。杯B（45・46・50・51）は、底部外面をロクロケズリするもの（45・51）とロクロナデするもの（45）がある。45・46は、低い高台がつく。杯H（52）

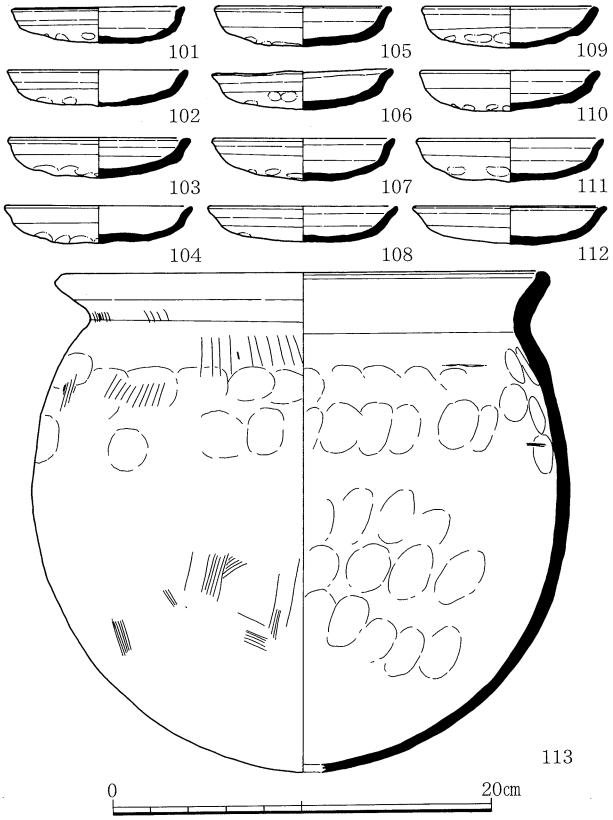
2)　古代の土器研究会『古代の土器4　煮炊具（近畿編）』1996。



井戸SE36出土土器（飛鳥時代）　1/4



井戸SE36出土木製品・金属製品　1/2



SX152出土土器　1/4

は、ロクロナデ調整。混入品か。53は杯になると思われる。底部外面はロクロケズリ、その他はロクロナデ調整。蓋は、縁部にカエリが付くもの（42～44・48）と付かないもの（49）とがある。頂部外面をロクロケズリするもの（43・44・48・49）が多いが、ロクロナデ調整（42）もある。鉢（55）は、内外面ともロクロナデ調整。壺（56）は、高台の形状からみて、長頸壺になると考えられる。ロクロナデ調整する。

これらの土器は、下ツ道西側溝SD1900A出土土器[3]と型式的特徴が共通し、平城京造営直前の様相を反映する一括資料と考える。　（三好美穂）

木製品・金属製品　98は刀子形木製品である。残存長8.5cm、幅0.9cm、厚さ0.6cm。刃部は両側面を削って表現しているが、かなり分厚い。99は鉄鏃である。全長14.5cm、茎の長さ3.5cm、刃部幅0.7cm、身は0.4cm角の方柱状である。身の曲がりを復原すると、刃部は切出し状になると考えられ、偏鋭（かたするど）と称される型になると思われる。100は、鉤形鉄製品である。残存長9.2cm、直径0.5cm。類例から推測すると、上部で輪を作り、折り返し、自身に巻きつけたものと考えられる。（松浦五輪美）

奈良・平安時代の遺物　土器、瓦がある。

土器　土師器、須恵器の他に製塩土器、円面硯2点、判読できない墨書土器1点がある。ここでは、SX152出土土器について報告する。

土師器皿C、甕がある。皿C（101～112）は、口縁部が外反しながら斜め外上方に開き、口縁端部が内傾するものが多い。口縁部内外をヨコナデ調整する。甕（113）の体部内外面には、成形時のタタキ・あて具痕跡が消されずに残り、外面にはハケメの痕跡がわずかに残る。　（三好美穂）

瓦　遺物整理箱で12箱分が出土。丸瓦・平瓦が大半で、破片数（重量）は、丸瓦が602点（38.06kg）、平瓦が1,215点（74.385kg）、いずれか不明のものが446点（5.54kg）の計2,263点（117,985kg）である。他に軒丸瓦が5点、軒平瓦が3点、桟瓦がある。軒瓦の型式と点数は、軒丸瓦が6284Bが1点、型式不明が4点、軒平瓦が6664Hが1点、Iが1点、型式不明が1点である。　（山前智敬）

3)　奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅸ』1978。

2．JR奈良駅周辺土地区画整理事業に係る発掘調査

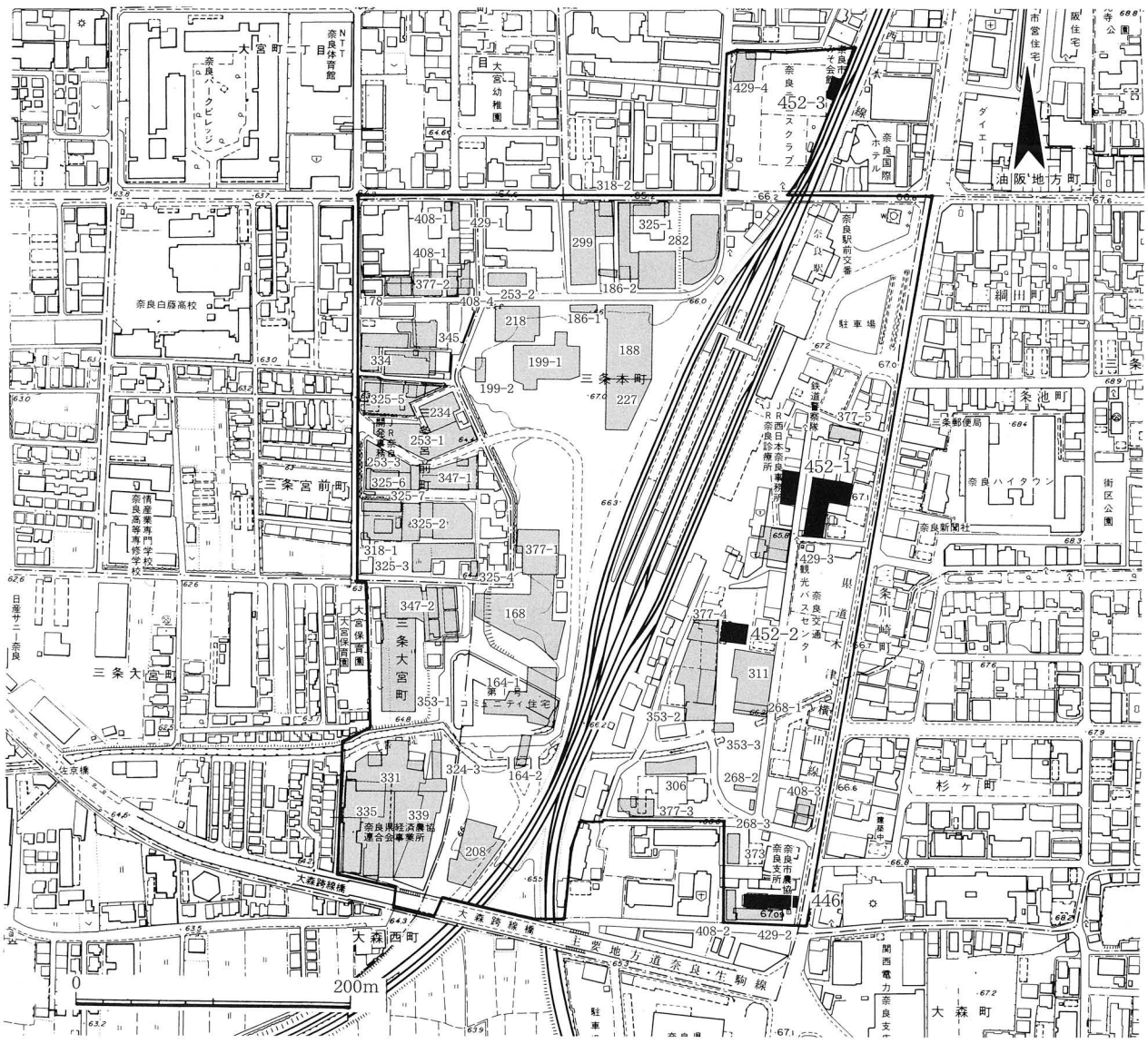
この調査は、奈良市がJR奈良駅周辺で進めている土地区画整理事業について実施したものである。この事業に係る調査を昭和63年度から継続的に実施しており、JR奈良駅の西側に関しては、主要な部分の調査が進み、遺跡の様相が明らかになりつつある。

今年度は、駅の東側において、臨時交付金事業として4箇所で合計1,845㎡の調査を実施した。初年度からの総発掘面積は40,893㎡になった。

本文中の遺構番号は、事業地内で坪ごとに付けている通し番号であり、近隣の発掘区から続く遺構のうち、今回の調査で遺構の性格が明確になったものについては、遺構の種類を示す記号を変更したものがあるが、番号はそのままである。

平成12年度　JR奈良駅周辺土地区画整理事業地内発掘調査一覧表

遺　跡　名	調査次数	事　業　名	調　査　地	調査期間	調査面積	調査担当者
三条遺跡・平城京跡 左京四条五坊五坪	HJ446	臨時交付金事業（繰越）	三条本町376-6、377-1	平成12.5.16 ～ 7.6	323㎡	久保邦江
平城京跡 左京四条五坊七坪	HJ452-1	臨時交付金事業	三条本町528、ほか	平成12.7.24 ～ 10.13	1,170㎡	久保邦江
平城京跡 左京四条五坊六坪	HJ452-2	臨時交付金事業	三条本町334-1	平成12.11.6 ～ 12.5	250㎡	久保邦江
平城京跡 左京三条五坊五坪	HJ452-3	臨時交付金事業	大宮町1丁目26-3	平成12.12.4 ～ 12.26	102㎡	久保邦江



JR奈良駅周辺土地区画整理事業地内の調査　発掘区位置図　1/5,000

(1)　三条遺跡・平城京跡（左京四条五坊五坪）の調査　第446次

調査地は、平城京の条坊復原では、左京四条五坊五坪の南西部に位置している。同坪内では、過去に6度の発掘調査を実施している（市第268-2・-3次調査、市第373次調査、市第408-2・-3次調査、市第429-2次）。西隣接地で市第408-2次調査（平成10年度）、南隣接地で市第429-2次調査（平成11年度）を実施しており、四・五坪坪境小路、弥生時代後期末～古墳時代初頭の河川、粘土採掘坑を検出している。

今回の調査では、水路をはさんで東側（東発掘区、297㎡）と、西側（西発掘区、26㎡）の2箇所に発掘区を設定した。

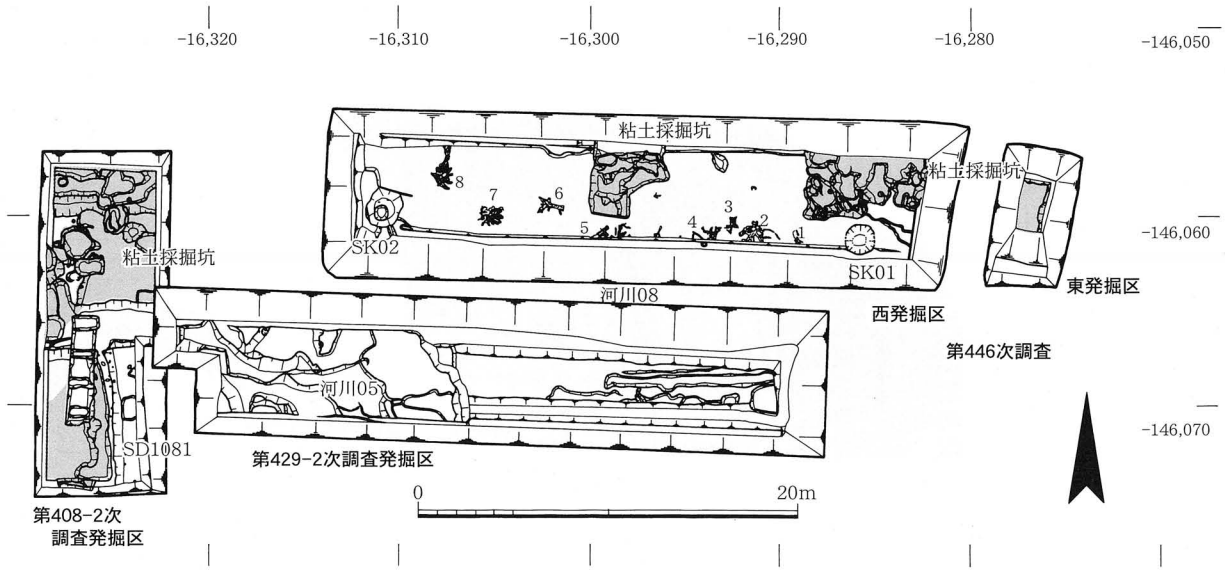
基本層序　上から瓦礫混じりの灰色土（造成土、1.3m）、暗黒灰色粘土（耕土、0.2m）、小礫混じりの灰色土（0.15m）、灰褐色土（0.2m）、奈良時代以降の河川埋土の橙灰褐色砂質土（0.1m）、橙灰褐色粘質土（0.1m）、河川08埋土の灰褐色細粒砂(0.1m)・淡灰色粗砂（0.1m）・暗灰色粘土（灰色細砂のラミナを含む、0.2m）・暗灰色腐植粘土（0.1m）と続き、縄文時代晩期の遺物を含む砂混じりの淡灰色粘土（谷埋土、0.5m）、灰色・黄褐色シルトの無遺物層に至る。灰色・黄褐色シルトの上面は、北東から南西に向かって緩やかに下り、谷地形になっている。この上面の標高は、発掘区東端で65.0m、同西端で64.1mである。

縄文時代の遺構が灰色・黄褐色シルトの、弥生時代の遺構が淡灰色粘土の、時期不明の遺構が小礫混じりの灰色土の、それぞれ上面に存していたと考えられる。

検出遺構　縄文時代の土坑1基、弥生時代の土坑1基、河川1条、時期不明の粘土採掘坑、溝1条である。

SK01は、西発掘区南東部で検出した縄文時代の土坑で、東から西へ降る谷底の東縁に掘削されている。掘形は、平面が円形のボウル状で、直径1.5m、深さ0.5mである。埋土は、上から縄文時代晩期中葉の土器を含む炭化物混じりの淡褐色粘土、炭化物・有機物混じりの灰褐色粘土で、底に灰色中粒砂が堆積している。この底面から押し潰された状態の堅果が少量出土した。取り残されたものであろう。湧水層を掘り抜いているので、堅果は水漬けであったと考えられる。したがって、この土坑は、水を利用して堅果を貯蔵するタイプの「低湿地型貯蔵穴」であると思われる。堅果の種類を同定した結果、同定可能なものは、すべてクヌギであった。(154頁参照)

SK02は、西発掘区南西隅で検出した弥生時代の土坑である。弥生時代の河川08西岸に掘削され



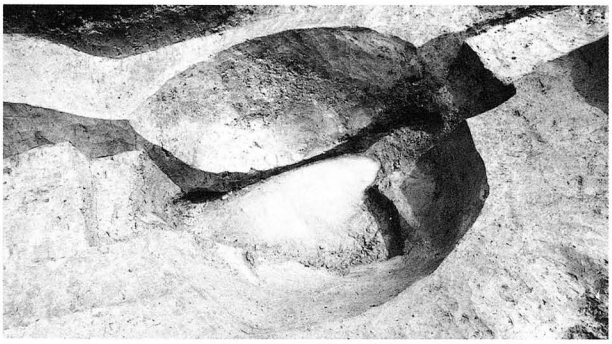
遺構平面図　1/400

ている。平面形は楕円形で、長径2.1m、短径1.7mで、2段に掘られている。埋土は暗灰色腐植粘土である。土坑のすぐ北側には、長さ1.9m、幅0.2mの板が立てられており、上部施設があった可能性がある。河川08の汀に掘られており、貯木のための施設とも考えたが、断定できない。埋土から弥生時代後期末の土器が出土した。

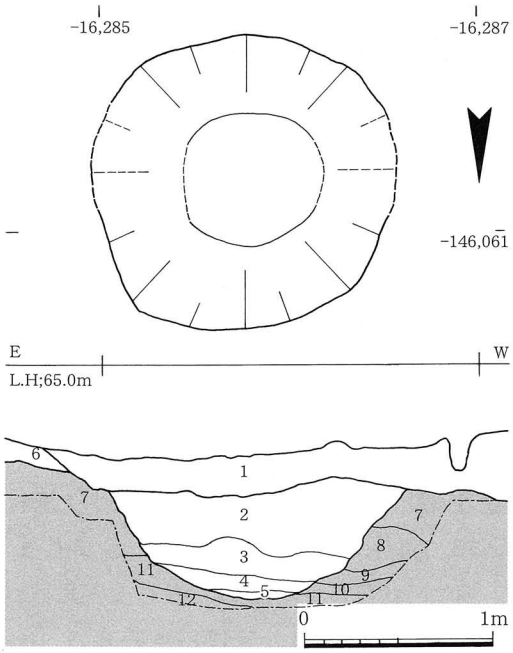
河川08は、西発掘区のほぼ全面で検出した自然の河川である。東西両岸を確認し、幅員が26mであることが判明した。市第429-2次調査と同様に弥生時代後期末の土器、石器、木製品が出土した。埋土の最下位の暗灰色粘土層には、灰色細砂のラミナを含むことから、時々、水が溢れ、水浸しになっていた時期があると推定される。

また、河道底で樹木の株を確認した。8株のサンプルを採取し、うち6株を樹種同定し、1株を^{14}C年代測定した（156頁参照）。その結果、樹種は、コナラ属アカガシ亜属、サクラ属、エゴノキ属であり、補正^{14}C年代は1,980±60年BPであった。エゴノキは、水際に生えることから、弥生時代中期には、付近に水流があったと推定できる。

西発掘区の中央部と北東部、東発掘区の全面で粘土採掘坑を検出した。重複の度合いが著しく、個々の採掘坑の規模は不明である。出土遺物はなく、時期は不明である。なお、これと同じ面で、時期不明の東西溝1条を検出した。　（久保邦江）

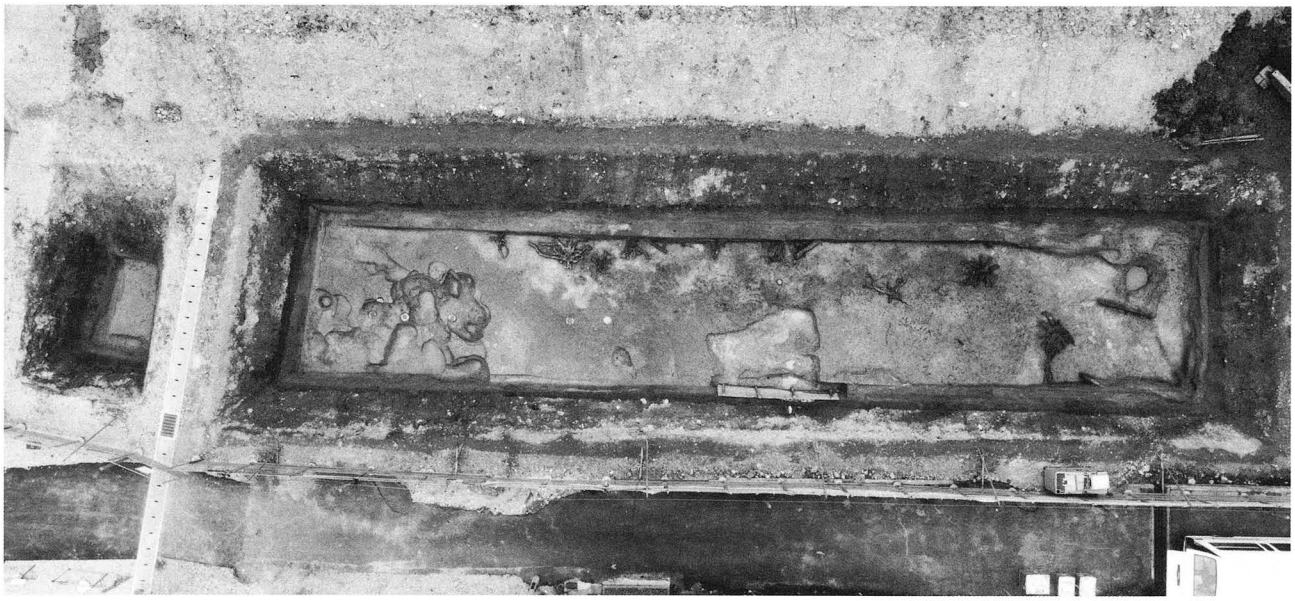


土坑SK01（北東から）



1.淡灰色粘土（砂が混じる）
2.淡灰褐色粘土（炭化物が混じる）
3.灰褐色粘土（炭化物、有機物が混じる）
4.灰色中粒砂
5.灰色中粒砂（堅果類が混じる）
6.淡灰色粘土
7.灰色、黄褐色シルト
8.青灰色粘土（砂が混じる）
9.青灰色粘土
10.灰色粗砂・中粒砂
11.青灰色粘土
12.灰色中粒砂

土坑SK01平面図及び断面土層図　1/40



発掘区全景（上が南）

出土遺物　縄文時代の土器、石器、弥生時代の土器、石器、木製品、奈良・平安時代の土師器、須恵器、丸瓦、平瓦があり、全体で遺物整理箱20箱分出土した。

石器　22点出土した。内訳は、縄文時代の遺物包含層から、剥片6点、石核1点、砕片1点の計8点、河川08から、スクレイパー1点、楔形石器1点、剥片8点、石核3点の計13点、弥生時代の遺構面直上から、楔形石器1点である。

縄文土器　縄文時代の土器（1～5）は、大半が破片で、器面が摩耗し、調整が不明なものが多い。1・2は、口縁部の破片で、外面に条痕が残っている。3は、体部の破片で、外面にケズリが残っている。1・2・3とも晩期中葉の深鉢と考えられる。SK01の埋土から出土した。4は、晩期後葉の船橋式の深鉢の口縁部で、出土層位は不明であるが、SK01周辺から出土した。5は、晩期後葉の長原式の深鉢の口縁部で、SK01埋没後に堆積した谷の埋土から出土した。

弥生土器　河川08から出土した弥生土器には、甕、高杯、器台、手焙形土器、鉢、壺がある（口絵1）。弥生時代後期末のものであると考えられる。

甕の口縁部の形態は、受け口状のもの（6・7）と、外傾するもの（8～12）がある。6の口縁部に刺突紋、口縁部と体部との境に櫛描波状紋を施している。外面の調整は、ナデ調整、ハケ調整と、ハケの後にナデ調整をしているものが多く、タタキによって整形したままのものが少ないのが特徴である。

高杯は、杯部の口縁が外反するもの（13・14）が多い。杯部の調整は、内外面とも縦方向のミガキで、内面底部には放射状にミガキ調整をしている。脚（15）の上部は、中実の柱状で、下部は、裾に向かって広がる。下部の外面に縦方向のミガキを施し、裾の内面に横方向のナデ調整をしている。上部と下部との境の4箇所に円孔を配している。

器台は、ミガキで仕上げたもの（16）と、ナデで仕上げたもの（17）がある。16は、外面に縦方向のミガキを施している。裾部内面を横方向のハケによって調整している。17は、内外面をナデ調整し、3箇所に円孔を配している。

18・19は、蔽部を欠くものの、手焙形土器と思われる。ともに体部の最も膨らむ部分に突帯を貼り付けている。18は、全体に指頭圧痕が残り、突帯の貼り付け方も粗雑で、非常に粗い作り方をしている。19は、ハケで調整した後、さらにナデて、器面を平滑に仕上げている。突帯の上面に上から刻目を施している。

鉢（20）の外面は、整形時のタタキメが全体に残り、内面は横もしくは斜め方向のハケ調整を施している。底部には、手づくねの低い脚台を付けている。

壺（21～27）には、広口壺、短頸壺、長頸壺、小型長頸壺がある。外面の調整は、縦方向のミガキによるものが最も多いが、ハケやナデによるものもみられる。27の小型長頸壺には、粘土接合痕や、指頭圧痕が残り、手づくねで製作されている。口縁端部に、沈線を施すもの（21）、櫛描波状紋と竹管円形浮紋を施すもの（22）がある。

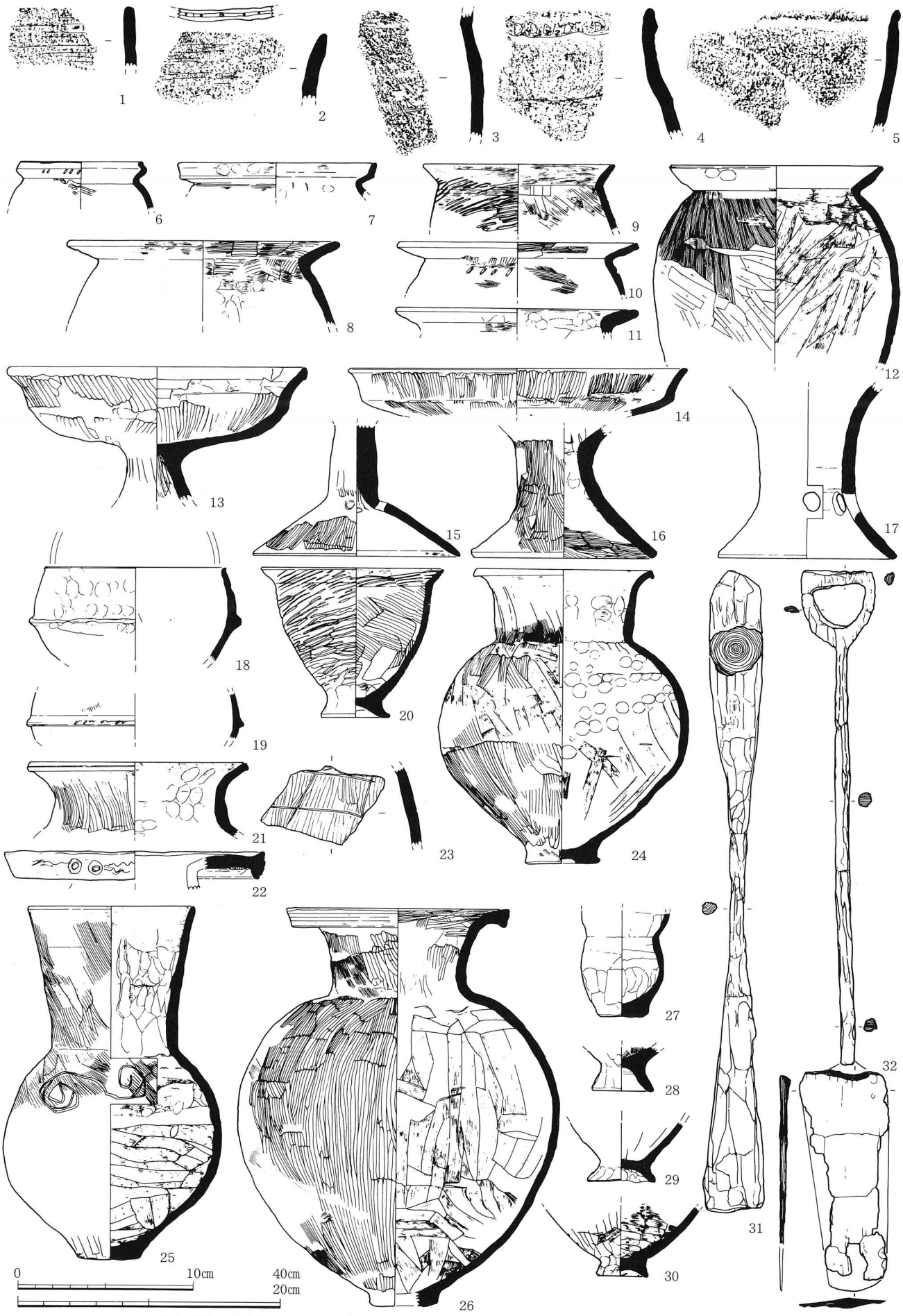
23・25は、絵画（記号）土器である（口絵2・3）。23は、壺の体部の破片である。「井」の字状に線刻しており、絵画の一部であると思われる。25は、長頸壺の体部上半に渦巻きの両端をS字状につなげた記号を線刻している。龍を表現したものと考えられる。

28～30は、脚台である。おそらく甕か鉢につくものと考えられる。河川08では、市第429-2次調査の出土分も含め、脚台の破片が目立って多い。

木製品　河川08から100点以上が出土しているが、多くは板材の破片である。

31は竪杵である。無節式[1]で、搗き部の一端を丸く仕上げ、もう一端は平坦である。長さ97cm、搗き部径9.3cm、握部径1.8cm。32は一木で作られた平鋤である。把手の形状は、逆三角形で、同形の孔を開けて握り部を作り出している。鋤身の肩部は角張っており、刃部は中央に明瞭でない稜を有し、断面は菱形である。柄の長さ75cm、刃部残存長31.9cm、柄径2.3cm、身厚1.5cmである。他に組合せ式の鋤の身が2点出土した。　（久保邦江）

1)『木器集成図録　近畿原始篇』　奈良国立文化財研究所　1993。



出土土器・木製品　1～5は1/3、6～30は1/4、31・32は1/8（網掛部は吹きこぼれを示す）

(2)　平城京跡（左京四条五坊七坪）の調査　第452-1次

今回の調査地は、平城京の条坊復原では、左京四条五坊七坪の中央部からやや南寄りに位置する。同坪内では、今回の発掘区から北東約40mの位置で、市第377-5次調査（平成9年度）が実施されており、時期不明の掘立柱建物、溝、近世以降の埋甕遺構を検出している。

今回の調査では、道路をはさんで西側（西発掘区、314㎡）と、東側（東発掘区、856㎡）の2箇所（合わせて1,170㎡）に発掘区を設定した。

西発掘区　基本的な層序は、上から造成土の黒灰色瓦礫混じり土（0.2～0.4m）、灰色粘質土（0.1m）、淡灰褐色砂質土（0.1m）、淡灰褐色粘質土（0.1m）、暗茶褐色土（0.1m）と続き、遺物を含まない黄褐色粘質土に至る。遺構が存する面は、この上面であり、標高は概ね65.5mである。

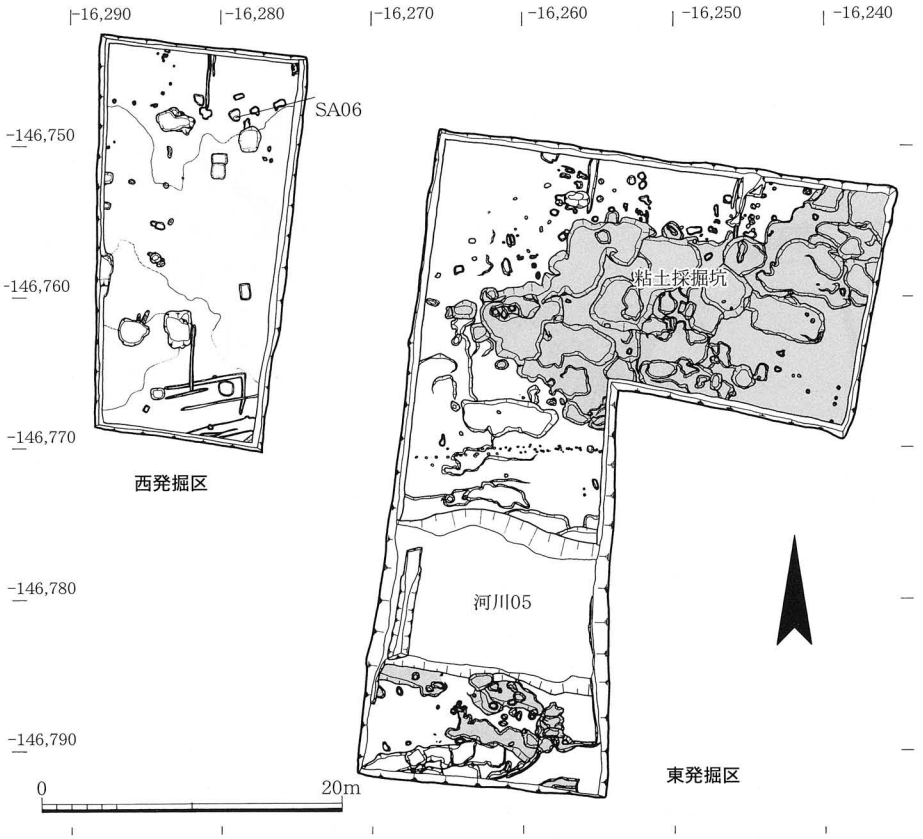
検出した遺構は、柱穴、土坑、溝である。柱穴11個のうち、発掘区北東部の3個が1.5mの等間隔でならんでおり、掘立柱建物の一部である可能性がある（SA06）。しかし、これ以外に建物としてまとまるものはなかった。削平され消滅しているものもあると考えられる。いずれの遺構からも、遺物がほとんど出土せず、遺構の時期は不明である。

発掘区中央部には、東西方向の窪み（網目表示）があり、浅い谷状になっている。窪みの埋土から遺物は出土せず、いつの時期の谷であるかは不明である。

東発掘区　基本的な層序は、上から瓦礫混じりの灰色粘質土（造成土、0.1～0.3m）、黒灰色砂質シルト（耕土、0.1m）、灰色シルト（床土、0.15m）と続き、遺物を含まない黄褐色砂質シルトに至る。この上面が遺構の存する面である。遺構面の標高は東端で66.0m、西端で65.5mである。

検出した遺構は、粘土採掘坑、河川、柱穴である。

発掘区北東部では、多数の粘土採掘坑が集中してみられた。平面形態は、円形・不整円形・隅丸方形である。大きさは、大きいもので長径5m、



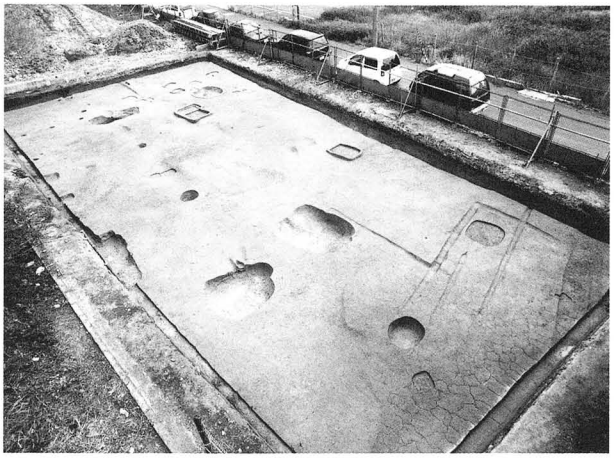
遺構平面図　1/500

短径2.5mである。出土遺物は、大半が奈良時代の土器で、若干、瓦器も含まれている。

発掘区の北西部では、黄褐色砂質シルト層に含まれる砂が多くなり、良質の粘土がとれないためか採掘されていない。また、柱穴をいくつか検出したが、建物としてまとまるものはなかった。

発掘区南部で、河川05を検出した。東西方向の河川05は、幅13m、深さ2.5mである。埋土は大きく上層（砂混じりの灰色シルト・灰色シルト）と下層（灰色細砂、中粒砂、粗砂、砂礫によって構成される水成堆積層）とに分かれる。上層の堆積状況からみて、河川05が砂・礫で埋没した後の窪地を水田耕作に利用していた可能性が高いと考えられる。下層の埋土から、奈良時代の土器・瓦が出土し、人面墨書土器、ミニチュア竈・甑、土馬等の多種の祭祀関連遺物や軒平瓦6682型式D種が含まれている。検出した位置、出土遺物から判断して、市第429-3次調査（平成11年度）で検出している河川に繋がる可能性が高い。

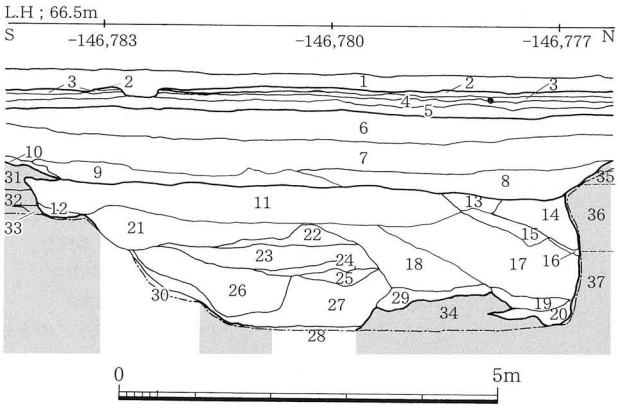
（久保邦江）



西発掘区全景（南西から）

河川05（東から）

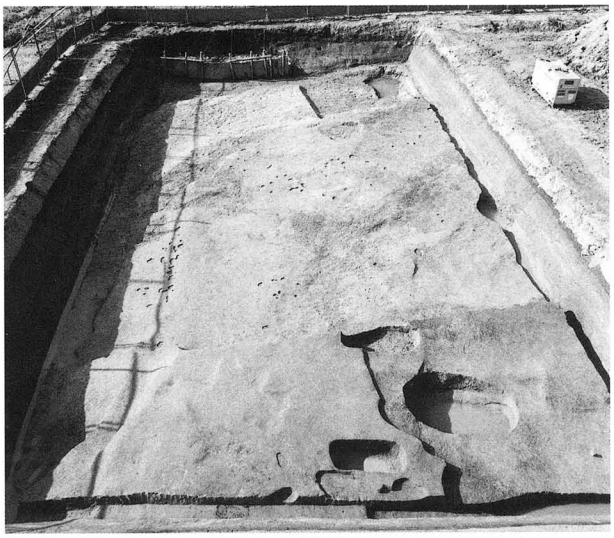
東発掘区全景（上が北）



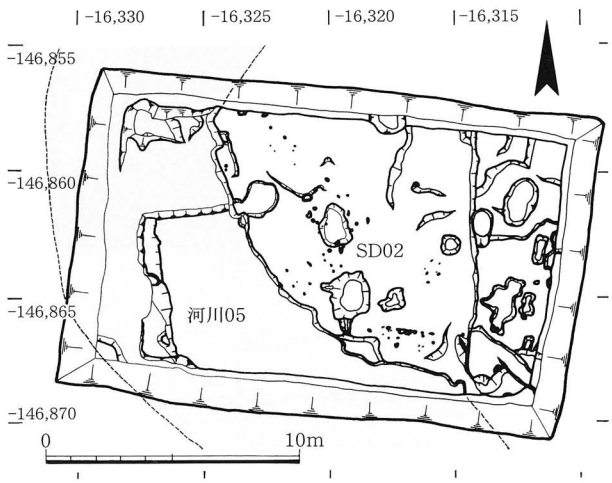
1. 造成盛土
2. 黒灰色砂質シルト
3・4・5. 灰色砂混じりシルト
6. 灰色砂混じりシルト
7. 灰色砂混じりシルト
8. 灰色・青灰色シルト
9・10. 灰色シルト
11. 灰色砂礫
12. 灰色・淡灰色粘土
13. 灰色礫
14. 灰色・淡灰色粘土
15. 暗灰色砂
16. 灰色細砂
17. 灰色中粒砂
18. 灰色小礫・礫
19. 灰色粗砂・礫
20. 淡灰色粘土
21. 淡灰色砂
22. 灰色粘土
23. 灰色中粒・粗砂
24. 緑灰色粘土
25. 灰色砂礫
26. 灰色砂
27. 灰色中粒砂
28. 灰色砂礫
29. 淡灰色粘土
30. 灰色粘土
31. 黄褐色シルト
32. 灰色砂礫
33. 灰色粗砂
34. 灰色砂礫
35. 黄橙色粘土混砂礫
36. 灰色礫
（6～10　河川05上層埋土）
（11～30　河川05下層埋土）
（31～36　無遺物層）

河川05断面土層図　1/100

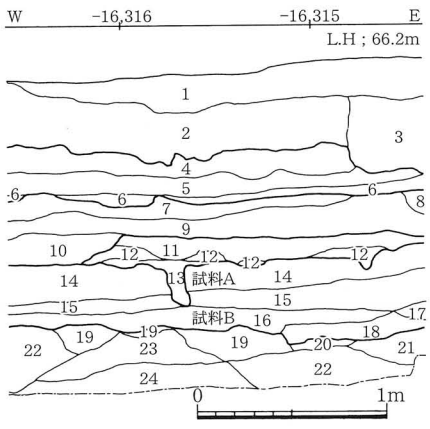
(3)　平城京跡（左京四条五坊六坪）の調査　第452-2次



発掘区全景（東から）



遺構平面図　1/300



1～3. 造成土
4. 暗灰色土
5. 灰色土
6. 灰色土（灰色粘質土混じり）
7. 灰褐色土
8. 橙褐色土
9. 灰色土
10. 淡灰褐色粘質土
11. 灰色細砂
12. 淡灰色砂
13. 橙褐色・灰色細砂
14. 灰色粘土
15. 灰色粘土・淡灰色細砂
16. 灰色粘土
17. 褐色砂
18. 灰色細砂・中粒砂
19. 青灰色粗砂（やや暗）
20. 灰褐色砂・小礫
21. 橙褐色砂礫
22. 青灰色細砂
23. 橙灰褐色砂礫
24. 灰色粗砂
試料A　分析試料採取地点
試料B　分析試料採取地点

発掘区北壁土層図　1/40

調査地は、条坊復原では、左京四条五坊六坪の北西部に相当し、敷地の西端に三・六坪坪境小路の東側溝が想定される。また、南の五坪では、市第311次調査（平成6年度）で、南北に長い奈良時代の池状遺構SD02（旧SX02）を検出している。今回は、その東岸の延長線上に発掘区を設定し、小路側溝の検出を目的として調査を実施した。

発掘区内の基本的な層序は、地表面から0.3～0.4mは造成土で、その下0.6～0.85mは近世・現代の耕土及び床土、さらに0.2mの中世の耕土と続き、淡灰褐色土に至る。遺構が存する面は、淡灰褐色土上面で、標高65.0mである。

河川と溝を検出した。

河川05は、南東から北西に流れる。幅員は6.6mである。埋土は、概ね灰色砂礫であり、灰色粗砂、灰色中粒砂が砂礫の間に堆積している。出土遺物の大半は、8・9世紀の土器・瓦で、土馬・人面墨書土器・ミニチュア炊飯具（甑・竈）などの祭祀関連遺物が多い。また、型式不明の軒平瓦が3点と弥生土器が少量出土した。

SD02は、発掘区中央で検出した南北方向の溝である。東辺から幅15m分を検出した。深さは0.5mである。埋土から瓦器片が出土したが、位置関係からみて、第311次調査の奈良時代の遺構SD02と同一の溝と思われる。また、埋土に根の痕がみられ、土壌分析でイネのプラント・オパールを検出したので、埋まった時期には水田化していたと考えられる（159頁参照）。河川05との先後関係は不明だが、埋まった時期は、埋土の重複関係からみて、河川05より新しい。河川が埋まった後の中世に、奈良時代の溝SD02を利用し、水稲耕作を行ったものと思われる。

また、SD02は、坪境小路の東側溝が想定される位置にある。しかし、幅が15m以上あり、通有の小路側溝とは考えがたいので、想定した位置よりも西にずれているのかも知れない。仮に小路側溝とすれば、あるいは運河の機能も兼ねた溝であったかも知れないが、小路でそのような例はこれまでに知られていない。　（久保邦江）

(4)　平城京跡（左京三条五坊五坪）の調査　第452-3次

調査地は、条坊復原では、左京三条五坊五坪の中央に位置する。同坪内では昭和62年に市第131次調査を実施し、五・十二坪の坪境小路東側溝を検出している。また、平成11年度には今回の調査地から西へ60mの位置で、市429-4次調査を実施しており、奈良時代の河川とそれに伴う堤防、溝、柱穴を検出している。

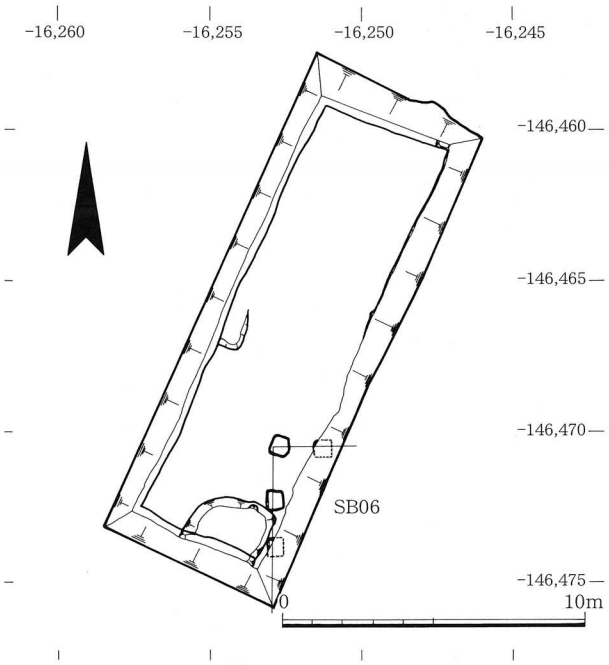
発掘区内の基本的な層序は、造成土（0.8～1.5m）以下、河川成の葉理が発達した奈良時代の遺物を含む砂・シルト（0.6m、淡灰褐色シルト・灰色細砂・褐色シルト・灰褐色シルト・灰褐色中粒砂）、奈良時代の遺物を含む腐植質の褐色シルトもしくは茶褐色シルト(0.2m)、弥生時代の遺物を含む灰色砂質シルト(0.08m)と続き、遺物を含まない淡灰色シルトに至る。

遺構が存する面は、河川成砂上面（標高66.1～66.3m）、褐色シルト上面（標高65.6m）の2面である。河川成砂の上面で近世の耕作溝5条、灰色砂質シルトの上面で掘立柱建物1棟、根株痕跡を検出した。

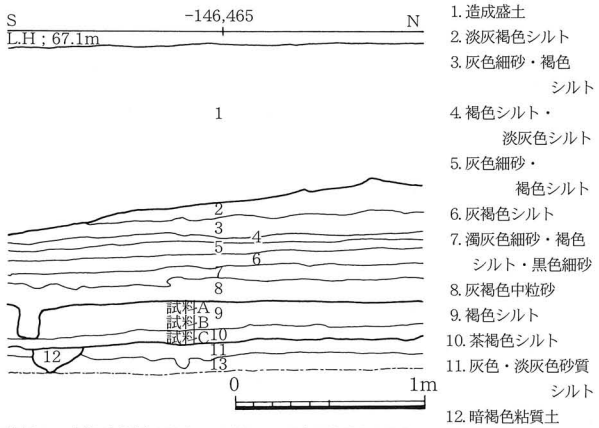
SB06は、発掘区南東部で検出した掘立柱建物である。南北方向2間分、東西方向1間分を検出した。柱間は、南北方向1.8m（6尺）で、東西方向は柱間1.5m（5尺）になるものと思われる。これらの柱穴は、奈良時代の遺物を包含する褐色シルトの上面から掘り込まれており、奈良時代の遺構であることがわかる。

発掘区全面で円形（直径10cm前後）のイネ根株と思われる痕跡を多数検出した。痕跡には褐色シルトもしくは、茶褐色シルトが混入していることから、その土壌を採取し、プラント・オパール分析を行った（159頁参照）。分析の結果、イネ科のプラント・オパールを検出し、奈良時代以降、河川堆積物で埋没するまでの間、水田として利用されていたことが判明した。なお、発掘区中央の一部を淡灰色シルト上面まで掘削したが、遺構を検出できなかった。また、河川成の堆積層は、発掘区全面でみられ、市第429-4次調査で検出した河川が東に広がっている可能性がある。（久保邦江）

発掘区全景（南から）



遺構平面図　1/250



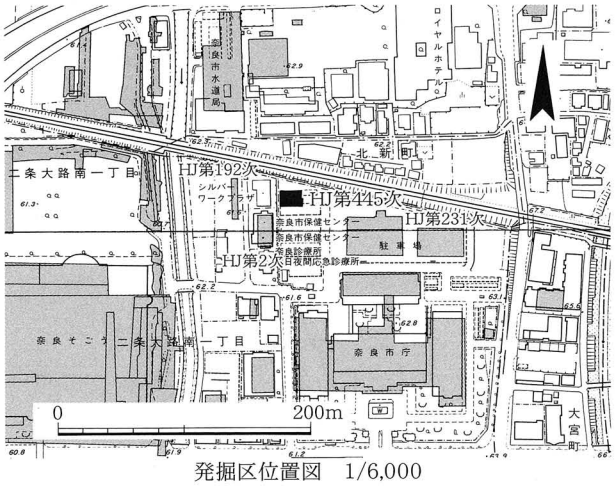
1. 造成盛土
2. 淡灰褐色シルト
3. 灰色細砂・褐色シルト
4. 褐色シルト・淡灰色シルト
5. 灰色細砂・褐色シルト
6. 灰褐色シルト
7. 濁灰色細砂・褐色シルト・黒色細砂
8. 灰褐色中粒砂
9. 褐色シルト
10. 茶褐色シルト
11. 灰色・淡灰色砂質シルト
12. 暗褐色粘質土
13. 小礫混じりの淡灰色砂質シルト

試料A　分析試料採取地点　　試料C　分析試料採取地点
試料B　分析試料採取地点

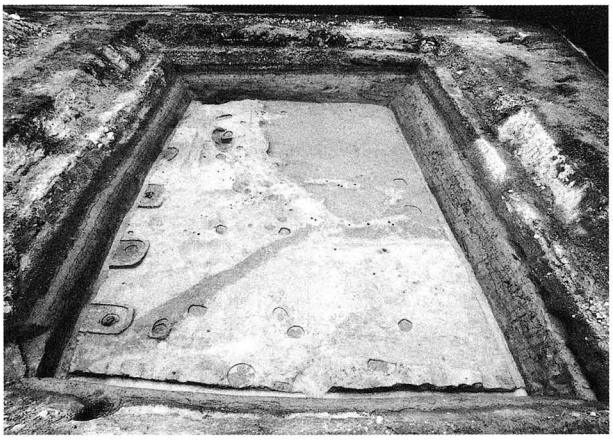
発掘区西壁土層図　1/40

3．平城京跡（左京三条二坊九坪）の調査　第445次

調査次数	HJ　第445次	**調査期間**	平成12年5月1日～6月9日
事業名	庁舎等施設整備事業	**調査面積**	180㎡
届出者名	奈良市長	**調査担当者**	大窪淳司
調査地	二条大路南1丁目1-1		



発掘区位置図　1/6,000


発掘区全景（東から）

調査地は、平城京の条坊復原では、平城京左京三条二坊九坪の北部に相当する。九坪では、過去に2回の調査（市第2次調査・昭和54年度、市第192次調査・平成2年度）が行なわれており、奈良時代後半の大型の建物遺構を検出し、一町、あるいはそれ以上の規模で班給されたと考えられている。また、調査地周辺で、古墳時代の河川が検出されていることから、奈良時代の遺構と共に、古墳時代の遺構の存在も予想された。なお、当初、東西15m、南北10mの発掘区を設定し、後に南へ3m拡張した。

発掘区の基本的層序は、造成土以下、灰白色砂質シルト、灰白色極細砂、青灰色シルト、青灰色シルト（鉄分が多い）、灰色シルト、灰白色シルト、黄色粘土混じり灰色シルトと続き、地表下約2.3mで黄色粘土の地山に至る。黄色粘土混じり灰色シルト層は7世紀及び8世紀前～中頃の遺物を包含し、奈良時代中頃に整地が行なわれたと考えられる。遺構の存する面は、整地土上面と地山上面で、標高は、整地土上面が59.4～59.8m、地山上面が59.2～59.6mで、ともに北西が低い。

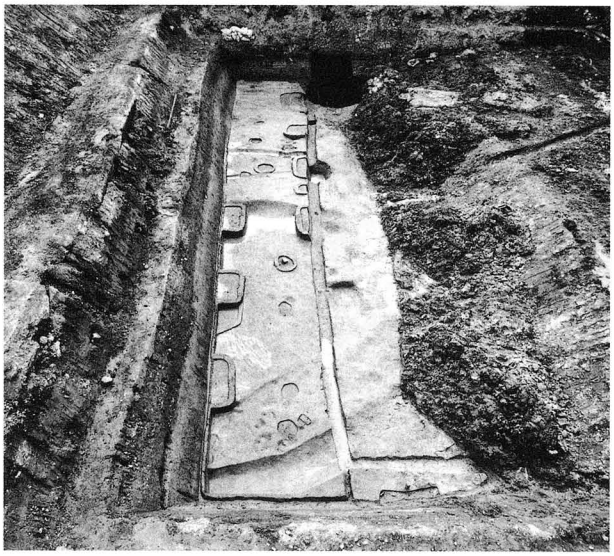
検出遺構は、地山上面から掘り込まれた溝SD01・02と、整地土上面から掘り込まれた掘立柱建物SB03～06、溝SD07、井戸SE08である。

奈良時代以前の遺構　SD01は、発掘区中央から南西方向へ延びる溝で、SD02は発掘区中央から南東方向へ延びる溝である。両者は、発掘区の中央でほぼ直角に接続する。ともに幅約0.7m、深さ約0.4mである。地山上面から掘り込まれており、8世紀半ば以前のものと考えられるが、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。

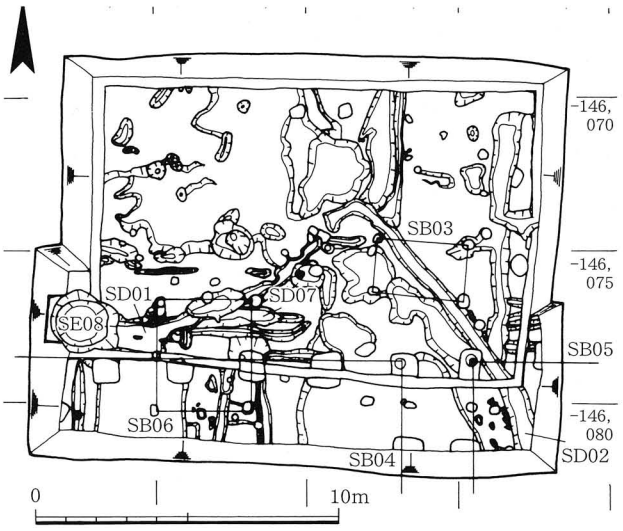
奈良・平安時代の遺構　SB03は、東西1間（3.0m）、南北1間（1.8m）の掘立柱建物である。建物は、国土方眼方位の北に対し、約3°東に振れる。柱穴埋土から8世紀末～9世紀初頭の土器が出土した。

SB04は、発掘区南部で、東西4間（9.6m）分、南北1間（2.7m）分を検出した。柱間は、東西2.4m（8尺）等間、南北2.7m（9尺）で、8世紀の土器が出土した。

SB05は、SB04の東隣で、東西1間（2.4m）分、南北1間（2.7m）分を検出した。柱穴埋土から



拡張部（東から）



遺構平面図　1/250

「大」と墨書された8世紀の須恵器杯A1点が出土した。

SB06は、発掘区西南部で検出した桁行2間（3.6m）、梁間2間（3.0m）の南北棟建物である。柱間は、桁行1.8m（6尺）等間、梁間1.5m（5尺）等間である。8世紀の土器が出土しており、重複関係からSB04より古い。

SD07は、幅約0.7m、深さ約0.3mの東西溝である。埋土から8世紀末～9世紀初頭の土器と、鞴の羽口片8点、坩堝片4点、取瓶1点、鉄滓少量が出土した。

SE08は、発掘区の西端で検出した井戸である。掘形は、平面が直径約1.6mの円形を呈し、深さが約2.0mである。枠は抜き取られていた。重複関係からSB04より古い。埋土から8世紀中頃の土器、木製品、枠材が出土した。（大窪淳司）

出土遺物　奈良・平安時代の土器、瓦、磚仏（口絵5）、土製品、木製品、鞴の羽口、坩堝、取瓶、鉄滓と、時期不明の瓦が遺物整理箱で28箱分出土した。これらのうち、主なものを以下に記す。

瓦磚　遺物整理箱で11箱分出土した。瓦の大半は丸瓦、平瓦であり、軒丸瓦8点、軒平瓦19点、磚1点がある。奈良時代の軒丸瓦の型式と内訳は、6225種別不明が1点、6298Aが1点、6313Dが1点、型式不明が5点で、軒平瓦の型式と内訳は、6641Fが1点、6663Aが4点、6664Dが2点、6667Aが2点、6691Aが3点、6721Fが1点、型式不明が5点である。また、近世以降の軒平瓦が1点である。（山前智敬）

土器　奈良・平安時代の土師器、黒色土器A類、須恵器、製塩土器が遺物整理箱で13箱分出土した。

このうち3箱分が、SB03～06、SE08、SD07から出土しており、遺構からの出土量は少ない。

SE08からは土器が2箱分出土している。この土器は、型式的にまとまっており、平城京内での8世紀中頃の土器様相の一端を知る資料であるので、以下に概要を記す。

土師器には、杯A・B・C、皿A、椀C、鉢B、高杯、壺B、甕がある。

杯A（1）の底部内面には漆膜が、口縁部外面下半には二次的に火を受けた痕跡が部分的に見られる。杯C（9）は、口縁部上半の内外面をヨコナデした後、口縁部外面に横方向の粗いミガキ調整している。内面には一段の斜放射状暗紋と螺旋状暗紋を施す。皿Aは、口径の大きさからⅠ（4）とⅡ（3）に分かれる。4は、器表面の磨滅が著しく、口縁部外面にヨコナデの調整痕が僅かに残るだけである。3の底部内面には、一段の斜放射状暗紋があり、底部外面から口縁部半ばまでをケズリで調整している。椀C（10）は、口径が17.0cmを越す大型品で、底部外面には指頭圧痕がそのまま残る。高杯（6）は、円筒技法により脚部を成形し、11面に面取りをしている。器高の低いタイプであると考えられる。鉢B（2）は、口縁部外面を粗い

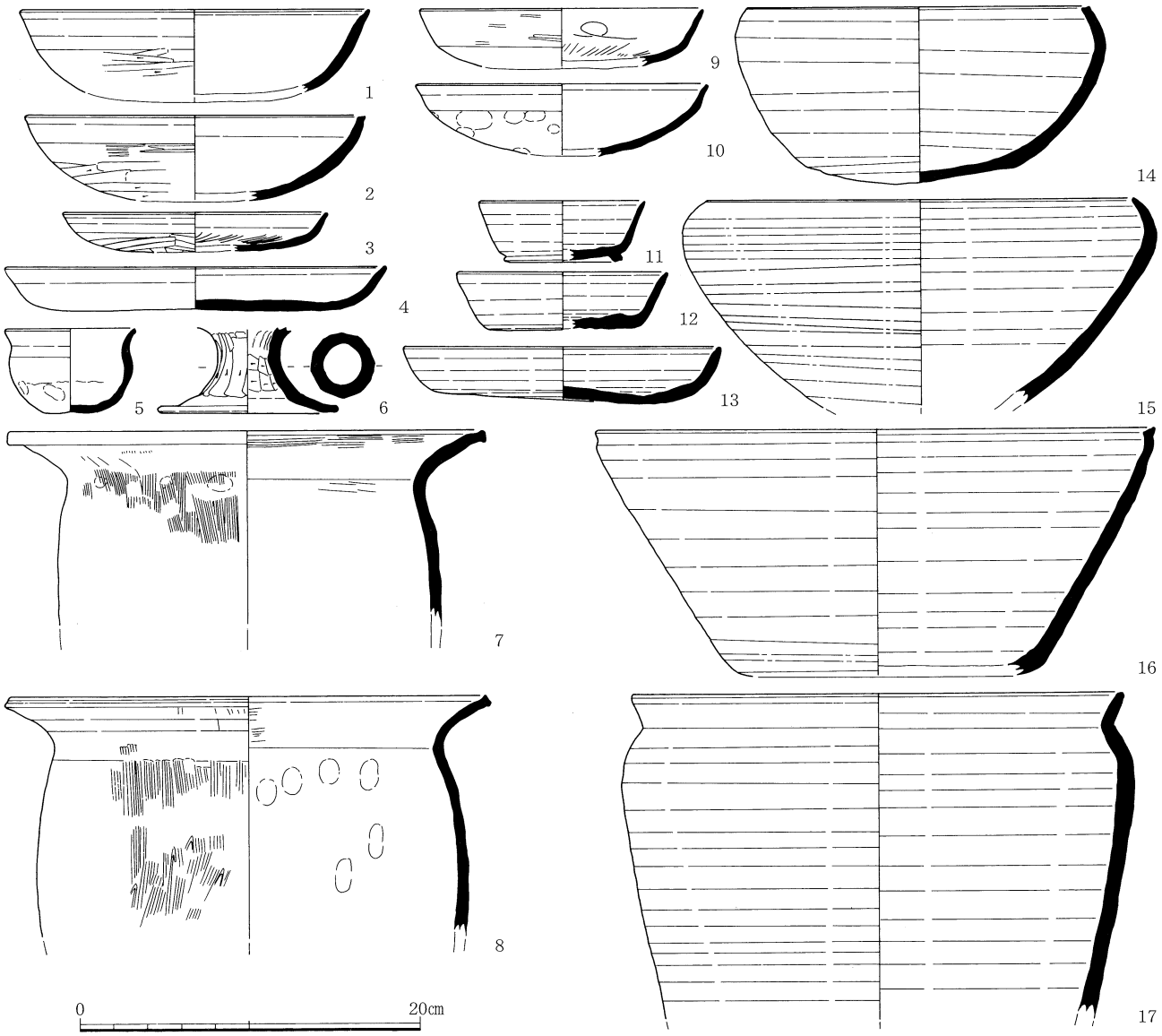
ミガキで調整している。壺Bは、人面墨書土器として使用されることが多いが、5には墨痕が見られない。完存。甕（7・8）は、丸底で、器高が約30cmの中胴タイプに復原できる。いずれも体部外面と口縁部内面にはハケメが残る。このタイプの甕は、平城京内での出土例は少ない。

須恵器には、杯A・B、皿A、鉢A、鉢、甕がある。

杯B（11）の底部は、ヘラキリされたままであるが、杯A（12）・皿A（13）の底部は、ヘラキリの後、ロクロナデ調整している。13は完存。鉢Aは、平底のもの（14）と尖底と考えられるもの（15）とがある。14はロクロナデ、15はロクロケズリで調整している。鉢Cは、平坦な底部と外上方に開く口縁部からなるもの（16）と直立する比較的長い胴部と外上方に開く短い口縁部からなるもの（17）がある。いずれもロクロナデ調整で、平城京内での出土例は少ない。　（三好美穂）

まとめ　遺構の変遷は、重複関係から少なくとも3時期が認められ、SB03、SD01・02・07以外は、奈良時代中頃～後半と考えられる。市第2次調査では、奈良時代後半の大規模な建物が検出されており、今回検出したSB04・05が同時期と考えられることから、この坪では奈良時代後半に規模の大きい建物が並んでいたものと思われる。また、鞴の羽口、坩堝、取瓶、鉄滓が出土しており、鋳造が行なわれていたものと思われる。

（大窪淳司）



井戸SE08出土土器　1/4